
FORSE

中条 剛

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FORSE

【Nコード】

N6817W

【作者名】

中条 剛

【あらすじ】

戦争は結局、いつの時代も起きる。

しかし、画期的な進化はあった。

それはヒュロルファーム。

50mはあろうかという巨大な戦闘兵器。

結局、戦争はいつの時代でも。

おきるものだ。

S F。というかロボットもの。

ちびちびと更新していきます。

E エブリスタとの重複連載です。

一ヶ月に数回、まとめでの更新となります。

見やすくしたpixiv版を投稿予定です。

序章

結局、いつの時代も戦争は起きる。

かつては機関銃を用いてドンパチ、生身の人間どうしでしている時代があつた。

かつては『戦争はやめませう』とかいうお偉いさんの鶴の一声で戦争をしなくなる時代があつた。

でも、結局、戦争はなくならなかった。

そして『生身の人間で構成された兵隊』に存在意義を見いだせなくなった。

そんな中、生み出されたもの。

ヒュロルフターム。

資本主義のある国が制作した50m級の戦闘兵器は世界に『戦争の終わり』という希望の光となった。

しかし、結局、戦争はなくならなかった。

社会主義のとある国が作り上げた対ヒュロルフターム戦闘兵器。

その名も『FORSE』。

それによって、『人』対『人』の戦争は、『ヒュロルフターム』対『FORSE』となった。

では、

残された人間は？

「今日も平和だなあ……」

と薄い緑の迷彩服に身を包んだサリドという黒髪の少年は、背伸びをしながら、言った。

「……おい。さぼるなよ。サリド」

隣でしゃがんでせつせと草をむしっている男は言った。

金髪で、無精髭を顎に生やしたその男はラッキーストライクのタバコでもくわえて、黒いサングラスをかけている方が、よっぽど似合う気がした。

だがしかしその男はあろうことか（というのはとても失礼だが）サリドと同じ年の16歳。未成年である。

少年の名は、グラムという。

「わかったよグラム。でもね。俺は朝の背筋伸ばしをしないと一日が始まらないんだよ」

「よく言って。そんなことを30分もやってるくせにか？」

グラムは皮肉るようにサリドを笑った。

「所詮、戦争はヒュルフトームとFORSEの戦いだ。人間の兵隊など、いらなくなつた。」とか偉そうに言ってたのはどこの誰だ

ったか。

確かに、戦争はなくならなかった。

それは、だれにだって解ってる。

ヒュロルフタームという存在が。

世界の戦闘のシステムを変えた。

「でも、ヒュロルフタームは最初は平和的活用だったんだぜ？ 核戦争があつて人間が住めなくなった地上を作り直すための」

「そうなのか？」 グラムは今まで抜いた草を綺麗にひとつにまとめながら、「でも、実際は違うじゃねえか。ヒュロルフタームが平和的活用の為に作られたってんなら、今俺らはこんなところにいないぜ？」

そうだな、と頷いてサリドは遠くを見る。

そこからは綺麗な青空と大きなコンクリートの建物が一、二個が見えるだけだった。

「にしてもさ」

「ん？ どうしたサルド」

「腹減った」

サリドの言葉を聞いたと同時に二人の腹の音がぐうと鳴る。

「……どうせレーションだしなあ。あのくそまずいレーション食うなら雪とか食ってたほうがマシだぜ」

グラムは立ち上がり、腰をぼんぼんと軽く叩きながら、言った。

「そうだよなー。せめて鹿とかいりやな。塩焼きとかうめーんだろうけど」

「それがこのグラディアの定めなとこだよな。グラディアの、しかもこのへんは農牧なんてやつちやいねえから鹿どころか生えてるのは野草だらけだよ」

ぶつくさ言いながら、グラムは自分の服にかけてあったホルダーから袋を取り出す。

袋を開け、そこから出したのは白い小さな正方形の形をした何か。

それをグラムは口に入れる。

「うーん。やつぱ口の渴きをなくすには水がいいよなー。こんな唾液を出させるために、わざとカラカラのものを食わせるなんてな。そのうち唾液すらもでなくなるんじゃないの？」

「そうとはいつてもさー。やつぱ唾液にも限度があんじゃないの？だからそれはあくまでも一時的なやつで、長期間の喉の乾きを癒すのは無理とかどうとか、開発した学者が教鞭で言ってたぜ」

サリドは近くにあったスコップを地面に突き立て、言った。

「そうだな。とにかく戻ろうぜ。昼飯がなくなっちまう」

「あのくそまじいレーションでも食わなきゃ力になんねーしな」

そう言って二人は基地に戻った。

ふたりは十分後、その基地にたどり着いた。

基地と言っても、二人の務める基地は移動式の基地でトレーラーのような、そんな形をしている。

「……ほんとうに、平和だなあ」

ぼつり、サリドはつぶやいた。

「ほんと、お前それしか言ってるなーな。まあ、たしかにここが戦場とは誰にもわからんけどな」

グラムはそう言って、二人分のレーションを取り出す。

「おつ、サンキュー」

そう言って、サリドはレーションを受け取る。

専用のスプーンを使ってアイスクリームのように、レーションをすくい、一口食べる。

「……うえっ、まずい。ほんとこれじつは消しゴムなんじゃないか、って思うよ」

「でも、食える消しゴムも開発されてるんだよな？ 大災害とか空襲とかあったときに食料を確保できるように、とかで」

「臭い付き消しゴムが出た時点でありえそんな気もしたけどな。結局ゴムはゴムだからまずいものはまずいんだよ」

そう言いながら、グラムはさらに一口。

「いや、そうだけどさ。こんなまずいもんばっか食ってたら兵隊の覇気も下がるんじゃないの？」

「作った人から見れば『戦いは所詮ヒュルフタームとFORSEだけ』だから兵隊に関しては二の次なんじゃないの？ あんま考えたくないけど」

と言ってサリドはレーションを口にほおり込んだ。

「さてと。また続きやっか」

「そうだな。ったくいつになったら終わるんだろうかなあ。はやく戦争らしいことやりたいぜ」

グラムはそんなことをつぶやきながら、近くにあったシャベルを持った。

「なにしてるの？」

二人はその声を聞いて、思わず心臓が止まるかと思った。

「……」

恐る恐る二人は振り向く。

そして、ほっと、息をつく。

「……姫がこんなところでなにをしてらっしゃるのです?」

「……バカにしてるでしょ?」

そこに居たのは軍服、といってもサリドたちとはことなる青の軍服だが、を着た少女がそこに居た。長い金髪が風にふわふわと揺れている。

「……暇だったからここにきたの」

「そっかー、たしかに暇だよな。戦争だったのに、敵からの攻撃0だしなー」

サリドは冷静を保ってしゃべっているようにも見えたが、

実際には至極緊張していた。

なぜか?

なぜなら、彼と話しているその少女こそ、

『ヒュロルフターム』を操るパイロット『ノータ』の一人なのだから。

「……でも、この戦争ももう終わるよ」

「？」

「あれ？ さつき無線で鳴らしてなかったっけ？ ブリーフィングを行うからサッサとこい。ってね」

「え？！ まじか！！ じゃあおれら作戦を知らずに突入する羽目に……！！」

「もう終わっちゃってるから急いで聴きにいかないと。作戦決行は3時間後だよ？」

「やべえ！！ いそがなきゃ！！ ありがとう姫様！！」

かすかに敬礼をして、走る二人だった。

ふたりは上官の部屋に来ていた。上官はどうやら和風マニアのようで、『私は納豆が好きです』とか言うあまりよくわからない掛け軸とかがかかっていた。

「……あれほど、昨日ブリーフィングの時間については言ったと思っただけど」

その上官は軍服、というよりは警察官のよく着る制服のような服に身を包み、左手にペンを握って、何か板のようなものに書いていた。

「タブレット、ですか？」

「ええ。よくわかったわね？」

そう言つて、上官は長い銀髪をたくしあげる。

「少佐になるといろいろと大変でね？ このグラディアの戦争の他にリブガナ諸島のテロリストも制圧しないといけなくてね」

タブレットの脇にあるボタンを押すと、スクリーンになにかが映し出される。

それは、地図。そこに赤や青の点が動いている。

「私がこのタブレットにタッチすると赤のやつが反応する。それを引っ張ったりすれば殲滅したりできるってわけよ。ともかく私は忙しいの。あんたらがその私の忙しさをさらに忙しくしたのは分かっているよな？」

二人は答えない。

「分かっているよな？！」

「い、イエッサー！！」

ふたりは何かに怯えるように、敬礼する。

話がおわって。

「いやあ。こっぴどく叱られた」

「だな。というかあと3時間だったよな」

サリドとグラムは喋りながら、廊下を歩く。

「えーと、俺はあのまま草刈り続行かー。だいぶ辛いのですが」

「おー。頑張れ頑張れ、俺は冷房かった部屋で『ヒュロルファーム』の整備だから」

「そうか。おまえそっち系目指してるんだもんな」

「ああ。夢はヒュロルファームの設計士だ」

そう話しながら、サリドとグラムの二人は別れた。

「遅い!!」

整備場に着くと出迎えていたのは、ばあさんの罵声だった。

「ごめんよ。オレらだって任務があつて」

「何が任務じゃ。お主は軍隊にも入ってないくせに」

そう。この少年。サリドⅡマイクロツエフは、軍の人間ではない。

正式にはヒュルフタームの設計士を目指すために、ここに研修に来た、ようするに『研修生』なのだ。

「……まったく、今の若者は研修とか、時代が良くなったのう。わしがりたての頃は試験一本だったしのう」

「そもそもばあさんがなるときはヒュルフタームなんてなかったじゃないですか」

「ばあさんと呼ぶな。ライミュールⅡガンテ少尉と呼びな」

「はいはい。少尉。申し訳ありません」

煙管を吹かしている元気たっぷりなおばあさんは煙管が口の中から出てきそうな勢いで、言った。そして、それをサリドは軽やかにスルーする。

「さて、無駄話をしている暇もないの。お主はさつさと緊急装置の検査でもしてこい」

へーい、とやる気のないような声をだし、サリドは検査用の階段を上った。

そして、2階から、それを見る。

ヒュロルフターム。

人間の技術の結晶、とも言われるそれは、堂々とそこに立っていた。そのヒュロルフタームは、簡単にいえば、人型　もつとも人らしいカタチをとったものだった。

頭には鶏冠のようなものがついており、胸のあたりは鋭角に出っ張っていて、まるで鎧をつけた西洋の城の騎士にも見えた。

「……これが」

「そうじゃよ。これが『ヒュロルフターム・ワン』。クーチェじゃよ」

「これが、ヒュロルフターム……」

「さてさて、急いで整備せんとノータ様が来ちゃうぞよ」

「わったた。そうだった。急がなきゃー！」

そう言つてサリドはコックピットに向かった。

「……といつてもコックピットってこてこての機械ばかりと思つたらそうでもないんだな」

「……パイロットであるノータはここに入つてかんぜんに密閉された後、酸素を含んだ特殊な液体をここに入れられるの。それで私たちはヒュルフタームとリンクするのよ」

「へえー。そうなのか……」

そこまで言つて、ふとサリドは気づいた。

「はっ……！？　もしかして姫っ？！」

「……ちよつと試しに来ただけど、まだ終わつてなかったの？」

彼女はため息をついて、つまんなさそうに言つた。

「あ。す、すまない！　いまから急いでやるから……！！」

そう言つて、彼は緊急装置の整備に取り掛かった。

「あれ？　でも緊急装置つていつても、コックピットは液体で満たされているんだよね？　いったいどうやって脱出するんだ？」

「……それもわからないでヒュルフタームの設計士目指すなんて。聞いて呆れるよね」

それを聞いてサリドはムツとするが、本当のことなので反論する気

はない。

「はいはい。すみませんでした。で？ 天下のノータ様は一体何を
するんです？」

「バカにしてるでしょ？」

一息。

「ま、いいわ。私これから試しに運転するからどいてて」

そう言つて、彼女はコックピットに座る。

「さーてと、さつさと離れたほうがいいんじゃないかしら？ 新米
さん。その階段潰しちゃうかもよ？」

「げえええええ！！ まじかよ！！」

その言葉を聞いて、大急ぎでサリドは降りようとする。

だが、

「うぐっ」

「？」

マイク越しに、そんな声が聞こえた。

明らかに、苦しんでいる声。

「だ、大丈夫か！！」

叫んで、サリドはコックピットに向かう。

そこにはしまったシールドがあり、その半透明なシールドから

彼女の苦しそうな顔が見えた。

「なにをしとる。このバカモン！」

気付くとスタスタとあのおばあさんが階段を登って、ここまで来ていた。

「……なんか、急に苦しくなったらしくて」

「そんなわけあるか。コックピットに液体は満たされているんじゃ。他の理由があるに決まっておろう！！」

「そ、そうだよな……」

「にしてもだ。我々がそこを開けるのは難しい」

「へ？」

おばあさんから返ってきた予想外の返事にサリドは目を丸めた。

「……なにもわかっておらんのか？ そこにあるヒュロルフタームは殆どが鉄板を何枚も重ねて作ってある。だがな、ただひとつだけ違う」

一息。

「その、コックピットじゃよ。そこだけはオリハルコンとかいう金属で作ってある」

「ああ。……流した電流によって金属の分子構造を変化させて強度を増やした最強の金属、とやらですか」

サリドは教科書の受け売りのように話す。

サリドの言う通り、オリハルコン　というのはなにも力を加えない状態だと液体なのだが、そこに電流を通すと核兵器すらも耐える屈強なものとなるものだ。

「まあ、要するにこれを力でどうこうするのは無理じゃ」

コックピットを叩いて、おばあさんは言った。

「じゃあ、どうすれば……!!」

「慌てるな。若いの。わしが今からある装置を持ってくる。コックピットに流れている電流と逆向きの電流を流して、コックピットを一時的に流体にする。それなら彼女は助けられるよ」

そう言って、おばあさんはおばあさんとは呼べぬほどの速さで走って消えた。

と、いうことはだ。

彼女はその機械が届くまで、ずっと苦しむ羽目になる。

それは、できれば目を背けていたい、でもはつきりとした真実。

(どうする……!! このままじゃ、姫様が……!!)

「方法、ひとつだけ…… あるよ」

彼女は精一杯、その言葉を紡いだ。

「……それは？」

サリドが聞く前に、彼女は座席の下にあるボタンを押す。

直後、コックピットは大きく開き、そこから上に勢いよく座席が飛び出た。

しかし、コックピットが開くということは満たされていた液体が噴き出ることをも意味していて。

コックピットのそばにいたサリドはもろにそれを浴びてしまった。

疲れた表情で、笑いながら彼は一言。

「緊急装置、異常なーし……」

「それでなんかさっぱりしてるのか」

二時間後。ヒュロルファームの清掃と液体の補填、スーツの着替えなどを済ませたサリドは作戦三十分前にしてようやく外に出た。

そこでグラムと出会った、というわけだ。

「ああ。まあいいリラックスにはなったかな」

「そこまで楽観的にいられると、逆にうらやましいよ」

グラムは苦笑いをしながら、サリドに言った。

と同時に。

作戦開始を報せるサイレンが、基地中に鳴り響いた。

「始まったようだな」

「なに冷静にしてんだよ！！　またあの和風マニアの暴力上官になんか言われる……」

そこまで言って、グラムの言葉は途絶えた。

不思議に思って、サリドは横を向くと、

そこにはあの和風マニアの暴力上官とやらが立っていた。

「……ちょ」

「誰が、暴力上官、だって？」

彼女は笑って言った。しかし目は笑っていない、戦争の時のような目であったが。

「……す、すみません……。リーフガットさん……」

謝ったのはグラムでなくサリド。しかも士官階級ではなく彼女の名前、リーフガット・エンパイアーを言っ

「……まあいいわ。さっさと体育館に向かって」

彼女は長い銀髪をたくしあげ、言った。

彼らはそれから逃げるように、走った。

体育館にはサリドやグラムのような軍服を着た大量の兵士がいた。

しかし、実質はこの人間たちの八割以上は戦わない。

戦争といえばヒュロルフターム。というほど、ヒュロルフタームが戦い方に浸透していた。

今まで、生身の兵士で機関銃などを用いてドンパチやっていた。

それをヒュロルフチームが変えた。

なんせヒュロルフチームは高さ50m。人間なんてせいぜい1m後半。これだけで違いが全然わかることだろう。

そして、武器も変わった。

今までは『人間に持ちやすく、軽く、頑丈な』武器であったが、

持つのは人間ではなく、ヒュロルフチームに変わったことにより、武器の幅が広がった。

例えば今までは重量などの制約上一チーム一個までしか所有できなかった移動式コイルガン、それでもステルス戦闘機一機分くらいの重量がある、だったがヒュロルフチームはこれを50個所有して、装備している。それだけで人間とヒュロルフチームの違いが解るだろう。

「だから俺ら兵隊はなんのためにいるんだかなあ……」

グラムはあくびをしながら小さくつぶやいた。

解散して、サリドとグラムは基地の外に出た。

雪は、降ってはいないものの踏むと靴が沈んで隠れるほど積もっている。

「うーっ、寒い」

今はサリドとグラムはあの軍服の上に迷彩柄のジャンパーを着ている。言わずもがな、防寒対策だ。

かれらの右手には小さな機関銃がある。

しかしヒュロルフタームが来てしまえば役には立たない。シロナガスオオクジラにイワシが立ち向かうようなものだ。

故に、ヒュロルフターム“さえ”倒されると、それは負けを意味する。

なぜなら、

今の人間にヒュロルフタームを倒すすべがないからだ。

ヒュロルフタームを倒されると、残された軍隊に待っているのは、死。

それを恐れるものは逃げるしかない。逃げて。逃げて。逃げて。逃げて、それでもヒュロルフタームが持つ射程5 kmの巨大レールガンには敵わないのだが。

だからこそ。

ヒュロルフタームを倒されると、あとは逃げるしかない。

冬の天気は変わりやすい。

先程まで快晴だったのに、今や1 m先も見えないほどのブリザードとなっていた。

しかし、そんなときにもはつきりと見えた。

緊急装置を使って脱出したノータの姿が。

ヒュロルフタームを倒された兵隊を待っているのは、死。

これは、この戦いでも適用される。

ヒュロルフチームが一步步くことに地面は揺れる。

そしてブリザードで前があまり見えないからこそ、恐怖が増大する。

今のところ、見えるのは、影。

ただただ、巨大な、それは、ゆっくりとヒュロルフチームを失った兵隊のもとへ近づく。

兵隊の、無線機を持っていた人間が、ボタンを押したり放したりしている。

たぶん、これが『白旗』なのだろう。何度も、何度も、その信号を送る。

そして。ヒュロルフチームは動きを止めた。

しかしそれは白旗に賛成、戦争の完結ではなく。

地面が細かく振動を始める。

危険を察知したときには、もう遅かった。

刹那、そのヒュロルフチームが装備していたコイルガンが兵隊に向かって撃ち放たれた。

「くそっ！！ このままじゃこっちもやられるー！！」

グラムは双眼鏡でその姿をはっきりと見て、言った。

「でも、あの感じじゃあ、向こうは基地を知ってるばいね」

「だから逃げるんだろ?! 急がねーと消し炭になるぞ!!」

グラムが叫んだそのとき。

ポン! と赤い煙が空に放たれた。

「……発煙筒?」

「ノータがやったのかもな」

「?」

「グラム。兵隊にいるなら知つとけよ。ヒュロルフトームのノータはこういう時のための緊急用マニュアルがあるんだ」

「ノータはヒュロルフトームの技術を隅々まで知っているからか」

「そう」サリドは頷いて、「だからヒュロルフトームには自爆装置があるし、ノータに関してはどんな事をされようと機密は話してはいけないんだ。ノータには戦争の捕縛兵条約が効かないからね」

「おいおい、それって……」

グラムが言葉を濁した。

「……そういうことだよ」サリドは肩にかけた機関銃のヒモを改めてかけなおし、言った。

「だからこれから姫様の救出作戦を行うんだけど君も来ないかい？」

「救出…… たつてどうするんだ？ 間違えたら俺らも捕まって捕虜だけじゃすまねーぞ」

「それは解ってるよ。だからこれを使うのさ」

サリドの手に握られていたのは信管のささった何個かの手榴弾。

「確かにこりやあダイナマイトを何倍にも凝縮したやつだから普通の戦車とかならそれなりのダメージが与えられる。けどな、敵はヒュルフチームだぜ？ 主砲のひとつにも傷がつかないと思うけどな」

「いいんだよ。それで」

グラムの問いに、サリドは笑って答えた。

サリドたちは軍用のリュックにありったけの手榴弾とレーションをいくつか入れて、戦場にむかった。

「……死ぬ準備は大丈夫か？」

「ああ。死なないように頑張るさ」

「じゃあ、どこに行く？」

「とりあえず煙が出た場所。ヒュルフトームもそっちに向かってるだろうし」

「そうだな」

サリドとグラムは同時に言った。

発煙筒が焚かれた場所。

それは森の奥深く。

ノータが入っていた緊急脱出装置が落ちてきたせいで、木はところどころで倒れていた。

そこに彼女　ノータはいた。

彼女は小さい頃から才能があつた。

彼女は小さい頃から将来が約束されていた。

ヒュロルフチームのパイロット、ノータに選ばれる。それは人類から選ばれし『新たな人間』と呼ばれるべき、こと。

大体は作つた時に金銭を寄付したスポンサーの子供がなつたりすることだ。

しかし彼女はその高い才能故にコネなどもなく、一般人からこゝまでやってきた。

それが、彼女にとってどれほどの自慢か。

それが、今の彼女自身を作つた、と言つてもさほどおかしくはない。

要は、それほどのことなのだ。

「行かなきゃ……」

彼女は歩き出した。

それはこの戦争のためじゃない。

自分のために。

「『戦闘敗北の際のマニュアル』は果たした……。あとは逃げるだけよ……」

彼女は歩く。その度に右足が疼く。どうやら怪我をしてしまったようだ。

「くっ……」

彼女はその度に足を引きちぎられたような感覚に襲われる。

「耐えろよ……。私の足……」

彼女が息を荒げてつぶやいた、

そのときだった。

銃声が、森に響いた。

「まさか、もう敵軍が……！！」

しかし、銃声は一発では留まらなかった。

ターン！！ ターン！！ と、まるで逃げる獲物を追い詰めるような、そんな撃ち方だった。

「だれだかわからないけど。感謝するわ」

彼女はその銃声のした方に敬礼をし、また右足を引き摺りながら歩き出した。

時は少し遡る。

サリドとグラムは雪原をただひたすらと歩いていった。

「おい……！！ このままじゃ雪に体力を消耗されるだけだぞ！！
なんか方法はないのか？！」

「え？ あるよ」

サリドが足をあげ、そこを指差す。

よく見るとサリドの靴の裏に何かついている。

「……使い古しの畳……？」

「そ。あの和風マニアの上官は陽射しで畳が焼けるのがいやだから
月に一回ペースで畳替えするんだよね。それで使われなくなった畳
を靴につけて接地面を広げて、足が雪に沈むのを防いだ、ってわけ」

サリドは、そう言っただけで歩き出す。

「てかそういうのあるなら先に言えよ……」

「うん？ 君の靴に入ってる筈だよ。それに一回言っただけだし」

「……そうだったか？」

「物覚え悪いなあ。グラムは。姫様を助けに行く、って言ったときに
そう言ったじゃないか」

「ま、いいや。とりあえず俺も装着するから待ってる」

言って、グラムはリュックを開けた。

「よし。これでバッチリだ」

グラムはまだ堅い新しい靴を履いているかのように、爪先を地面で叩く。

「……やっぱ、寒い」

「時間的には正午……一番陽射しが当たってる時間なんだけどね？ やっぱ冬だからかなあ。陽射しも心もとない気がするね」

サリドは、涼しげな顔で、実際は涼しさを通り越して寒いのだが、言った。

「これでほんとに7月かよ……。環境破壊にも限度があるだろ」

「たしか、グラディアは環境開発技術で有名なんだっけ？ だからこのあたりは実験地帯で気候が変化しやすいらしいけど」

「変化しすぎじゃ、ボケ！！ どうしてサリドはそこまで冷静でいられんだよ?!」

サリドは手に持っていた携帯端末をグラムに見せて、

「事前資料とかちゃんと見ときなよ。そうというのが勝利の糸口になったりするんだし」

「……そうだな」

グラムはその直後、サリドにぶつかった。

「どうした？」

「あれ、見てみるよ」

サリドに従い、グラムはその方を見た。

そこにいたのは、兵士。グラムたちと同じ迷彩服に身を包み、手にはアサルトライフル。

「……何人いる？」

「解らない。隠れている、という可能性も考慮しなきゃいけないし……。もしそれがないとするなら3人かな」

「……姫様は捕まったのか？」

サリドは悴んだ手を自らの息で暖めながら、「さあ、どうだろ？でもあの感じからするに奴らも緊急装置の落下ポイントはわかってたみたいだね」

「向こうはアサルトライフル三挺。に対してこっちは機関銃、しかも旧型の1715年製が二挺に手榴弾とプラスチック爆弾が幾つかか……」

「どうする？」グラムの問いにサリドは笑いながら、「行くっきゃないでしょ。俺らの目的は姫様を救うことだ」

刹那、
彼らは敵陣に飛び込んだ。

そのころ、和風マニアの暴力上官ことリーフガット・エンパイアーはブリザードの中を、生き残った兵士たちとともに歩いていた。

「弱まるどころかますます酷くなるばかりね……」

リーフガットは、つぶやくように言った。

「あの問題児たちも行方を眩ますし……、問題は山積みね……」

そんなとき、彼女の無線機に通信が入った。

相手はその“問題児”。サリド＝マイクロツェフからだった。

「サリド＝マイクロツェフ。そこで何をしているの？　というか今はどこ？」

あくまでも怒りは消し去り、冷静に質問するリーフガット。

それに対してサリドは、

「俺らは今クラーク雪原の森に来てます！　そこであつた敵兵と銃撃戦中です！」

タタタタン！！　と会話の合間や会話中に聞こえてくる。おそらくそれが敵の銃声と味方　即ちサリドたちの銃声なのだろう。

「サリド。作戦は失敗したのだ。ヒュルフチームも壊され、グレイア軍に立ち向かえるものはない。急いで戻ってこい。本国に戻れば『クーチェ』の予備がある。それを用いてまた進撃すればいい」

「でもその間に敵も回復しますよね？　そしてまたやられた堂々巡りじゃないんですか？」

上官の事実上の“退却命令”にサリドは返した。

「……堂々巡り。たしかにそうかもしれない」

一息。

「ならばお前らにヒュルフチームが倒せる術があるとしても？　お前らもヒュルフチームの凄さは解っているだろう？」

「解っています」サリドははっきりとした口調で、「解っています。解っているからこそ戦いに行くんです。それに……」

「それに？」

リーフガットの言葉にサリドははっきりと答えた。

「勝機なら、あります」

サリドはリーフガットとの通信を切り、指でオツケーのサインを作る。

それを見てグラムは、「おいおいおい。まじであの暴力上官、そんなの許可したのか?!」

「うん。許可、というか反論出来ないようにしといた」

「なんなんだお前、詐欺師の方が向いてるんじゃないかねえか？」

「ま、そうかもね」

……サリドたちの周りには何もなかった。

最初から、何もなかった。

「つーか、さすがの暴力上官も戦闘中に通信することはない、って思っんじゃないのか？」

「そこは一種の賭け、ってやつだよ」

サリドとグラムは話ながら森の中を進む。

「にしてもどうすっかなー。ヒュロルファームの攻略法」

「なっ?! まだ決めてなかったのか!!」

「いや、決まってるんだけど、それじゃあなんか決定打に欠ける気がするんだよねえ……」

「どうするんだよ? 俺に話してみろ」

グラムが言っと、サリドはグラムの耳元で囁いた。

「……ってやつなんだけど、どうかな」

「悪くはないけどそこまで誘き寄せるのが難しいな。失敗したらとんでもねーことになるけど」

「まあ、失敗したら仲良くあの世行きさ。とりあえず敵のヒュロルフタームを探そう」

「お前とあの世行きとか死んでもやだけどな」

サリドとグラムはそう話ながらさらに森の奥へ進んだ。

ズシイン、と地面を揺らすような音がサリドの耳に届いたのは、そのときだった。

「どうやらお出ましのようだな」

「ああ。じゃあ、グラム。お前が囃な」

「は?!そこはサリド、お前じゃないのかよ!」

「だって、この作戦の発案者は俺だ。俺にできる時間で考えてある。ということはお前が囿になるほかないだろ？」

「……」グラムは舌打ちして、「解ったよ。じゃあ俺は相手のヒュロルフタームをあの場所に連れていきやあいんだな？」

「ああ。よろしく頼むよ」

そう言って、二人は別れた。

成功したら前代未聞となるであろう、『人間がヒュロルフタームを倒す』作戦のため。

サリドはグラムと別れ、雪山に登っていた。

雪道を歩く、というのはとても体力を消費する。

「……疲れる……」 たかが研修でやってきた学生には容易ではないことだ。

「でも、やらなきゃやられる……!!」

サリドは歯を食いしばって進む。

「グラムはうまくやってんのかなあ。あっちで失敗したと言ったらキれるぞ」

そのころ、グラムはどこかで手にいれたオフロードカーを運転していた。

彼は16歳 さしあたって運転免許をとることが出来ない年齢のわけだが。

近年、軍隊全体の若年化が進み、軍用免許に限っては16歳から取得できることが許されている。

「といってもこんな最新型運転したことねえ……!!」

ガクン、と車体が上下に揺れる。おおよそ崖か砂利道に突入したの

だろう。

後ろから追ってくるのは、最新鋭の人型戦闘兵器・ヒュロルファーム。

では、なかった。

「なんだよ、あれ！！ 初耳だぞ！！ 社会主義の国にも戦闘兵器がいるだなんて！！」

「グラム・リオールからサリド・マイクロツエフへ！」

グラムは即座に無線機をとり、周波数を合わせ、叫んだ。

『なんだ。グラムか？ 今逃げ回ってる最中じゃ……』

「いいからよく聞け！！ 俺らが戦っていたのはヒュロルファームじゃない！！ それにうまく似せた人形だ！^{ゴレム}！」

『……なんだと？！』

さすがのサリドもその事実には驚いたようだ。

「嘘じゃねえ！！ あれはダミーだ！！ よく考えれば社会主義国を名乗るグラディアに資本主義国の象徴であるヒュロルファームがあるわけないんだ！」

しばらく、サリドからの返事はなかった。考えているのか、驚いて何も話せないのか。

それに関係なくグラムは続ける。

「いいか。ひとまずあの戦闘兵器にヒュルフトームほどの装甲があるとは思えねえ！！　ここにある武器でなんとかやってみながら、あの場所に誘き寄せる！！　さっきのは最悪な意味、ということではないな！」

『わかった。死ぬなよ。グラム』

「お前もな。サリド」

そう言つて二人は通信を切った。

サリドは通信が切れてからまた雪原を歩き出した。

といっても今は切り立った崖を登っている。

「なんでつたつて……、登山道がないんだよ……」

サリドはぼつり呟く。よく考えれば当たり前のことだがこの周辺は環境開発技術の実験地帯である。

よつて逐次変化する環境により植物は破壊され、残るのは荒地と一部に眠る悪環境に強い植物のみ。

「まあ、当たり前か……」

サリドはそう言いながら崖を登りきった。

そこは、山の、というよりは小高い丘の、頂上。ここから見える風景はすべてが白い。

彼は目でグラムを追う。

やはり、簡単に見つかった。

「あれだな……。最新型のオフロードじゃん。よくあんなの戦場に落ちてたな」

サリドは双眼鏡を取り出し、そのオフロードが走る方角を見た。

「あれが……『敵のヒュルフターム』か。……グラムの言う通りあれは違う……」

サリドは踵を返し、「さて、俺もあれが定位置にくる前に準備しなきゃな」

笑って、言った。

通信が切れてから、グラム。

「なんだよなんだよ！ この車軍用じゃないのかよ!!」

グラムは運転していて横目で車内の装備を見て、愕然とした。

軍用のオフロードカーで迷彩柄であつたのに中にあつたのはカメラ、マイク、フィルム……………

「……これ、報道機関の車か。ややこしい装備しやがって」

グラムは唾を吐くように言った。

しかし、そんなことはもう関係ない。今更この車を捨てて逃げるだなんて無意味かつ無謀だ。

「とりあえずあるのは護身用のライフルと、手榴弾……、しかも『レイリー・コーポレーション』製じゃないのかよ……。ただだけ弱小なんだ、このパパラッチは」

レイリー・コーポレーション。

世界一の軍事企業で『資本主義国』の軍はすべてその会社の武器を用いている。

「……まさか、社会主義国のパパラッチか？ 資本主義国のパパラッチはみんなレイリー御用達の筈だしな。ああ、めんどくさい」

グラムはおもちゃに飽きた子供のような表情で、言った。

「とりあえず……、反抗しときますかね」

そう言っただけでグラムは手榴弾の信管を抜き、後ろから追ってくるコーレムに投げつけた。

ドゴオオオオン！！ と耳をハンマーで叩かれたような衝撃がグラムを襲う。

「……やっぱりゼロ距離からの手榴弾は自殺行為だな！」

爆発の衝撃でグラムの両耳が耳鳴りを起こしている。

「……うぐっ……!!」

不意に、車のバランスが取れなくなる。

人間は耳にある三半規管という半円状の三つの管でからだの平衡をとっている。

それが衝撃を負い、一時的に使えなくなったとしたら？

「うおおおおお!!」

グラムは叫びながらがむしゃらにハンドルを握り、左やら右やらに回す。

……バランスを取り戻す作戦は見事に失敗し、グラムの運転した車は樹に激突した。

「……畜生……。まさかこんなところで……」

グラムは激突し、見るも無惨な姿と化した『報道機関』の車から抜けでた。

「……こうなりゃ、足で逃げるしかねえな」

言って、グラムは自身の装備していたアサルトライフルを構える。

「避ける！！ グラム！！ 飲み込まれるぞ！！」

そのとき、サリドの声が雪原に響いた。

その声を聞いてグラムは咄嗟に走る。

ゴーレムもグラムを追おうとしたが

刹那、ゴーレムを覆うように、雪崩がやってきた。

ゴゴゴゴゴ！！ とまるで戦車のキャタピラーの音のような轟音で、雪が、その雪によって倒れた樹が、ゴーレムとグラムがいる谷に流れ込む。

「うおおおおお！！」

叫びながら、グラムは雪崩に飲み込まれないように走る。

ゴーレムはピギヤギギゴゴガガ！！ とまるで何かの鳴き声を最初は発していたのだが、暫くして、雪に埋もれたのか、その声は聞こえなくなった。

雪崩が収まり。

「助かった……。あれがなくちゃ今頃あのデカブツの餌食だったぜ」

グラムは腰に提げていたウエストポーチから袋を取り出し、そこから“唾液で喉を潤すための乾いたもの”を取り出し、一粒口に入れた。

「まあ、成功した方かな？ にしてもほんとにヒュルフタームじゃないなんてね」

サリドは雪崩の残骸からなにかを取り出す。

「なにそれ？」

「ゴーレムとやら、見た感じ『生物』っぽいだよね。とりあえず採集しとく」

「大丈夫かよ。もしまた起きたりしたら」

「大丈夫、大丈夫。……さて、これで一つ目の目標は達成だね」

サリドの言葉にグラムはうなずく。

そして、サリドは言った。

「姫様を、救いに行くよ。何も武器を持たない弱腰ナイトの二人でね」

彼女は閉じ込められていた。

強度は世界最強とまでいわれる青い服は、ところどころが破れていて、そのところどころから血が滲み出ていた。

彼女は、資本主義国の列強『資本四国』の中にあるレイザリー王国の人間だ。

その国で、最強と呼ばれた存在。

国を、まもる存在。

彼女は、ヒュルフトームのパイロット、ノータだった。

そのころサリドとグラム。

「畜生。ここで姫様の生体反応が切れてる。ここで捕まっちゃったのか?」

「そうかも。だって見てみるよ」

サリドが指差した方向には、なにもなかった。

「……なにもねーぞ?」

「ちゃんと見なよ。雪にあんなに変な感じに埋もれてるとかおかし

いだろーよ」

「……………だな」

グラムは納得した。

戦争はヒュロルフタームどうしの戦いである。

故に狙われるのはヒュロルフタームと、その操縦士、そしてそれを整備する機材や替えのパーツなど、だ。

だから、機材は隠す必要がある。

「だからってあんなあからさまに隠すとはな……。よくバレなかったな……………」

サリドは笑いながら、「今まで機材に直接攻撃がこないからじゃない？ この国がヒュロルフターム一機しか持ってなくてよかったよ」

「しかも紛い物だけだな」

サリドの言葉にグラムは続けた。

サリドとグラムはその不自然に盛り上がった雪を払った。

すると、

「やっぱりな。俺の言った通りだ」

その下には銀色の金属が見えた。

「しかしだな、サリド」

「なんだ？ グラム」

「今敵の本拠地を発見した。これはいいことだが」グラムは顔をしかめ、「実際入口はどこにある？ まさかこのただっ広い空間のどこかに埋もれてるとするなら探すには骨が折れるぜ」

「簡単じゃん。そんなの」サリドの答えは意外にもあっさりしたものだっただ。

「別にただっ広い雪の中を虱潰しに探さなくていいんだよ。どう考えたって入口は雪に一番近いところかつなにか物体、しかも自然の、があるところだよ」

「……なんでそうだって言えるんだよ」

「グラム。考えてみるよ。今や電気通信がすべて手玉にとれる戦場で無線なんか使ってみる？ 虚偽の事実を流されて自軍が混乱させられちまう」

「つまり……、どういうことだよ？」

「お前はほんとに閃きが鈍いな。それでも兵隊か？」

「……所詮俺は『貴族』で父親が政治家の七光りですよーだ」

「ヴァリヤー上院議員だっけか。ヒュロルフタームプロジェクトを推進する一人だったな」

「ああ、そうだよ。『クリーンな戦争』を心がけていたらしいが、最近の結果主義で結果を得られない兵は即辞めさせられる。嫌つてるやつも相当いるんだろっな」

「ヒュロルフタームが中心となった戦争でどう活躍すりゃいいんだろっな」サリドは手元にあるアサルトライフルを眺めながら、「本題に戻すか。つまりさっきの理由から無線は無理だ。即ち有線にする必要がある」

「しかしそれじゃあ断線とかさせられて閉じ込められるんじゃない？それにチャンネルを逐次変えるサイン無線波なら大丈夫だと思うんだが」

「サイン無線波はコストがかかるし資本主義国内にしか流通してない技術だからそれは有り得ないよ」

サリドはアサルトライフルを構え、言った。

「つまり、このあたりの雑木林にスイッチがあつて、そこから入れる。……『建物は下から入る』という常識を覆してはいるよね」

「おまえそんなこと言ったら地下室は常識の範囲外なのかよ？」

グラムはサリドの言葉に苦言を呈する。

「……そんなことより、さっさと行こう。『地下帝国への入口』を探しに」

間違えた恥ずかしさを無くすためか、一瞬物事について深く考え、
そして言った。

『地下帝国への入口』というのは意外にも簡単に発見された。

雑木林の中に一本だけ、違う樹が生えていたからだ。

「……バレバレにもほどがある。罨か、それとただのバカか」

「罨でもバカでも入るしかないよ」

サリドはそう言い、スイッチを押す。

刹那。

ゴゴゴゴ！ と地面が低く唸り上げる。

そしてそこらなにかが競り上がってくる。

その形は、いわば円柱。

「おいおい、マジかよ……」

グラムが驚きながらも、呟く。

「ほんとうだよ」サリドは競り上がる円柱を見上げながら、「きつとこれが入口だ」

そのころ、どこかの牢屋。

ところどころが切り裂かれボロボロになった軍服を着た少女は、声も出さず泣いていた。

心が、折れかけていた。

プライドが砕かれかけていた。

彼女の、『ヒュロルフターム』のパイロット、ノータとしての。

平民からここまで登り詰めた、という彼女のプライドや覇気はもはや消えかけていた。

風前の灯火。

彼女の状態は、そんな感じだった。

「あれ？　ここ、どこだろう？」

彼女の聞いた声は一瞬、幻のようにも感じられた。

しかし、それはすぐに覆された。

「サリド、てめえ、迷いやがったな！　畜生……。ここはいつたい

どこだ？」

「見た目から牢屋とか、そんな感じかな？ 少なくとも有益なものはなさそうだね。はやく姫様を探しに行こうよ。グラム」

名前の知らない、二人組。

この声は聞いたことがある。彼女は確信した。

作戦前に出会った兵士。

なぜ彼らはここにきたのか？

そのとき、サリドと呼ばれた少年から言われた目的。

『姫様を探しに行こう』

彼女自身が軍内で姫、と呼ばれているのは彼女自身もわかっていた。ノータに特別な意味を持たせる、兵士に兵士とノータの違いを見せる、ための“あだ名という名の敬称”。

他のノータは『蟻蜂はちの騎士』とか『火薬娘』とか『闇の袂』とか、なんだかつかっこいい名前をつけられているのに。

国の定めか、単純な『姫』だけ。

姫、と言っても国を指揮したり、王様の隣に座ったり、豪勢な城にいるわけでもない。

彼女は指揮される立場で、座るべき場所はヒュロルファームのコックピットで、彼女にとっての城がヒュロルファーム・クーチェなのだ。

「おい！　もしかして……」

兵士の声が、姫様の前で響いた。

「えっ」姫様は声をだした。

つもりだったが聞こえなかったのか、兵士は耳をたてる。

「グラム、どうしたんだ？」

「サリド、姫様が見つかった」

「えっ」

どうやら先ほどの兵士たちだったのか、と姫様は安堵する。

「立てるか？」

「グラム、それより足枷手枷を外そう」

「おっと、そうだな。針金とかあるか？」

「あつたら簡単なんだけどね。生憎そんなのはないよ」

「くっ、こうなったら……。姫様、動くなよ」

グラムはホルダーから小型の銃を取り出し、それを彼女の両腕と両足につけられている枷に向かって撃った。

サイレンサーをつけていたのか、音がその牢屋に響くことはなかった。

総ての枷が破壊され、自由の身となった彼女。まずは手足をちゃんと動くか確認するように動かした。

気づいたら彼女は泣いていた。

なぜだかは解らない。

ただ、無意識に、彼女は涙を流していた。

「お、おい？ 大丈夫……か？」

グラム、と呼ばれたサングラスをかけてラッキーストライクを吸っているのが似合いそうな青年は尋ねた。

「どうして、ここまで来てくれたの？」

「？」

「何を言ってるんだ？」

今度はサリドと呼ばれた年相応に見えない幼い顔の青年が答える。

彼はアサルトライフルのAK47を肩にかけ、「困ってる人間を救
つちや悪いのか？」

「……いや、別に」

姫様はサリドの予想外の発言に何も返すことができなかった。

「じゃあ、脱出するぞ……、って姫様怪我してるじゃないか。こん
なところだと破傷風にかかったまう。とりあえずここを脱出しよう」

グラムは姫様の怪我をした右足を見て、言った。

ここは、救護室。

今は姫様の怪我を治療しに危険を省みずここまでやってきた。

「これで大丈夫かな」

サリドは包帯の巻かれた姫様の右足を見て、言った。

「……ありがとう」

「いってことよ。とりあえずさっさと脱出しようぜ。援軍が襲ってくるかもしれねえ」

「グラムの言う通りだ。でもヒュロルフタームはさっきも言ったけどひとつしかない。それも紛い物のね」

「……あれが偽物なの？ わたしが戦った感じからしてあれは『第2世代』のヒュロルフターム並みに強かったけど？」

姫様は続ける。

「それにあれが偽物とは有り得ない。ヒュロルフタームはヒュロルフタームでしか倒せない。その原則をやぶることになる。それを『社会主義国』が出来るとは思わないけど？」

「それはそうなんだよな……」

サリドは姫様の言葉に答える。

「そこが問題なんだよな」

サリドは続ける。

「まあ、ひとまずこれも手にいれたし。十分頑張ったんじゃないかね」

そう言ってサリドは透明のカプセルを取り出す。

「ああ。さっきの戦闘兵器の肉片ね」

グラムは素っ気なく答える。

「肉片？」

しかし、それに姫様が食いついた。

「ちょっと待って。なぜそれを先に言わないの？ それじゃあヒュロルフチームの類いなわけじゃないじゃない」

「黙ってたわけじゃない」

「……とりあえず、本国に帰ろう。もう俺は疲れたよ」

グラムのその言葉を聴いて、サリドたちはこっそりと救護室から外に出た。

ここは資本主義国の列強、『資本四国』のうちのひとつ、レイザリ王国。

この国は“王”国であるものの、実質的な支配は4人の実力者によって形成される『四天王』と呼ばれる組織が行っていた。

飾りだけの王、とはなんとも心細いものだろうか。

家具や柱や壁の至るところに漆や金や銀が貼ってあった。

しかし唯一天井の着いたベッドに犬のぬいぐるみを抱き抱えている少女が、何故かそれに浮いて見えた。

彼女はこの部屋の持ち主なのに。

彼女はこの国を支配していたのに。

彼女はこの国の“王”と呼ばれる存在であつた。

時折、苦しそうな表情を見せ、頻りに下腹部からそのなだらかな胸のあたりまでをさする。

「……………あつ……………」

なにか吐き出しそうな感情。それは彼女はおるか誰にも止めることはできない。

「王様」

扉の向こうから、深い低い声が聞こえたのはそのときだった。

王と呼ばれた少女はその声を聞いてすぐに表情を明るくし、けつしてそれが悟られないようにした。

「入れ」

少女が出した声は先ほどのそれとは違い、深く低いものだった。

「失礼いたします」

そこに入ってきたのは茶がかった肌に白い顎髭を蓄えた紅い眼の間違った。

「……ヴァリヤー・リオールか。どうした？」

「……今回の戦争の功労を労うための祭に出ていただきたいのですよ」

女王は軽く咳き込みながら、「わかった。いつごろに行く？」

ヴァリヤーは手帳を見ながら、「ええと、今日の17時に軍飛行機が空港に降り立って凱旋したあとなので……20時からですかね」

「それはまた急だな」

「なにしろその彼らはすぐに別の戦争に行かねばなりませんから」

「彼らも忙しいな。早くこの戦争が終ればよいのだが……」

「ええ。その通りでございます」

ヴァリヤーは恭しく笑いながら答えた。

凱旋パレードを終え、宴の会場にやってきたサリドとグラム。

「あんたたちは知らないだろうけど、宴の最初に表彰があるからね。勲章ものだから盛大だよ」

上司であるリーフガットはタブレットを弄りながら言った。

「へえ、それはすごいですね」

「なに余所者風を吹かせている。表彰されるのはサリドとグラム……
…あんたらだよ？」

会話の後。

「すげえなあ。俺ら」

「え？　なんで？」

「だって考えてみるよ。この戦争で勲章だぜ？　しかも紛い物とは

いえ『ヒュロルフタームを人間だけで倒した』ってな」

「まあ少なくとも後の歴史には語られそうだね」

サリドとグラムは宴の会場に作られた小さなステージの裏に着いていた。

「そういえばさ。王様ってどんな人間なんだろうな？ 見たことないや」

「この国の王を継ぐのは代々女性になるものだから女、ということと言える」

「なんだいその知ってる素振りは」

「俺も一応『貴族』の端くれ。小さい頃から『王族と仲良くしておくように』と言われてな。王族のことは結構学んでるつもりだぜ。たしかその名前は……」

そのとき、グラムの言葉を遮るように角笛の音が響く。

「おつ、始まるみたいだな。急いでいくぞ」

「だな」

二人は小さく頷き、舞台上上がった。

舞台は四角く作られていて、そこに四つほど席があり、そこに軍服を着た人間がそれぞれ座っていた。肩につけられた星の数が、それ

を物語っていた。

「グラム……。おれ、こういうのは緊張するんだよね……」

「これで緊張しないやつはいねえよ。当たり前のことだぜ……」

両者が聞こえるか聞こえないか位の声で、二人は話をする。

「では、これから勲章授与を行いたいと思います」

優しい、白髭を蓄えた軍服を着た老人は、その口から囁れた声を出した。

「グラム・リオールにサリド・マイクロツェフ。両氏はヒュロルフタームをなんと素手で倒したと言うのですから、驚きです」

次の発言に、

ヒュロルフタームのことを学ぶため、学校に戻ろうとした学生と、

軍をやめ、平穏無事な生活を送ろうとした貴族の、

『幻想』は打ち砕かれた。

「是非とも、その力を、次の戦場で使っていただきたい！ 両氏の
未永い健康を願い、勲章を授けたいと思います」

その発言のあと、サリドとグラムはなにをしたのか、覚えてはいなかった。

あの言葉はきつと空耳だ。信じられない。と、思っていたのだが。

宴が終わり、リーフガットの一言。

「じゃあ、宴はここまで！ 明朝、プログライトとの戦争に臨むのでそのつもりで！」

リーフガットの発言に兵士たちは声ともつかない声を出し、叫ぶ。

「ちよっ、ちよっと待ってくださいよ」

「なんだ？ サリド・マイクロツェフ」

「……俺ら、もう帰りたいんですよ」

「あら？ 『素手でヒュルフタームを破壊した』あんたらを軍が簡単に手離すとも思った？」

サリドは返せない。

「そういうことよ。じゃあ明朝は8時出発だから、そこんとこ自分で調整しろよ」

「……！！ もう2時廻ってるじゃないすか！！ いったい何時まで宴会をする気で？」

「そうか。あんたらははじめて参加するのよね。じゃあ言っとくけ

ど“夜通し”よ。日の出まで続くわ」

んなあほなーっ！ とサリドは思っていたが、

「まああんたらはじめてだし大事な人材だから早めに戻ってゆっくり寝ろ。一応言っておくが逃亡は銃殺刑だからな？」

どうやらこの二人の軍務は、まだまだ続きそうである。

13 (後書き)

ひとまず第一章完結です!!

12/11 追記

読みやすくなってるpixiv版刊行しました。

<http://www.pixiv.net/novel/show.php?id>

669170

プログライト帝国。

世界一広大な国として知られ、その広さは『資本四国』とほぼ同じとまで言われる。

また資本主義国と社会主義国、どちらにも属さない、所謂『独立覇権』と呼ばれるグループのひとつである。

かつてはその豊富な鉱物資源から栄華を誇っていたが、今は影が落ちつつある。

先述のとおり、この国は資本主義国にも社会主義国にも属さない国である。

この世界は自らの信念、『資本主義』と『社会主義』を貫かんとする人間によって構成されている。

そして、その信念を世界に広げようと戦争を起こす。

かつてはこの世界にも資本主義と社会主義が共存した時代があったという。

戦争も別の目的で起きていたという。

しかし、そんなことは今の世界を見る限りで有り得ない事実。しかしそれは真実。

そんな人間たちが、どちらにも属していない国ですること。

それは、なんだろうか？

「ビッグ・フロート？」

「ええ。プログライト帝国軍の砦と言われている場所よ。半径1・5 kmの円に、高さ1 kmの塔が立っている。そこを攻めて陥落させれば私たちの勝ち」

「でも海上に浮いてるんですね？ 海水の分子を崩して沈めたり、戦闘機で爆撃したり、水上戦に特化したヒュルフトームを使ったりすればいいじゃないですか」

机を挟んで、三人。

サリドとグラムは不機嫌な表情だった。

しかしサリドは疑問に思ったので、今のことを机のむこうにいる上司 リーフガット・エンパイアーに尋ねた。

「そんなので壊せるなら15年も戦争を続けていないわよ」

「そりゃそうですね」

「なにしろ、」

リーフガットの答えは予想を翻すものだった。

「分析できない謎の力の結果がそれを覆っているのだから」

「『分析できない謎の力』？」

「……彼らはそれを『奇跡の業』とでも言ってるらしいがね」

「しかしレイザリーは資本主義国の中ではトップクラスを誇る技術国。それくらいのことにも簡単に」

「解らないから戦争が泥沼化しているんだ。さっさとわかれ」

サリドの言葉を、少しイライラしているのかリーフガットはぶつ切りにして言った。

「……で、俺らは実際にどうすりゃいいんです？ まさかその『ビッグ・フroot』とやらにある結果を解除しろだなんて……」

「まさにグラム。あんたの言った通りよ」

サリドとグラムの目が同時に点になった。

「あんたらは『ビッグ・フroot』の結果を内部から破壊する、これと。それだけでいいわ」

ブリーフィング後。

「さらっと言ったけど15年間出来なかったことを俺らにやらせるってどういうことなんだよ」

サリドとグラムはキャンプの廊下を話ながら歩いていた。

「でもグラム。考えてみりゃ成功したら英雄だぜ？ プログライトは力こそないもののその『結界』のせいでいわば最強と呼ばれてる。結界さえぶち壊せばこっちのもんだよ」

「サリド、お前はどれだけ楽観主義者なんだよ……」

グラムは頂垂れながら、サリドはグラムがなぜ頂垂れているのかわからないまま、廊下を歩く。

「おっ、姫様」

サリドの声に気づいた姫様はさりげなく笑顔を振り撒く。

「……たしか、サリドに………誰だっけ？」

「グラムです！ グラム・リオール！」

グラムは今まで頂垂れていたのが嘘みたいに大声で言った。

「そう。グラムだったね。覚えたよ。じゃあわたし訓練があるから」

そう言つて姫様は去つていった。

「……で、どうすりやいいんだよ？」

談話室のような部屋で巨大な消しゴムのようなレーションを口に入れ、グラムはサリドに尋ねた。

「ブリーフィングどおりで行くとなんとかフロートの中に入つて結界を生み出す源を壊す、だね」

「……生身でヒュルフタームぶつ壊すよりマシか？」

「さあ、どうだろうね」

「そついやサリド。これつて資本四国と社会連盟による戦争なんだろう？ どうしてレイザリー以外来ていないんだ？」

「敵も味方もそれぞれ別の戦争で忙しいんだろ。グラディアの一件みたいに」

「……実質一騎討ち？」

「うんにゃ、違うよ。実際は『チェス』みたいなもんさ」

「チェス？」

「うん」サリドは手に持っていたコーヒーを一口飲み、「つまり、王　ここでいえばプログライト皇帝を捕まえればいい。資本四国が先か、社会連盟が先か、つてね」

「どういうことだよ。資本四国と社会連盟がぶち当たるんじゃないのか？」

グラムの質問に、サリドはため息をつく。

「だったらプログライト帝国の本拠地となる『ビッグ・フロート』を攻め込まなくていいよね？」

「あ、ああ……。そうだな……」

グラムはようやく理解したようだ。

と、同時に甲高くサイレンの音が鳴り響く。

「まさかまたこの音をきくはめになるなんてね」

「サリド、その通りだ」

二人はそう会話を交わし、談話室をあとにした。

何もない、乾いた大地。

かつてあったであろう都市群の瓦礫が目につく。

「ひでえな。これがすべて戦争の結果か」

「『戦争はなにも生み出さない』とか言ったのはどこの学者だった
っけか」サリドはグラムに尋ねた。

「さあ。どうだろうね。もしそいつがそこにいたら、その通り人間
は馬鹿です、とでも言ってやろうか」

グラムは端末に手を取り、言った。

「サリド、なにやってんだ。おまえ？」

「地形調査」サリドは端的に述べ、「人為的に作られた空洞を探し
てるんだけど。見当たらないね」

「サリド……？ これなんだ？」

気づくとグラムはサリドの持つ携帯端末の画面をじっと見ていた。

「ん……？」サリドはグラムが言っていることに気づき、「ああ。
これはエネルギー反応を示すやつだよ。だから地上に青白い二つの
塊があるだろう？ それは僕らさ」

グラムは頭を掻いて、ひとこと「よくわからん」と不貞腐れたように呟いた。しかし、すぐになにか思い出したのか、

「……じゃなくて、深度7m付近のエネルギー反応について俺は言いたいんだ」

「え？」

サリドはそれを聞いてもう一度携帯端末とにらめっこする。

するとグラムの言う通り、その場所には高エネルギー反応を示す緑の膜がみられた。

「……なるほどね。妨害電波を送っているのか、はたまたフロートの熱を逃がす管か……。行ってみる価値はあるね」

サリドがそう考察した。

「おいおいサリド待てっ！ その確証はあるのか？ 仮に後者だったら俺ら焼け死ぬぞ……」

「それでも、行ってみる価値はある」

「……分あーったよ。行きやいいんだろ？」

「君がそついう性格で助かる」

「好きでこんな性格じゃないんだがね」

グラムはため息のように声を吐き出した。

先ほどの観測地点から南に800mばかり進んだところに二人はいた。

「……………どうしてここに来たんだ？」

「入口か、もしくは通気孔があると踏んで」

「通気孔……………か」

グラムは遠い眼で空を見つめて言った。

「そんな暗い顔するなよ、グラム。どうせ簡単に見つかるからさ」

「こんな状況でも笑っていられるお前の方がおかしい。おまえオ二の子なんじゃねえの？」

「よく“オ二”とか言えるね。それは大神道会の信義じゃないの？」

サリドは笑って、答えた。

この世界はたしかに『資本主義国』と『社会主義国』の二強が争って切磋琢磨している世界だ。

しかしながら、その二強が支配出来ていないわずかな『中立地帯』ができていたりする。ここ、プログライト帝国も、そのひとつ。

プログライト帝国はもともあつた世界で、世界一人口の多い国だ

った。人の種類も世界一だった。

争いも絶えず、人が人を殺し、人の血で喉を潤す。いわゆる残虐な、世界がそこにはあった。

しかしそれも核戦争によって大半が滅び、残った人類は団結し、今の世界を作り上げた。

「でも、争いは絶えなかった。絶えるわけねえよな。もともと戦闘本能や他人と優劣をつけたがることなんて人間の遺伝子に昔から染み付いてることだしな」

「そうして強い、と弱い、が生まれた。弱い人間はカミという偶像にすぎるようになった……。まあ、それが結果として神殿協会や大神道会といった二大宗教が生まれたんだけどね」

「……サリド。話をぶったぎるようで悪いが見つかったのか？ 人口は」

グラムが尋ねると、

「ああ。見つかったよ」とサリドは笑って答えた。

そこにあつたのは小さなマンホールだった。

そして扉を開けると、そこには人一人がやつと入れる縦穴があつた。

「もうちよいマシに隠せよな」。まあ、あいつらもまさかこんなところから潜入するなんて誰も思つてないだろうな」

サリドはそう言つて、梯子を降りようとして　しかしそれをやめ、訝しげに中を見つめた。

「……どうした？」

グラムはサリドの行動に疑問を抱き、尋ねた。

「……いや、なんでもない」

そう言つて、サリドは縦穴を降り始めた。

縦穴はそれほど深くなく、五分と降りる内に通気孔らしき空間にたどり着いた。

「……ひでえ匂いだ。鼻が曲がるくらいだぜ」

グラムが鼻を触りながら、言った。

サリドは端末からアンテナのようなものを突き出し、「そうだね。でも食べ物か何か腐った匂いだから、有毒なガスとかではないと思うな」

「なぜそんなことが言える？」

「グラム。そろそろ自分のもつ携帯端末の機能くらい覚えておこうぜ。この端末にはそういうのを測るセンサーがあるんだよ」

「へえ、初めて知ったな」

グラムは携帯端末を適当に弄りながら、言った。

「んじゃ、向かいますか」

サリドはそう言って歩き始めた。

そのころ、ベースキャンプにいたリーフガット・エンパイアーはノートパソコンを開いて何かを見ていた。

「……遅いわね……。そろそろきてもおかしくないのに……」

彼女はとある資料を見ていた。

それは、これから来るはずであろうヒュルフトームパイロット、ノータの資料。

「『きほう蟻蜂の騎士』……か。しかも『第2世代』のヒュルフトーム、

コロに乗っている……」

彼女はため息をついて一言。

「せめて設計図的なのをつかめれば今後の直接戦争に役立つのだけどね」

そのときコンコン、と言葉を遮るようにドアがノックされた。

「どうぞ」

リーフガットが入室を許可すると、扉は開いた。

その入ってくる姿を見て、リーフガットは驚いて何も言えなかった。

「すみませんね。我が国は『資本四国』の中でも情報統制が厳しくてですね。このような不意打ちのようなことをしてすいません」

そこにいたのは 10歳くらいの女の子。

緑色のぴちぴちの防護服が彼女の体型を強調している。

「……ライバック共和国第五ヒュルフタームパイロット・ノート、アリア・カーネギーですね」

リーフガットは、静かに書類を見ながら言った。

「ええ。間違いありませんよ？」

「女性……よね」

リーフガットは小さく呟いたつもりだったが、アリアはそれに反応し、「女性ですが、何か？ 私はあなた様みたいにそんな大きい“脂肪のかたまり”をつけてはおりませぬ故。だいたいそんなのあったら肩が凝りますし、コックピットが狭苦しく感じますわ」

鼻をヒクヒクと震わせながら、言った。

「しかし……『蟻蜂の騎士』が来るなんて。敵はそんなに強いのかしら？」

リーフガットは机上の紙の書類を整理整頓し終えて、立ち上がった。

「……強い？ そんな簡単に言い表せるほどの敵じゃないわ」

「それは、いったい？」リーフガットは一瞬考え、その言葉を口にした。

「……メタモルフォーズ」

アリアは唇をほとんど動かさず、ただそれだけを言った。

続けて、「神話上に出てきた、と言われる『神の使い手』。人によつては『神獣』とも言つかもしれないけど、それを知るのは軍でも一握りの存在」

「その、メタモルフォーズが、敵？」

「いいえ違うわ。確かにあれはメタモルフォーズの形を為しているけれど、」

「けれど？」アリアの言葉が一旦途切れ、不審に思ったりリーフガットが尋ねる。

「けれど、あれは違う。神話によればあれの放つ咆哮は下手すればこのプログライト帝国を一瞬で消し去る程の力を持っている。でも、そんな素振りはない。……ただ、それだけのこと」

「つまり」リーフガットが机に手をやって言う。

「あれは、偽物？」

リーフガットの質問にアリアは笑って、「偽物、というか劣化版のほうに近いかな。と言っても我々にそれを研究する術がないがね。まず肉片からでもほしいところだ」

それを聞いてリーフガットは、アリアに悟られないようにはあるが、内心驚いていた。

（つまりグラディアでサリドたちが倒したのは偽物。あの肉片を調べれば何か解るかも、ということね）

そんなことを考えながら。

「……ところで、なぜこの情報を簡単にも教えてくれたのかしら？」リーフガットは薄汚れた銀のコーヒークップをコーヒーマシンに持っていていき、エスプレッソのボタンに手をかけて言った。

「……我々だけ知っててもフェアじゃありませんからね。なにせ今回はレイザリーとの共闘。精々足を引つ張らないようにお願いしますよ」

そう言つてアリアは部屋を後にした。

一人残つたリーフガットは苦虫を潰したような表情で出来上がったエスプレッソをちびちびと飲み始めた。

そのころサリドとグラムは通気孔を潜り抜け、なにかの施設にたどり着いた。

直方体の機械がたくさん並んでいて、それら一つ一つが赤やオレンジや緑、といった色が点滅したり激しく光ったりしている。

「ここは……何の施設なんだ？」

グラムが天井のほのかに光る蛍光灯を見て言った。

「携帯端末は圏外だからリアルタイムの情報は入らないけど、たぶんここがビッグ・フロートの真下じゃないかな」

サリドは携帯端末のタッチパネルを触りながら言った。

「敵のアジトの真下か。こいつぁ簡単に着くもんだな」

「油断するなよ。グラム。いつどこに敵がいるかわかんねえからな」

そんな瞬間は、そう遠くはなかった。

刹那、グラムの首筋に冷たいものがあてられた。鋭く、冷たいものが。

グラムはそれに気づき振り向こうとした　　が、あてられた冷たいものを見て、それをやめた。

「……どうやら襲撃のようだ」

サリドは何もできなかった。いや、しようと思えば出来たのだろうが、グラムの首筋にある鋭く冷たい刃がそれを許さなかった。

抜かった。よく考えれば社会連盟は資本四国などとは違って専門の傭兵部隊がある。仮にそれでないにしろプログライト帝国は少ないながらも皇帝の私設軍があることはブリーフィングで聞いていた。なのに、なにも対策をしなかった。誰が悪い？ 無論俺が悪い。何も考えず通気孔という唯一であろう入口を発見して張り切っていたばかりに！

「あ、あのー？」

そこでサリドの思考暴走が唐突に停止した。なぜならサリドとグラム以外 即ち襲撃者 の声が聞こえたからだ。

その声は資本四国の公用語である英語であつたものの、なにかアクセントがおかしかったり、なんというか、英語を習いたての人間が話しているような、そんな感じだった。

「だからですね？ 我々は、このプログライト帝国を、内から、潰そうとしている、ただそれだけの、ことなんです」

片言の英語で、その黒に身を包んだ人間は言った。

一時間前。

結果から言えば襲撃者は味方だった。ただプログライト帝国を内から潰そうと試みて半ば個人的に活動していたそうだが、今のところは秘密裏で表立った活動が出来ていないようだった。そしてなかば

諦めかけていたようだが。

そこでサリドたちが潜入してきた。

即ち敵軍が、ここを潰すために、いや正確には『結界』を壊すためにやってきた。それに便乗しない手はない。と考えたらしい。

こうしてその人間はサリドたちを襲撃して、話の場を設けた、というわけだ。

「……話は解った。しかしなぜここにニンジャがいる？」

グラムはようやく口を開いて、言った。

ニンジャ。

それは古来より暗殺術や潜入術を学んだまさにアサシンの存在。

その元祖はかつてあつた国、ニッポン。

今はレイザリーに取り込まれ、レイザリー王国ニッポン自治区となつてはいるが、未だにその文化は生きている。そしてその文化はレイザリー王国の人間にも浸透しつつあつた。

畳、抹茶、米を食べる文化、日本語などがそのいい例だ。

ニッポンは、『核戦争』前から生きる数少ない国の一つだ。なぜ生き残ったのかは判らない。噂には『冷凍保存した旧人類がいる』とか訳のわからぬ話があるくらいだ。

「なぜ、私たちニンジャがここにいるか、ですが」

その人間は綺麗な、声で話した。

口に布をあてているせいか、少し声が聞こえづらい。

「……すみません。一応、外すのが、常識でしたね。それと、日本語は、話せますか？ 聞き取れますか？」

人間は布を外しながら、聞いた。それにサリドたちは視線を外さずに頷いた。

驚いた。

彼、いや彼女はくの一だったのだ。

くの一、とは女のニンジャである。

「……話を続けます。我々は3年前のプログライト潜入作戦のメンバーでした。たしかに我々ニンジャならば誰にも気付かれずに潜入することは簡単に出来ますからね」

「……仲間は？」

「先ほどのあなたたちを襲った時にいた二人だけです」

「なるほど。戦力が倍にはなったものの、それでも四人……か」

「プログライト帝国の要だけあって迷いやすいですし、罠もありますし、敵も多いです……。我々もやっと11Fまでの内部しか解つ

てないんですよ」

「11Fか……」

サリドはただそれとなく呟いた。

そのころ、乾いた大地には二体のヒュロルフチームが蠢いていた。

ひとつは、陸も海も川も山もある程度の力を発するスタンダード型。俗に言う『第1世代』。

かたやこちらは地上戦に特化した『第2世代』。

この二体が組むことによってなけば戦局は決まったようなものだ。

なぜか？

相手は一体しかないから。しかもヒュロルフチームじゃない。劣化版“と見られている”ものだ。

「……手を引つ張らないようにお願いしますわね。オホホ」

とか、お嬢様のように笑っているのは『蟻蜂の騎士』アリア・カーネギー。

「あなたこそ第2世代という力に振り回されないようにね？」

眉間に皺を寄せながら、言うのが『姫』。

ヒュロルフチームさえ抜きにしてしまえばただの可愛い喧嘩で済んでしまうがヒュロルフチームがあるために、それは、世界を滅ぼす

ことにもなりかねないのだから。

ところで、姫様が乗っているヒュルフトーム・クーチエ、と蟻蜂の騎士が乗っているヒュルフトーム・ユローにはたくさんの差違がある。

まずは足下。クーチエは海上でも楽に行けるようにフロートが簡単に装着できるように普段地上から2mほど浮かせている。これは『地球は巨大な磁石である』という学説に基づいて考えられたものであつて足の底に強力な電磁石を組み込むことによって浮かべる。

それに対してユローにはそんなものはない。なぜなら、地上戦に特化したヒュルフトーム。クーチエも浮上の理由が海上時のフロート装着時なので、ユローはフロートを装着する必要がないからだ。

次は武器。クーチエはスタンダード型と言われているくらい平均になんでも装備が可能だが、そこまで“グレード”の高い武器を装備することができない。

グレード、とは武器の威力を示していて、これが高ければ高いほど、強い武器である。

一方ユローは装備できる武器の種類が限られる代わりにグレードの高い武器を装備することができる。

この二つにこんな違いがあるのは、ただ造られた国の技術の問題ではない。

ただ、“進化”しただけ。既にレイザリーでも第2世代はできてい

る。

ならば、なぜ？

ノータは、一つのヒュロルフタームにしか乗ることが出来ず、二つ以上のヒュロルフタームに乗ることは難しい。

ヒュロルフタームを発表したヨシノ博士の論文の一節である。

ヒュロルフタームとノータはノータが操るため、ヒュロルフタームが放つ微弱電波とシンクロする必要がある。

そのためにノータはヒュロルフタームに精神の波を合わせる必要があるのだ。そんな簡単にできることではない。とてつもない時間にとてつもない苦勞、とてつもない精神的疲勞がかかる。

要するにヒュロルフタームはノータさえいなければただの赤ん坊。考えることも出来なければ、本能のままに行動する。

そこに、それがやってきた。

『第1世代』と『第2世代』。二体のヒュロルフタームがいるのに
も関わらず。

ただ、それはその普通なら最悪であろう状況を鑑みず、やってきた。

「……やってきましたわね」

「ええ」

二人のノータは会話を交わす。

「じゃあ……、まずは、私からっ!!」

そう言つて蟻蜂の騎士が乗るヒュロルフターム・ユローはその砲口
に光を溜め込む。

「粒子砲……?! さっそくそんなものを使ってエネルギーは持つ
の……?!」

「おほほ、ご心配のようなので先に申してあげますが、私は予備バ
ッテリーを常に持つていつてるのですよ。だから常に最大出力が可
能になる!!」

そんなことを話している間にも、粒子砲の中には光がどんどん集ま
ってくる。

そして、ついには。

粒子砲が、劣化ヒュルフトームに向かって撃ち放たれた。

たしかにヒュルフトーム・ユローの放った粒子砲はヒュルフトーム擬きを命中していた。粒子砲は摂氏3500度。その気になればヒュルフトームの装甲をも融かすことができる。

筈なのに。

その擬きはびくともしなかった。

「まさか……。この私のヒュルフトームの粒子砲を耐えた?!」

蟻蜂の騎士はこれまでに見たことのないほど慌てていた。当たり前なのかもしれない。これまでどんな戦闘においても冷静沈着、時には味方をも平気で撃ち抜く、と言われていた彼女が、こつも慌てているのだから。

予測範囲外の事態。

彼女ら二人はそう考えた。

「ならば……」

そう言って姫はコックピットにあるレバーを引く。

ジャキッ、という金属と金属が擦り合わさったような音が響く。

「……これしかないわ」

『リリー・ダレンシア少尉！ なにをするつもり?!』

気づいたら通信が入っていた。それは上官のリーフガットからだっ
た。

「粒子砲がだめなら、コイルガンを撃つ。それでだめならレールガ
ン。手はまだまだある」端的に述べ、通信を切った。

……のだが。

『ダメよ。リリー。それは許されない。たとえ「ノート」としても、
その命令は受理されない』

「闘わずに指揮だけしてるあなたがよく言えることですね」

リリーの声は平坦だったが、それは明らかに怒りの表情が入ってい
た。

『だめよ。リリー。それは絶対に「さよなら」

リーフガットの話が終わる前に彼女は通信を強引にシャットダウン
して、

砲にためていたエネルギーを一気に射出した。

撃ち放ったのはコイルガン。

コイルガンとは電磁石のコイルを用いて弾丸となる物体を加速、発射する装置のことだ。このヒュロルフタームに使っているコイルガンの原理はとても簡単で、弾丸を走らせる細長い管を包み込むように一定間隔にして複数個のコイルが設置されており、そのコイルに電流を流すことで発生する磁力を利用して弾丸を素早く引き、段階的に速度を上げ、射出する。といったものだ。

まるで音速の戦闘機が走ったあとに発生する、ソニックブームのような衝撃と音があたりに響いた。

それはビッグ・フロート内にいた二人にも例外なくやってきた。

「……なんだ。今の轟音」

「グラム。ここから外が見えるみたいだ」

サリドとグラムはあのニンジャに連れられ、ひたすら長い螺旋階段を上っていた。なんでもここが一番警備が薄いんだとか。

窓を開けるとそこに見えたのは、ヒュロルフタームが二体と、グラディアで見たような擬きが一体。

数から行けば勝てる筈なのに。

なぜかそこにはところどころボロボロの二体があった。擬きだけが綺麗な姿を保っている。

「おい、グラム」

不意にサリドが呟いた。

「どうした。もしかしてこの風景に圧巻されてるとか？」

「馬鹿野郎。そんなわけないだろ。擬きの足跡を見てみろよ」

「は？」

グラムがサリドに言われて、足跡を見ると、

そこには、“なにもなかった”。

「足跡が……ない……だと？」

「そう」サリドは笑って頷き、「おかしいことだと思わないか。あの二体ですら空気の急激な射出とかで足跡は出来てるにも関わらず、擬きにはできてない」

「まさか……」グラムは一つの結論に辿り着いた。

どうやらそれはサリドも同じようで、

「ああ。そうかもしれない」

一息。

「あれは幻影で、本体はどこにあるよ」

「ちょっと待てよ。そしたらあの二人はそれを知らないで……」

「だろうね。あのまま無駄にエネルギーを射出し続けて空っぽになった隙を……窺っているのかも」

「おいサリド。このままじゃまずいぞ。どうするんだ？」

「どうするもこうするもないよ」

サリドは通信機に手をかけて、言った。

「僕らがどうにかするしかないだろ？」

サリドは通信機をてにとり、どこかに通信を始めた。

「サリド・マイクロツェフから本部へ！！」

「はい、どうした？ サリド」

なぜか通信に答えたのはリーフガットだった。

「なぜリーフガットさんがそこにいるかは知りませんが、単刀直入に言いますね。今ヒュルフタームが戦ってるのは幻影です！！本物はどこか別のところに」

サリドがそこまで言ったとき、不自然なノイズがかかりはじめた。

「あれ……？ つな……い？ とりあ……れわ……んぞう……」

リーフガットが聞き取れたのはここまでだった。

「迷惑をかけたようで失礼する」

ノイズがひどくなったあと、ようやく回復して、リーフガットはもう一度通信をとろうと思ったときのことだった。

そのあとに聞こえてきたのは、壮年の囁れた声だった。その声はリーフガットも聞き覚えがあったように。

ヴァリヤー・リオール。

レイザリー王国で上院議員を務めていて、『四天王』という実効支配組織の一員でもある。

（なぜ四天王直直に通信を……？）

そんなことをリーフガットは思っていたわけだが。

「先ほどサリド・マイクロツェフ、グラム・リオール両氏が流した情報は確証を掴めていない。彼らは劣化ウラン弾による放射線被曝によって『戦争症候群』に陥り、論理的思考力と記憶力が低下して、錯乱したとみられる。繰り返すが先ほどの情報は間違いの可能性が高い……」

そこで、通信は途絶えた。

通信は、無論サリドたちにも聞こえていた。

「畜生！！ あのかそ親父いったい何言ってやがるんだ？！」

グラムはサリドから通信機を奪い取り、

「おい！！ 聞いてるか！！ 俺たちの言ってることは嘘じゃねえ！！ だれか応答しろ！！」

「無駄だ。グラム。もはや誰もお前の事を聞かぬよ？」

「……じじい……！！」

「ほうほう。遂にはそう呼ぶようになったか。親は大事にしるよ？」

「お前なんか親と呼べるか！！ 貴様こそ虚偽の情報を流してどうするつもりだ！！」

グラムは通信機に吠えた。虚しく廊下に声が響く。

「……知っているか？ 南のリフディラのレジスタンスの活動が活発化していることを？」

「？」サリドは聞いたことに首を捻る。

「お前らの『ヒュロルフタームを素手で倒した』勲章は全世界に知れ渡った。それによって『人間でもヒュロルフタームは倒せる』と認識されてしまったのだよ？ そんな“偶然によって生み出された”認識によって世界の秩序は崩れつつあるのだよ？」

「だから俺たちを都合よく殺すというのか？！ 『戦争で勝つのはヒュロルフターム』と明確に位置づけるためにか？！」

「……人類の歴史には犠牲を伴うのだよ。それを解りたまえ」

ヴァリヤーは、さらに淡々とした口調で語る。

「なぜ解ろうとしない？ 強いものが、この世界を支配するのだよ。それを覆してもらっちゃあ困るんだよ」

「だから……殺すのかよ？ でもここにヒュロルフタームはいないぜ？」

それを待つてたと言わんばかりにヴァリヤーは笑いだし、

「なにも殺すのはヒュロルフタームとは決まっておらぬよ？ 今二体のヒュロルフタームが戦っている敵の本体は一体どこにいるのかねえ？」

「……………まさか！！」

サリドが言った瞬間。

ドゴオオオオン！！ と何かが爆発したような音が、響いた。

「なんだ?!」

ニンジャのひとりはクナイ　彼らがよく使う小刀のことらしい
を構えて言った。

「……お出ましだな」

サリドはそう呟き、ウエストポーチからなにかを取り出した。

「おまえ、なにを……!!」

「手榴弾だ。場合によってはこれを投げて目眩ましのかわりにする」
ズウウン、と地響きが、さらに大きくなっていく。

「……ヒュロルフタームか？　それともグラディアで闘った生物兵器か？」

「『メタモルフォーズ』ですね」ニンジャは端的に答えた。

「メタモルフォーズ？」

「ええ。一般には、神の使い手、とも呼ばれる、巨大な獣。一説によれば、一回の砲撃で、国がひとつ消せる、とも言われるくらいらしい」

ニンジャの声はとてもまっすぐで冷たく、まるで機械のような声だ

った。

それは彼らに潜む恐怖を後押しするような、そんな感じでもあった。ついにそれは、姿を見せた。

「これは……魔神?！」

サリドは思わずそう呟いた。

壁を崩して出てきたのは、人形の何か。しかし、そんな簡単に明言できるものではなく、例えば肩には大きな棘が五、六本生えていたり、顔は般若の面のような険しい顔をしていた、要するに『人のようでない』何かが、そこにはあった。

「おいおい……いくらなんでもこいつらは倒せねーぞ?！」

グラムが頭を抱えながら。

だが。そう呟いて彼は何かかかっていたサングラスを外して投げ棄てた。

「やるっきゃねえんだろうな。なんせそれが俺らの仕事であり命令だからな」

「行くぞっ！！」

二人は叫んで、その“魔神”に突っ込んでいく。

まず、二人は小型の銃を取り出しそれを魔神に向けて撃ち放った。

ズドン！！ と何らかの衝撃で車のバンパーがへこんだような音を立てる。

しかし、それはびくともしなかった。

「ならばこれなら……！！」

そう言つてサリドは手榴弾の安全装置を引き抜きそれに向かって投げ棄てた。

「……っておい！！ こんな狭い空間で手榴弾なんか爆発させたら俺たちまで被害を被るぞ？！」

グラムが手榴弾を投げる前にそんなことを言っていたような気がしたが、それは完全に無視をした。

刹那。

目映い光とともにサリドたちは後ろへと衝撃で押された。

「いたた……」

サリドは目を覚ました。

グラムたちも気を失ってはいないものの、倒れていた。

「メタモル……フォーズは？」

サリドは立ち上がり、あたりを見渡した。

まわりは、手榴弾の爆撃によってもたらされた土煙で視界を遮られていた。

ポタリ。

どこからか地下水かなにかの雫が落ちたような、そんな音がした。

そう遠くない距離と判断して、サリドはその雫が落ちるほうへ向かった。

そこまでいって、サリドはふと思った。

『ここはヒュルファームの戦いが見れるほどの高さなのになぜ水の雫が落ちているのか』ということに気がついたのだ。

「……なんで雫が……？」

その答えは、直ぐそばにあった。

そこにいたのは。

傷を負って、そこから大量に血が出ているニンジャと、

それに押さえ込まれているメタモルフォーズの姿があつた。

「おい!!」

サリドの声にニンジャは気付いたのか、傷付いて血にまみれた顔で笑った。

それは太陽が輝く畑で育てられた一本のひまわりのように。

無垢な、表情。

メタモルフォーズは、もう動かないようだった。

「……大丈夫か？」

サリドの問いかけにニンジャは僅かに頷いた。

「なら、いいんだが。えーと……」

「ストライガー」

「？」

「ストライガー・ウェイツ」

「あ、ああ。名前ね。因みに俺の名はサリド・マイクロツェフ」

「よろしく」

「ああ。もう終わったかな」

その言葉を交わして、二人は握手をした。

そのころ、リーフガット・エンパイアーは書類の山と格闘していた。

「……怪しい」

リーフガットは書類の山からとある書類を取り出し、言った。

そこには『ヒュロルフターム・プロジェクト第85次報告書』と達筆なコンピュータ字体でかかれていた。

そこにはこう書かれており

1年前、ゼロ号機の暴走により死去したヨシノ博士の娘はヴァリヤー氏が引き取ることとなり、我が委員会の案件もようやく一つ減った。

次はヒュロルフタームの量産である。これは機械さえあれば出来ることだが、“もうひとつの”核がない限り難しい。我々が最初から望んでいた『十二使徒をヒトで作る』ことはできないのか……。まだまだ試行錯誤が必要だ。

なので、我々はもうひとつの方法を思いついた。それが『チルドレン・ノートシステム』だ。これは、ヒュロルフタームの量産機に装着されない『オーレス』の代用のため、人間のノータをたてて、そのまま操舵などを出来るようにし、オーレス無装備でも装備したヒュロルフタームに事変わりなく使えるようにするということだ。

直ぐ様、我らは既に完成割合を満たしていた一号機から四号機のノートを決めることとした。決めるには、全人類から無作為、というわけにもいかない。寧ろ問題はそこなのだ。そこで派遣・調査院を設置し、そのメンバーがノートに足る能力を持つ子供を選別していった。

そして、ようやくノートが決まった。彼ら彼女らはまだ幾ばくもない年齢の者達だが、ヒュロルフタームとの同調を考えればそれでいい。

彼らのことは、育成機関に任せておく。どうせこれから軍の狗だ。ちゃんとした教育もする必要はない。軍に必要な教育さえしておけばいい。

文書を読み終えたリーフガットは、眠そうな顔をしていた。

（さすがに30時間はきついわね……。少し仮眠でもとろうかしら）

とふとリーフガットは立ち上がって、

異変に気づいた。

「やけに、静かね」

そう。今まで外ではヒュロルフタームたちがドンパチ、コイルガンを放ったりしているはずなのに。

まるで何もないかのように静かだった。

(……終わった?)

リーフガットは思っ、そばにあった扉を開けた。

しかしそこには、リーフガットが予想したとおりの状況があったわけ。普通の通路、青軍服の人間たちが慌ただしく歩いていた。

「私の思い違いだったのかしら」と呟くようにリーフガットは言う、自分の部屋に戻っていった。

ただ、それだけのこと。

そのころ、ヒュロルフタム。

「あら……。動きが止まりましたわね？」

「本当だ。どうしたのかしら？」

二人のノータは話をしていた。

そして結論を打ち出した。

この敵はもう死んだ、と。

キャンプベースでは、宴が行われていた。なんでも勝利祝いだとか。

「どうせ本国に帰ったら盛大にやるのにどうしてこのレーションだけで宴をしようと考えるのかねえ。はやく帰ってフライドチキンが食いたいよ」

グラムは特大レーションにかじりつきながら、言った。

「はっちゃけたい気分なんだろ。たぶん」

サリドはいつものサイズのレーションをスプーンで掬って一口食べた。

「それはそうだな。ま、俺たちもいらん嫌疑が外された祝いという

ことだ」

「なんの祝いだよ。元々知らなかったし、別にどうでもいいんじゃないの？ 少なくとも俺はそんなかんじにプラス思考で考えているけどさ」

サリドはまた、レーションをスプーンで掬って言った。

「ふうん。そんなもんか」

「ああ。そんなもんだ」

「サリド、グラム。どうした。辛気臭い顔をして？」

サリドとグラムの会話に、私も混ぜてくれよ、と言わんばかりにリーフガットが混ざり込んだ。

「どうしたんですか。リーフガットさん。仕事は終わったんですか」

「始末書とか今までのことをワープロに打ち込むことを仕事とは呼ばん」

確かにそうだ、とサリドは思った。

「で……。あの騒動は誰が……？」

「サリド。それはあんたらが一番知っていることじゃないのか？ 犯人はヴァリヤーだよ。あいつしか今のところこんなことが出来る所業の人間はいない」

でもな、とリーフガットは続けた。

「証拠がないんだ」

「証拠？」

「そうさ。やつは確かに我々に向かって情報攪乱を目的とした通信を行なった“としている”」

「……としている？」

「考えてもみる。あの通信は録音はしてある。声色の判定からもヴアリヤー本人と確定するだろう」

だがな。

「それが『ヴアリヤーが国を裏切るために情報攪乱を行なった』という証拠にはならんのだ」

「?! なぜ……？」

驚きを隠せないサリドにリーフガットは続ける。

「世の中には著名な人間の声色のデータを手に入れて情報を攪乱させる、というテロの常套手段があつてな。まず国のお偉いさんはそっちの方向から調べ始めるわけだ。その人間にとってはまさか『本人が情報攪乱のためにやっている』とはおもわないだろう？」

「確かに、その通りだ……」

サリドはもはやレーションを掬うスプーンの手もやめ、ひとり頂垂れていた。

「まあ、そんな簡単に頂垂れて、諦めるんじゃないよ」

リーフガットは手に持ったマグカップをどこかに置いて、

「あんたらは十分頑張った。一先ず休め。いつ戦争にまた駆り出されるかわからん時代だからな」

リーフガットは笑って言った。

サリドは彼女の笑顔を初めて見たような気がした。

リーフガットの助言通り、帰りは休むことにした。床について、目を瞑る。でも、なんだか眠れなかった。

なんだかおぞましい感じがして、寝ることを許されなかった。

そして、ひどく寒い。四季が豊かな本国に來た証だろう、とサリドは納得し、ようやく深い眠りについた。

本国に帰って表敬が終わったサリドたちには一週間の休暇が設けられた。

「サリド、聞いたか？ 俺たち一週間休みだよ！」と、スイッチをオンオフしながら、グラム。

「そうか。でもその感じじゃ一週間過ぎるとまた戦場に駆り出されるっばいな」と、なにか壊れた機械をドライバーやはんだごてを使って直しながら、サリド。

「というか……、お前は何をしているんだ？ さつきから中毒のありそうな匂い吹き出して」

「……まさかこの人ははんだの危険さを知らない？！ はんだというのは体内に入ったら出されずに蓄積されていくものなんですよ？！」

「えっ、まじで……。でもサリド、お前は大丈夫そうじゃん」

「俺は透明なマスクつけてっからいーの。意外とこっつのは常識だぜ？」

サリドはそう言って、また作業に戻った。

そんなこんなで休日一日目を迎えたサリドとグラムである。

「なあ、サリド。毎日ヒュロルファームの勉強したいのはわかるが、今日くらい遊びに行かねえか？」

グラムが、そんな提案をしてきた。

サリドは暫く黙っていたのだが、

「……そうだな、それもいい」

ようやくサリドはOKサインを出した。

グラムとは次の日の朝、首都から少し離れたショッピングモールで会うこととなった。

ショッピングモール、といっても仮に戦争で爆撃されないように地下に何層も分かれている、いわば“地下都市”の中にあるのだが。

そしてサリドは、その日、そこにいた。

サリドはそこまで私服を気にしないタイプなのか、ジーパンにＴシャツ、それにウエストポーチという軽装だった。

「……まあ、どこ行くかわからん……。デートとかじゃあるまいし」

サリドは独り言のように呟いた。

「よっ。やっぱ早かったな」

サリドとの待ち合わせ場所にグラムがやってきたのは、それから五分ほど経ってからだった。

「ああ。待ち合わせをしたからにはそのどんなに遅くても五分前には着くようにはしてるからね」

「そうか」

ところで。サリドが尋ねた。

「隣にいる女の子は誰なんだい？」

待ち合わせ場所にきたのはグラムだけではなかった。正確に言えば。

グラムの隣には女の子がいた。栗色の髪にキラキラとした瞳（輝いている、と言ったほうがいいのかもしいれない。ともかく光が当たって輝いているのだ）、顔立ちも整っていて、水色のワンピースを着ていた。

「彼女は……？」

「ああ。こいつか」グラムは後ろに振り向き、そちらのほうを指差して、そして言った。

「妹だ」

「い、妹？」

グラムの言葉にサリドの対応はとても冷ややかなものだった。

「そう。妹。俺の」

「まじかよ……。まさかお前に妹がいるだなんて……」

「その発言には少し問題があるんだが？」

グラムはすこし顔をしかめながら言った。

「あ、あのっ」

その話の中心にいた少女は、恥ずかしがりながらも、サリドに話しかける。

「ん？ どうしたんだい？」

サリドはそれに答える。

「いや、あの……。いつも兄がお世話になってます」

なんと丁寧にお辞儀までついている。

「出来る妹と出来ない兄、ねえ……。普通逆じゃないの？」

サリドはグラムに話しかける。

「うるさい。なっちまったもんはしょうがないだろ」

グラムはつつけんどんに返した。

というわけなので、サリドたち三人はショッピングモールで遊ぶこととなった。

ショッピングモールはサリドたちが今までいたプログライトのベースキャンプ（あれでも一つの国がすっぽりと入ってしまうくらいなのだが）が二個ほど入ってしまうほどの大きさだ。とても一日では回り切れない。

「んじゃー、まずどこ行くか」

グラムがマップをつまらなさそうに眺めて、言った。

「お兄ちゃん、私洋服買いたいんだけど」

妹が話しかけてきた。

「あ、そう？ わかった。じゃあそこまで行くよ。キャティ」

グラムがそう言うときキャティは嬉しそうに小走りになって、通路の先に向かった。

「兄弟、っていいなあ」呟くようにサリドは言う。

「そうか？ あれでも会ったらいつも喧嘩だぜ？ 思春期の妹、って結構めんどくさいもんなんだ」

「そんなもんなのか？」

「ああ」

そんな世間話をしながら二人もキャティの後を追った。

そのころ。リーフガットとはある場所にいた。

いつものように軍服じゃなく、黒いスーツでびしっとしている。ところで、ここは何処なのだろうか？

ここは、議員会館、と呼ばれる場所で、この国の全議員の事務所がある所だ。

彼女はその最上階にいた。そこには噴水やら小高い山やら、はたまに滝まで付けられた庭が広がっていた。

「これが事務所ねえ……。もはや別荘じゃない」

ここにいる人間はただひとり。

ヴァリヤー・リオール。

先の戦争で妨害行為を行なったと見られている人間。そんな現在は自主的に中に籠っている。

「なにも工作していなければいいのだが……」

そう言って、リーフガットは庭の終着にある扉にたどり着いた。

「やあやあ。リーフガットくん。よくここまでやってきたなあ」

扉を開けると、その唸れた声。

ヴァリヤーの声だった。

「ひとつ、お尋ねしたいことがございまして来たのですが」

「まあ、座るがいい。大丈夫だ。畏なんぞ仕掛けてはおらんよ」

ヴァリヤーがそう言うのでリーフガットはそれに従って近くのソファに腰かけた。

「……して、聞きたいことは？」

「これ、読ませていただきました」リーフガットはカバンからある本を取り出す。

それを見てヴァリヤーは僅かに眉をひそめて、「いかなあ。これは書物庫に保管されていた、持ち出し厳禁のやつじゃないかね？
こんなものを持ち込んで……、君も只では済まんだろう？」

「こんかいは委員会の協力を得た上です」

リーフガットは即座にそれについて返す。

それを聞いたヴァリヤーは思わず立ち上がった。

「まさか……！！ 委員会は私を裏切って……！ こんなことを」

「なにを仰いますか？」

リーフガットは笑って、

「貴方が国を裏切ったんでしょう？」

「違う！ 私はただ……っ。世界の安寧とヒュロルフタームのことを思っ……」

「その結果のためにやったことが妨害か？ ほんと何を思っているのやら？」

「……もう、我慢ならん」

「ん？」

「許さん…… 許さんっ！！ せめて貴様だけでも殺すっ！！」

そう言ってヴァリヤーは近くにあったボタンを押す。

「なんでわしがこんなビルの最上階にいるのか、わかるかね？」

ゴウン、と低い唸り声が部屋の中に響いた。

「まさか……、このためだったと……？」

そこにいたのは小型の人型戦闘兵器。

ヒュロルフタームだった。

そのヒュロルフチームはヴァリヤーを手のひらに乗せて、ウオオオオオオ、と“雄叫びのような音”を出した。

その衝撃波にリーフガットは思わず足がすくんだ。

「……まさか、ヒュロルフチームをも操っていたなんて!!」

「ヒュロルフチーム・プロジェクトの創始メンバーであつた私を見くびってもらっちゃ困るなあ」

ヴァリヤーはそう言って、コックピットの中に入っていく。

そして今度は、その声がヒュロルフチームに内蔵されている拡声器から発せられた。

「今まではこれを封印していたが……。もう我慢が出来ぬ……。!!
こいつを使ってレイザリーを中からつぶし、私だけの国家を作り上げる……。!!」

「……そんなこと、ほんとうに出来るとお思いで？」

リーフガットは乱れた髪と服装を整えながら、さも戦場ではない、ここは日常空間であることを意識した上で言った。

「私にはヒュロルフチームを倒す馬鹿野郎どもがいましたね」

そのころ、ショッピングモールで遊んでいたサリドとグラムにもその雄叫び　本人たちにはそうと聞こえなかっただろうが　がはつきりと聞こえた。

「サリド。今の聞こえたか？」

「ああ。地響きにしちゃあ、生ぬるい、気持ち悪い音だ」

サリドは気だるそうな表情で言った。

戦闘は二人を待たせなかった。

直後。

ドバアアアン！！　と上から滝のように瓦礫が落ちてきた。

瓦礫の中心には、鉄球。

この世のものとは思えないほど暗い、鉄の球。

「なんだよ……。どうやら敵は待つてくれねえよーだな！！　こちらとらヒュロルフチームとの二連戦でやっと取れた休暇なのによ！！」

「ああ。そうだ。だがグラム。ここで落ち込んでる場合じゃないとおもっぞー」

「落ち込んでるんじゃない！怒ってるんだ！！一体何処のどいつがこんなことしやがるんだ！！」

グラムは叫びっぱなし。

それでも、敵の猛攻は緩まない。

ドゴゴゴゴゴ！！と鉄球は何発も撃ち込まれ、その度に天井の壁材が崩れ落ちる。

「もう許さねえ！！行くぞ！！サリド！！」

「キャティちゃんは……妹はどうするんだ？」

「……」

しばらくそのことで二人は思考を停止していたが、

「大丈夫。キャティはここにいる。だからお兄ちゃんたちは敵を倒してきて」

強く、真っ直ぐな眼で、彼女は告げた。

「……そうか」

「うん。だから安心して世界を救ってきてね？」

キャティのその言葉を聞いて、二人は走り出した。

そのころヒュロルフトームの猛攻が地上にて続いていた。

「おのれえ……！！　どいつもこいつも私の邪魔をしおつて！！」

「如何なさいますか？」

コックピットには一人の少女が座っていた。

お姫様　　レイザリー王国に所属するヒュロルフトーム・パイロット　　と同じくらいの背格好、まるでまな板のような胸まで同じと来た。まるで双子のように。

その少女は機械のように、抑揚のない声で今一度尋ねる。

「如何なさいますか？」

「そうだな」ヴァリヤーは暫く考え、「まずは国の施設を破壊していくとしよう。そして……あわよくば『あれ』の回収を行いたい。それが出来ねばそれすらも破壊せねばなくなるな」

淡々と語った。

そのころ、ショッピングモールから脱出したサリドとグラムは螺旋状の階段をひたすら昇っていた。

「……まさか非常用電源になっていたとは。エレベーターも動かないわけだぜ」

「地下だから無線も通じないしな」

グラムとサリドがそれぞれ言った。

「しかしいたい誰が？ まさか社会連盟と手を組んでレイザリーを潰す気か？」

「実は世界滅亡が目的だったりして……まさかそりゃねーか」

グラムはグラムで自己完結した。

「とりあえず気を抜けねーな。まだ姿貌すがたかたちがわからねーんだ。どういう戦いになるかもさっぱりわかんねーぞ」

「そうだね。それにどうやってレイザリーの中心まで来れたのかな……？ それも聞いておきたいけど」

「まあ。行くうぜ。くそつたれを潰す戦いの地に、な」

グラムはそう言って壁にあった非常用シャッターのボタンを押した。

「……どうなってるんだよ。これ……」

地上に出たサリドとグラムを待ち受けていたのは、黒い球体のようなものから手足が生えたような、ともかく、謎の物体がいた。

「……待ち伏せかよ!!」

そう言っただけサリドたちは思いきり走る。

刹那。

ドゴオオオン!! と地下街の出入口が崩れさる音がした。

「畜生!! あんな街中でコイルガンなんか撃ちやがって!! あれがもたらす磁場がどれほどの影響をもたらすって知らねーのか?!」

サリドは叫びながらもコイルガンの咆哮から逃げるために走る。走る。走る。

「というかだ。サリド!! なんでこんな街中に50m級のヒュールファームがいるんだ?! 格納庫にみんな保管されてるはずじゃねえのか?!」

『これは、私独自の所有物だ』

背後から声が聞こえて、思わずそちらを振り返る。

声がする方向は ヒュロルフタームからだった。

「なんだ？ 最新型のヒュロルフタームには自動音声装置でも着いてるのか？」

グラムは驚いたように言った。

「いや、違うな。たぶんどこかにスピーカーがあってコックピット内のマイクを通じて……」

サリドがそこまで言ったときだった。

『ご名答！ まさかそんな簡単に解くとはね。ヒュロルフタームの設計士を目指しているだけある』

スピーカーからまたも囁れた声が聞こえてきた。

「まさか……親父、か？」

グラムが慌てた素振りで話した。

一瞬の間があつて、『私は絶望したよ。まさかお前が素手でヒュロルフタームを倒すことになるうとはな』

「……素手でヒュロルフタームを倒す。このことに何処で絶望を感じて言っただよ」

『解らないか？ 前にも話したが、人間がヒュロルフタームを倒すことは「あつてはならない」のだ。今までヒュロルフタームは最強

の存在、と呼ばれていたからな』

「……だからってな、その結果がこれか？」

グラムはすっかり瓦礫の山となった街を眺めた。

『ああ。そうだ。世界を元に戻すためにはどんな犠牲を払っても構わん。そして、その先にある事までもな……』

「ふざけんなよ」

グラムは声に抑揚をつけず、ただただ平坦な声で言った。

「なんででめえの勝手な野望のせいで街が破壊されなきゃなんねーんだ？ 死ぬ必要のない人間が死ななければならなかったんだ？！」

グラムの叫びは地面を微かながら揺らした。

それでもヴァリヤーはひるまなかった。

「言いたいことはそれだけか？」

ただ、それだけを述べて。

とある少年は瓦礫の中に埋まっていた。

少年は母親と一緒に街を歩いていた訳だが、そのところでヒュロルフチームの猛攻に巻き込まれてしまったのだ。

彼は、彼の母親の名前を叫ぶ。何度も、何度も。

でも、母親は答えない。

少年にゾワツ！！とこれまでに以上には感じない悪寒を感じた。

俺は死ぬのか？

少年はついこの前兵隊に入っただけでプログライト戦争にも出陣していた。今回は休暇だったわけだが。

俺は死ぬのか？

その言葉だけが頭にリフレインする。

希望はどこにある。絶望はどこにある。現実には絶望を、ここまでも簡単に、単純に、かつ恐ろしい方法で与えるものなのか。

少年は何かに取りつかれたように体を丸くして、そのまま動かなくなっただ。

俺は……。

少年は決意する。

それは何かをも動かせない程の小さな意志だが、

一人の人生を変えるには大きな意志でもあった。

俺は、生きたい！

そのころ、グラムとサリド。

「ほんと……、仲間だと心強いんだけど敵になると忌々しい……！」

「リーフガットさん！」

「なぜここに……？」

サリドとグラムはそれぞれ違った反応をした。

それを見て、彼女は少しだけ笑った。

「……ヴァリヤーを追い詰めて、捕まえようとしたらこのザマよ！
！ まったく、まさかあんなくし球があるなんてね……！」

「あれはなんなんですか……！」

「あれは試作品のヒュロルフターム『第三世代』！！コードはたしか」

『ビースト、さ。そうだったかな？リーフガットくん』

リーフガットの代わりにヴァリヤーが述べた。

「獣……。即ち戦闘能力が第二世代と段違いなのよ！！こいつに敵うのはヒュロルフタームしかないし、第三世代も幻としてとらえられていた！！だから細かい資料なんて、残っちゃいない！！」

精一杯の声で、リーフガットは叫んだ。

「第三世代……」

グラムとサリドはただそれだけを呟くことしかできなかった。

『驚いたかね？この第三世代は対社会連盟用に制作された最高傑作！貴様らなんかに簡単に壊せる代物ではない！！』

「ふーん。だったらそれじゃあ、」

サリドはウエストポーチのポケットのチャックを開けた。

「試してみようか」

サリドが手にとったもの。

それは手榴弾。

しかし、ただの手榴弾ではない。そんなものを投げても無駄、という前例があるからだ。

なのに、なぜ彼はその失敗すると決まってる道具を使おうとするのか？

『ハハハ！！ 手榴弾だと？！ 血迷ったか！！ お前らはそんなのは無駄だとグラディアとプログライトで学ばなかったのか？！』

「……何を勘違いしている？」

なにっ、と思わずヴァリヤーは小さく、だがサリドたちに聞こえるくらいに声を発してしまった。

サリドは続ける。

「だれも、『外を壊すのが目的』にこれを使うだなんて言ってないんだけど？」

そう言っつて、サリドは第三世代向かって手榴弾を投げつける。

刹那、

閃光が辺り一面に弾けた。

手榴弾は確かに爆発した。

ヴァリヤーが思った通り、“第三世代の外装の負傷は”一切見られなかった。

「閃光で一時的に視界を封じるか……。まあそれもよからう。しかしこちらにはセンサーがある。これがあればどこに隠れようと……」
ヒュロルフチームには何者がいないか探すために赤外線センサーや鉄分検知器、これは血などから何処にいるか判断するものだ、などがあり、常に稼働している。

しかし、今そのセンサーの反応を示すはずの画面が、

砂嵐と化していたのだ。

「?! そんな馬鹿なッ!! なぜセンサーが反応しない?! ……
…何故だ……!」

ふと、ヴァリヤーは思った。

サリドという青年が最後に放った手榴弾。

実はあれは『外にダメージを与える』ものじゃなく、

“ジャミングによって中の機械にダメージを与える”ものだったのではないかと。

レイザリー王国は資本四国の中でも一番の技術国だ。仮にそんなものが作られていてもおかしくはない。

ただ、思ったのは。

仮に、それがあつたとして、なぜあの青年は知っているのか？

そして。

手榴弾の爆発の一瞬の隙を狙って、近くのビル　どちらかと言えば瓦礫の山に近いのだが　に隠れたサリド、グラム、リーフガットの三人は、息を整えていた。

「……！！　あんなことするなら先に言っておきなさいこの馬鹿！！　思わず死ぬところだったわ！！」

リーフガットはサリドに食ってかかるように叫んだ。

「でもあのヒュロフタームから逃げるためにはあれが必要だった。あれしか方法がなかったんですよ。何も言わなかったのは申し訳ないと思つてますけど」

サリドは息が切れているのか、途切れ途切れに言った。

「だからってあれはねえよ……。なんでお前手榴弾なんか持つてんだよー！　ここは戦場じゃないんだぞ！！　お前はいつもウエストポーチに手榴弾を入れておかないと不安な人間なのか？！」

「いや、グラム。違うんだよ。このウエストポーチ、いつも持つて

いつてるから軍のどこにも持ってつてゐるんだよね。……で誰かが悪戯でいれたんでしょ」

「危険すぎるなそれ！！ 最悪自分のウエストポーチで爆発するんじゃない？！」

「でも今回は手榴弾入れた人間に感謝するわ」

「それは俺も同じだ。サリド」

グラムはそう返した。

「ひとまず逃げたが……、どうする？ にしても『フラッグ・ボム』の爆発時に発生する微弱な電磁波によるジャミングをするとはな。さすがの私も驚きだったぞ」

リーフガットがサリドに語りかける。

「兄ちゃんが武器開発に一役買っただけでね。たしか『オプグランドセキュリティ社』だったかな」

「オプグランド……。たしかリフディアに本社を置いていたな。神殿協会御用達の武器制作会社だったか」

神殿協会。

大神道会と並ぶ二大宗教として世界を蹂躪しようとしている組織。

まあ表向きには『全知全能の神「ドグ」の御言葉によって世界を安寧に導く』ということらしいのだが、彼らは大神道会と違って神の名のもとに、と言って武力行使をもする連中である。

「……じゃあお前の兄は神殿協会なのか？」

「兄どころか家族全員が神殿協会ですよ」

サリドは忌々しそうに呟いた。

「……そうか。なんか済まないな」

リーフガットは何かを悟ってこれ以上聞くのを止めた。

刹那。

サリドたちが隠れていた瓦礫の山が爆発を起こした。

「サリド！！ 逃げろ！！ お前が爆乳上官と話しているうちに第三世代の通信機器は復活したようだぞ！！」

と瓦礫の山から外を眺めて、グラムは叫んだ。

「やべえ！！ つい話してたらこのザマだ！！ どうやってやつを倒そう！！」

「倒すよっか行動不能に陥らせたほうが早い気がするけどな！！」

サリドとグラムは走りながら、話す。

生憎、あの第三世代はプロタイプだったせいか速度が遅い。それがサリドたちにとっては運がよかったことなのだろう。

「……待てよ。行動不能……か」

サリドは何かを思い付いたのか、

「そうか……。グラム！！俺の言う場所を端末で調べてくれ！！」

そう言っただけでサリドはとある場所を言う。

「……お、おいっ！！そこはたしか……」

「いいから調べろ！！たしかこっから近いはずだ！！」

「……わかった」

そう言っただけでグラムは携帯端末に指を滑らしはじめた。

発電技術は少なからず向上しているとおもう。

昔は火力やら水力やら、あった。

一番パーセンテージを占めていたのは原子力。しかしこれは何度も問題がおき、暫く前に全廃となった。

今は、なんの力を使っているのか？

「たしか今は黄リンの非常に低い発火点を利用してタービンを回してるんだよね。圧力を操れば常温でも自然発火を起こしちゃうから」

「それでここにきたのか？」

サリドとグラムの二人は暗い廊下を走っていた。

「リーフガットさんは？」

「軍隊に命じているんな戦車やらを連れてきて対抗するらしい。まあ、それでも二時間が関の山かな」

「そうか。じゃあとりあえず俺らはさっさとあれとあれのある部屋を探さなくちゃ……。外の部隊が全滅してしまう前に」

「なあ、サリド？ いったいなにを探しているんだ？」

二人のいるここはレイザリー中央発電所。

レイザリー王国の全世帯の6割の電気を賄っているところだ。

「グラムさあ。話の流れからわかんないの？　僕が何を使おうとしているか」

「……まさか」

サリドの思惑を知って、グラムは口が塞がらなかった。

「そうさ。それを使ってあのヒュロルファームを破壊する。だから、君も少し手伝ってもらおうよ？」

そのころ、外では激戦が繰り広げられていた。

かたや世界最強の装備、ヒュロルフチーム第三世代。

かたやヒュロルフチームの製造によって発展を妨げられた時代遅れの武器。

勝ち目は、見た目の時点で一目瞭然だった。

「……これほどに、強いだなんて……!!」

『どうやら君は見ていたようだな？ 第三世代の凄さを』

「……どうして動力源を取り払っても動くことが……」

『「コード・ビースト」』

ヴァリヤーの言葉を聞いてリーフガットは身震いした。

『名前だけなら聞いたことはあるだろう？』

「……いえ、意味すらも知っております」

リーフガットは深く息をついて、

「『ヒュロルフチームの抑えつけられていた真の力を引き出す』コードでしたかしら？」

『そうだ。そのコードをつかえばおおそ無制限に力を使うことが出来る。しかしデメリットも存在するわけだな？』

「たしか、暴走をする　正確にはヒュルフターム個別の認識で動く……。だからノータの意志が通用しない」

『その筈だったのだよ。第二世代まではな』

ヴァリヤーが笑いながら、話を続ける。

『もしも、もしもだね。ノータがヒュルフタームに溶け込んでそれで深いところから操っているとしたら？』

「……！！それは我々人類にとっては禁忌のはず！！　どうしてそれができる！！　サルベージできなかつたらどうするつもりだ！！」

リーフガットは思わず第三世代に向かって叫んだ。

しかしヴァリヤーは声色を変えず、

『禁忌？　サルベージ？　そんなの関係ないだろう？　今私にとって必要なのは』

『「私にとって使えるか使えないか」だよ』

ヴァリヤーの言葉にリーフガットはうちひしがれていた。

「私は……、こんなやつの下に仕えていたのかっ……！！」

『……疲れたろう？ 君には結構重荷を背負わせていたからなあ』

「……なにを」

リーフガットがふと上を見るとリーフガットに向けて砲口が向けられていた。

恐らく、いや確実に、リーフガットを狙っている。

『君は今の今までがんばってくれたよ。私の計画の為にな。だから思っことなく死ぬ』

リーフガット目掛けてコイルガンが撃ち放たれる ！！

「……あれ？」

……はずだったのに、肝心の弾丸はリーフガットの体を貫いてもいないし、そもそも発射されたかも怪しかった。

『……なぜだ！？ なぜヒュロルフタームのコイルガンが効かない？！ この至近距離で撃てば避けられるはずがない！！』

ヴァリヤーが狼狽していると、

『なにやってんだくそ親父。こんなところでコイルガンを撃つとか何考えてるんだおまえアホなのか?』

発電所のメガホンごしに声が聞こえた。

『その声は……グラム!! 貴様いつたいなにをした?!』

『何をしたって? さあね。俺は何にもしてねーよ』

グラムは、乾いた笑いの後、

『ああ。発電機をフル稼働させてコイルガンの弾道を変えるほどの磁力を発生させたことだけかな?』

ガクン!! とヒュロルフタームの機体が揺れる。コイルガンに装填されている金属に反応している。このままだと動きに制限がかかり、簡単に動くことができない。

『…………』

ヴァリヤーは考えていた。

（まさか磁力を発生させるとは……。しかもコイルガンの弾道を変えるほど、だと? そんなの無理に決まってる）

しかし。ヴァリヤーは思わずそれだけを口に出した。

（結果的に今、それが為されてしまった!! このままだとまとも

にコイルガンを撃つことは難しいし、コントロールも不十分になつていく!! さて、どうしたものか……)

「マスター」

不意に、無機質な声が聞こえた。

「う……む」

ヴァリヤーはその無機質な声に曖昧に答えた。

声は、続く。

「マスター。このあと、どういたしましょう。出力をあと14・78%上げれば動力炉を傷つけることなく磁力にとらわれることなく動くことが出来ます」

「……そうか」

「稼働、させますっ」

少女の答えと同時に、コックピットが小刻みに揺れた。

ゴウン、と音が響き、揺れはさらに増す。

そのころ、外にいたサリドたち。

「……あのままだと、また復活しそудぞ?! サリド、どうする
!」

「まあ慌てるなって、グラム。わかってるよ、それくらいさ」

そう言つてサリドはグラムに何かを渡す。

「合図と同時にこれをやつに向かつて投げろ。その隙を狙つてコックピットに侵入する」

「サリド、おまえ何いつてんだ?! まじでそれをやるつもりか!
!」

グラムの問いにサリドは大きく頷く。

「頼めるのはおまえしかない。今から俺はあいつに向かう。それを確認して、五秒経ったら投げてくれ。わかったな?」

「……わかった」

グラムは頷いて、それを受け取る。

そして。

サリドは第三世代に向けて走り出した。

横から行くのでもなく、真正面から。

「?! あいつ、馬鹿か?! いくらなんでも真正面から行くだど?!」

グラムは双眼鏡から遠ざかっていくグラムを眺めて言った。

それは第三世代の中にいたヴァリヤーも考えていたわけで。

「マスター。正面からサリド・マイクロツェフと思しき人間が走ってきます」

「馬鹿な。この第三世代に素手で、しかも一人で挑もう、とでも? そんなのは無理に決まっている」

「では、どうしましょう」

「どうもこうもない。コイルガンでも撃って恐怖を植え付けるか」

「……了解しました」

ノータは僅かに躊躇った後、改めて操縦かんを強く握った。

そのときだった。

パン、と。

銃声にも似た破裂音が響いた。

「？」

それを聞いて思わずノータは操縦かんから手を離した。

「お、おい！ 何をしている！ さっさと彼奴に向かってコイルガンを……！！」

「無駄だよ」

冷たい、音がヴァリヤーの首筋に響いた。

ヴァリヤーはそれを聞き、狼狽えもせず、静かに尋ねる。

「……サリド・マイクロツェフか？」

その質問に対し、銃を持つ男はもう一度冷たい音を響かせ、言った。

「ああ。そうだ」

サリドたちがやった作戦は単純明解である。

まずサリドが真正面から敵に向かって砲になる（しかしあの二人もまさかサリドが真正面から行くとは思ってなかっただろうが）。

次にグラムたちから意識の離れる一瞬を使ってグラムが第三世代に向かって手榴弾を投げつける。

手榴弾による電磁波によって第三世代に取り付けられているセンサーが乱れている内にサリドが中に侵入しヴァリヤーを取り押さえる、といったもの。

……確かに、ここまでは作戦成功だった。

そう。“ここまでは”。

「さあ、どうする？」

サリドは未だに銃をヴァリヤーの首もとにあてて、言う。

「何がしたい？ 何が望みだ。サリド＝マイクロツェフ」

「これはこっちのセリフだ。ヴァリヤー」

「国のトップに近い人間を呼び捨てとはね？ 君も覚悟のうえか？」

「うるさい。黙れ」

そう言つて今度はヴァリヤーの頭に銃を置く。

ヴァリヤーは何をする素振りもなく、ただ両手を上にあげていた。

なにか手があるのか、と思つていたが手にはなにも握っているような感じもないので、その可能性は振り払つた。

「さあ、目的はなんだ？ あの子か？ それともヒュロルフターム第三世代か？」

サリドは尋ねると、彼は噎れた声でこつ言つた。

「私はヒュロルフタームという人類の作り出した欠陥のある人間が好きなわけでもないしほしいわけでもない」

続けて、

「だがそれが私たち委員会の目的に合致するものと見なされば、なんだって使つし、なんだってする。人からモノを奪つたり、その為に殺したり、な」

「委員会？」

サリドは怪訝そつに顔を歪め、

「ああ。何れ人類の要へとなる存在」

「『フォービデン・アップル』だ」

「……『隠された林檎』？」

「……辿り着けるかね？ 我々の求める真実まで？」

ヴァリヤーは笑っていた。

首に銃口を突き付けられ、いつ命を落としてもおかしくないのにも
だ。

「……『知恵の木の実』……」

サリドは思い出したように呟いた。

「……それさえわかれば我々の目的に大分近づいたと言えるな」

そう言つてヴァリヤーはサリドが気を緩めた一瞬の隙を狙つて、横
腹に拳をあてた。

「ぐ……あ……」

「君にここまで潜入させられた以上、計画の実行は難しい。私はこ
こで逃げさせてもらうよ」

「ま……て……。この子は……!!」

「ああ。私が消えて暫くしたら催眠がとけるだろうから。慌てず待
てば良いのじゃないのかな？」

気づくとヴァリヤーの背中には簡易のパラシュートがついていた。

「……………待て！」

サリドが言ったのも虚しく、ヴァリヤーは大きく扉を開け放ち、そこから飛んだ。

「『フォービデン・アップル』ねえ……」

第三世代を安全に停止させたのち、サリドはリーフガットとグラムに今までのことを話していた。

「なにかわかります？ リーフガットさん」

「たしかヒュルファーム・プロジェクトの管理団体がフォービデン・アップルという名前だったわ。でもあの団体は三年前に解散させられたと聞いたけど」

「もしかしたら、今回の一連はフォービデン・アップルが関係あるかもしれないんです」

「……だろうな。ヴァリヤーが国を裏切ったのではなく、フォービデン・アップルそのものが裏切った、ということなのか。いや、そもそもそれはなんなんだ？」

「たしか『知恵の木の実』と言ったあのとき、『それさえ解つていれば正解は近い』などと言われましたけど」

「それを早く言え馬鹿」

リーフガットは言葉よりも先に拳をサリドにぶつけていた。

リーフガットは一回咳払いをして、「……ともかく『知恵の木の実』。まためんどくさいものをヒントにしたわね」

忌々しそうに呟いた。

「そういえばノートはどうした？」

グラムは、話の話題を変えようと半ば必死に尋ねた。

「ここにいますけど？」

サリドは後ろを指差す。するとそこにはサリドの肩くらいの身長
の少女が恥ずかしそうに立っていた。服はノートが着るものだが、
それが原因なのだろうか。

「……名前は？」

リーフガットは笑いながら、丁寧に、最大限の優しさ（自称）で
尋ねた。

「……フランシスカ」

「フランシスカ」リガント「ヨシノ」

彼女は泣きそうな声ながらもはっきりと、自分自身の名前を言った。

そのころ。

ヴァリヤーは瓦礫の街を逃げていた。

最初は走っていたのだが、軍人とはいえ体は老人。体力も尽きて、ゆっくりと歩いていた。

「こんなことになるはずは……」

ヴァリヤーは息も絶え絶えながら、呟いた。

そんなときだった。

「逃げるのか？」

ふと、背中から声が聞こえた。

「……貴様、なぜここに」

「逃げるのか？」

それはヴァリヤーの言葉に聞く耳をもたず、ただ繰り返した。

ヴァリヤーは声の発生源があるとみられる後ろに振り向くことができなかった。しなかったのではない。できなかった、のだ。

「……ファイレイオか……。何のようだ？」

ヴァリヤーが振り向かない理由。

それは、熱。

背中から伝わってくる、熱でヴァリヤーはまるでサウナに入ってるような感覚に襲われる。

「……私をどうするつもりだ？」

何度も尋ねるヴァリヤーにフィレイオは答える。

とても、静かな口調で。

「なに、簡単なことですよ」

刹那、轟！！と空気を吸い込み、炎の渦が形成された。

無論、振り向かないヴァリヤーにはそれを解ることはできない。

「まさか……委員会が裏切ったとでも言うのか?! ヒュロルファーム・プロジェクトの創始者である私を?!」

「ああ、そうそう。忘れていました」

フィレイオは歌うように言葉を紡ぐ。

「ライジャックさんから一言、伝言です。『ご苦労さま』ってね」

そして、

炎の渦がヴァリヤーを包み込んだ。

そのころ。

会議室のような部屋で大きな丸テーブルを境として何人かが座っていた。

全員分埋まっているように見えた座席は不自然にひとつだけ空いていた。

「ヴァリヤーがやられたらしいな」

一番右端にいた男が言う。

「……やつは結構横暴でせっかちだったからな。仕方はないだろう」

別のところにいた別の人間が答える。

「しかし、ヒュルフタームプロジェクトに関わっていた人間を殺すとはだいぶ惜しい事をしたがね」

「なあに、仕方あるまい」

「計画の方が先だ」

ひとまず、サリドたちはこの事を報告すべく、国王や関係各位に連絡をつけた。

そしてヴァリヤー・リオールを全世界に手配することに決定した。

……もういない人間であるというのに。

ただ、そのことはサリドたちにはまったく解らないことであった。

ところは変わり。

「……まったく、一番“殺し”でめんどくさいのは“死体の処理”だよー」

フィレイオがずるずると何かを引っ張っている。

それは“見ようによつては”人に見える、なにか。

「さーつてと」

フィレイオは思いきり力を入れて、既に掘ってあったであろう穴にそれを放り投げた。

フィレイオはその穴に適当に土を放り捨て、どこか当てもなく歩いていた。

「……まったく最近はお組の人もお使いが荒いよ。僕ら『オリジン』をなんだと思ってるんだか」

「ええと？　次は何処だったわけ？」

フィレイオはポケットに入れてあった紙を開く。

「ふうん。南、か。まったく。次こそは面白い戦いになってほしいもんだよ……。ありゃ？」

フィレイオがポケットを探ると、封筒があった。

「こんなのあったかな？」

フィレイオは口笛を吹きながら、ほんとうに楽しそうな感じで、封筒を開いた。

その中に入っていたのは　写真。

「なに。次の指令はこいつら焼けばいいの？　……久々に面白くなりそうだねえ」

フィレイオは写真を見て恭しく笑っていた。

その写真は　サリドとグラムの写真だった。

そして、混乱も収まり、休暇も終わりを告げた。

「あー。なんだか、長いようで短い休みだったなー」と欠伸をしながらグラム。

「だって一週間のうち2日は戦闘。3日は清掃。残りの2日もリーフガットさんの始末書を書くのを手伝ってたからねえ。休みなんてないようなもんだったよ」となんかの雑誌を見ながらサリド。

「というか、サリド。おまえ、何読んでるんだ？」

「ああ。ヒュロルファームのミリタリー雑誌。オリハルコンとか人エプラチナとかの新素材を特集してるみたいだから一冊買ってみた」

「へえ。それいくらなんだよ…… 3万ムル?! なんでこんな100ページもない雑誌がこんな高いんだーっ!!」

グラムの怨念にも似た叫びを聞いて、サリド。

「ああ。なんだかね、これが付いているみたいだから」

そう言っただけでグラムに手渡したのは……サイコロほどの大きさの小さな立方体。

「……なんだこりゃ？」

「なんでも『クロムプラチナ』って言うらしいよ。硬度で最高を誇るプラチナと柔軟性に長けた炭素を組み合わせたとか。ヒュロルフタームの関節とかに使われてるんだと」

「……こんなもん販売しないと思うがな」

グラムは胡散臭そうにそれを眺めていた。

サリドたち二人がいた部屋に、リーフガットがノックもせずに入ってきたのは、それからしばらくしてだった。

ティータイムを優雅に迎えていた二人にとってはこれ以上の邪魔はないだろう。

しかし彼女は二人にとっては上官。命令は絶対服従なのだ。

「リーフガットさん……？ どうしましたか？」

サリドがまず声をかける。

「どうしたもこうしたもない。また戦争が始まるからあんたらを回収しにきたのよ」

「へえ。つぎはどこなんですか？ 個人的にはリフディラだけはちよっと……」

「どうして？」

「ほら。ちょっとリフディラって気候はいいから過ごしやすいんですけど、レジスタンスが活発に活動してるじゃないですか。これまでに泥沼な戦いはあまり……」

「そうかー。リフディラがいやなのかー」

リーフガットはわざとらしい口調で言った。

「残念だ。ホントに残念だ。リフディラは南半球だから夏だぞ？
楽しいバカンスになるかもなあ」

その後その二人が快諾したのは言うまでもない。

行間？

透明病、というのを知っているだろうか。

初めは風邪に似た症状を起こし、その後末端から体が透明になっていく。

そして、やがては完全に肉体が消失してしまうのだ。

原因は解っておらず、今も一千万人の人が苦しんでいるという。

対処法と言えばただひとつ。毒を吸い取ることに限る。

ただし毒を吸い取る、と言っても、機械を用いるのではない。

かつて、吸収と排出を自由に操る能力の人間がいた。それも遠い昔の為、伝承に過ぎないのだが。

その人間の子孫 正確にはそうといわれている人間は排出こそ出来ないがどんな物質でも吸収することができる。

ただし、その物質の保管は、能力者の体内、だ。

例外は、ない。

その能力者は『シスター』と呼ばれ、自分たちのことを『シスター部隊』と呼んでいる。

一度透明病に蝕まれた体は例え毒を抜ききっても正常な肉体となる

とはいえない。

即ち、そういうことなのだ。

さて。

あの二人はどう立ち向かう？

バカンスといえば。

海である。水着である。

しかし、こつも考えられないか？

「リフディラって南半球かー。しかも12月ってことはミニスカサ
ンタが拝めるのか？」

「まじかつ。それはなんとも素晴らしいぜっ」

トラックの中、サリド＝マイクロツェフとグラム＝リオールの二人
はそんな話をしていた。

彼らは今、トラックの中であつて、トラックの中でない空間にいる。
それはつまり。

「しかしまあ、こんな飛行機でトラックを何台も運ぶなんてなあ。
今回ばかりは金のかかつてることだ」

「グラム、相変わらず情報収集をしない人間だね？ 今、リフディ
ラになにが蔓延ってるか知ってる？」

「反乱軍だろう。それくらい解ってる」

「そうだ。反乱軍だ。しかし、そいつらが何をしているか、それは

解ってる？」

「……」

グラムは黙ったまま答えない。

「……ヒュロルフタームは、様々な金属から構成されている。また、それは、何れか一種類の金属が欠けたとき、ヒュロルフタームは完成しないことを意味している」

「なにを煙にまいたような発言してんだ。さっさと言ってくれ」

グラムは半ば苛つきながら、言った。

「だからな……僕らが今から行くのはヒュロルフタームの材料となる金属の鉱山に行くんだよ？ あれをあのままにしちゃ、反乱軍の収入源になってしまうからね」

「なるほどな。即ち俺らはそれを反乱軍から取り上げるために向かう、と言うことだな」

「取り上げる、よりかは取り返す、に近いかもね。今行くところはリフディラ独立以前はうちの領土だったらしいし」

サリドは端末を指で弄りながら言う。

「……というか、暑くなってきたな……。これが今のリフディラか……」

グラムが腕を捲りながら言う。

「じゃ、涼みに行けば？ 今なら飛行機の冷凍室が開いてるよ。ただし氷点下70度だけど」

「……サリド。つまりそれは俺を凍死させる、という意味か？」

リフディラ民主主義共和国。

15年前、レイザリーから独立した新興国である。

レイザリーの国土の半分にも満たない小さい国であるものの、資本主義国としてヒュロルフタームも保有している立派な国家である。

しかしながら、現在、社会主義を追求する反乱軍からの攻撃を受け、政治は不安定である。言うならばやじろべえのようなものか。

「そのやじろべえが完全に崩れるのを防ぐのが今回の我々の仕事だ」
ブリーフィングで、まるで大学の講堂のような広い部屋で、マイクを持って話すのはリーフガット・エンパイアーだった。

「まず鉦山にクーチェをセットする。相手はこの前のような巨大生物兵器を保持している可能性が高いとみている。みんな、心してかかるよーに」

挨拶とも叫びともとれる声を兵士たちは発して、一礼し、どんどん去っていく。

「おいおい。いくらなんでも早すぎやしないか？」

「何言ってるんだ。グラム。侵攻は深夜だよ。みんなは今から床につくの」

「……寝るのかよ!! とうかこの雰囲気の中寝るとかある意味
猛者だな!!」

「何言ってるんだ? 一番先に眠る君が言うセリフじゃないだろ?」

グラムの驚きとは裏腹にサリドは少し馬鹿にするように笑っていた。

そして、辺りが宵闇に包まれた頃。

「……眠い。サリド、コーヒーくれ」

「そんなものないよ」

「それじゃ、お前が今手に持つてるいかにも暖かそうな湯気を出したカップに入った黒い液体はなんだ?」

「これはリーフガットさんの。さっき、持ってこいって命令されたんだ」

サリドは退屈そうに言った。

「……!! サリドいつの間にそんな関係を作り出してたんだ?!」

「すごく意味が違う風にも捉えられるからやめてくれないかな」

大きな欠伸をしながら、サリドは言った。

少しして、リーフガット・エンパイアー率いる部隊はブリーフィングどおりの配置となった。

と、言っても何をするかは単純明解。

鉦山を壊さないようにクーチェを出し、反乱軍を殲滅する。それだけのこと。

「あれだな。いくらなんでも今度こそは暇だな。だってまわりにいっぱい仲間がいるんだぜ」

とグラム。

「そうだな。俺だつてもととはヒュルフタームの設計士を目指す為にきた学生だぜ？　なんで誰もやらないようなことをやるようになったんだろうなあ？」

とサリド。

彼らは今いったいどこにいるのか、と言えば。

「……にしても暑いなー。なんでこんな暑いところにいなきやいないんだ？」

「命令だから仕方ないだろ。ともかく俺らはここで待機して仲間を待つんだよ」

サリドとグラムはまるでテンプレート通りの南国にいた。

ヤシの木に、青い海、白い砂浜。

そしてそこに不釣りあいな白いコンクリートの建物と迷彩服を着て
アサルトライフルを持った男が二人。

「……ああ。泳ぎたい」

「暑いもんな。泳ぎたい気持ちは俺にだってわかるさ」

「それを言いたいのは私なのだがなあ」

サリドとグラムの会話に横入りしてきたのは彼らの上司、リーフガ
ットだった。

彼女は今、普通の青い軍服にを着ているが、やはり彼女も暑いのか、
持っていた書類を団扇代わりにして扇いでいた。

「ああ、暑い。ほんとうに暑い」

うざったそうな口調で彼女は言った。

「でも一番暑いのは姫様でしょうね」

「そう思うでしょう？ でも実はヒュロルファームのコックピット
は熱が隠らないようにしてあるし、温度を自動調節しているのよ。
ノータがかく汗がノータ自身の不安要素になるらしいからね」

「なるほど。たしかに部隊の要であるヒュロルファームのノートには最大限の配慮が必要ですね」

「とりあえずさっさと終わらせるぞ……。今回は反乱軍殲滅と同時に暫定自治の部隊引き継ぎもあるから10日程滞在せねばならないんだ」

「リーフガットさん。初耳ですよ、それ」

サリドがため息を、ただしリーフガットやグラムには聞こえないほど小さなものだが、つきながら言った。

さて。リーフガットとサリドとグラムが会話をしているとき、問題の戦場はどうなっていたかといえば。

「……そんな馬鹿な」

拡声器から、声が響く。ヒュロルフターム・クーチエに乗るノータによるものだ。

彼女は今、部隊の大半とともに反乱軍が支配する鉾山にやってきた。

そこまで無傷でいけたことがまず奇跡だが、よくよく思うと本拠地にも人がいないのでは話にならなかった。

「……いったい、どういうこと？」

と、姫様は少し咳き込みながら言った。その際兵士の一人が心配して声をかけたが、姫様は「大丈夫」とだけ言って、その場から撤退した。

結論から言おう。

基地に戻ってすぐ、姫様が倒れた。

熱をはかると普通の風邪程度ではあるものの、十分に休息をとらせることとなった。

「……疲労かしらねえ。ここ数ヶ月忙しかったし」

リーフガットは、一応予防の為にマスクを着用しているが、姫様の額に冷たいタオルをのせながら、言った。

氷水を持って廊下を歩くのはサリド＝マイクロツェフだった。

「絶対この氷水多いよな……。普通なら水枕にしてくれよ……」

と愚痴を溢しているが、先程それは修理工のばあさんにも言ったらナットが飛んできたのでリーフガットの前で言うのはあまり好ましくない。

さて、グラム＝リオールは何をしているかと言えば。

……全員の服の洗濯である。

「……ったく、なんで俺ばかりこんな不幸な仕事ばかり押し付けられなきゃいけないんだ？」

グラムはそう言いながらも手際よく10台以上ある巨大洗濯機のスイッチを押した。

こういうところの機材というのは音があまり出ない、静かなものとなっている。理由は単純明解で、その音によって、敵に居場所を知

られてしまつのを防ぐためだ。

「あー、暇だな……」

と言ってグラムは近くにあつた雑誌に手を取る。

それはサリドが朝読んでいた雑誌でグラムも横目で観ていたのだが、まあ、暇潰しにはどうってことはない。

その雑誌はミリタリー雑誌 ではなく、世界の様々なニュースを取り扱った雑誌だ。ニュースペーパーの廉価版とも言つべきだろうか。

グラムは適当に飛ばし飛ばしで読んでいた。

その雑誌に書かれているのは嘘であり真である。もともとは小さなニュースだったのが記事によって誇大化される というのもよくあるケースだ。

だがしかし。

グラムはひとつの記事に目を向けた。

それは透明病についての危険を喚起したものだつた。

そこに書かれていたのは透明病が初め風邪のような症状で、後に高熱を伴うことが書かれていた。

「あれ……？ これってまさか……？」

グラムは一つの可能性を提示した。

そう。透明病というのは、

今の姫様が患っている症状そのものだったからだ。

リーフガットは医者を呼んでいた。医者といっても部隊に備え付けの軍医だが。

「ふむ……」

医者は聴診器をあて、怪訝な表情を示した。

「どうですか？」

リーフガットが心配そうな目で見詰めていた。

「芳しくありませんね。薬を投与しても治らないならば風邪ではないのかも……」

「風邪でなければ……」

「透明病」

医者はしばらくして、呟くように言った。

「……透明病、ですか？」

「聞いたことがないようですね。たしかにレイザリーでは縁も所縁もない病名でありましょうからな」

「その……透明病、とはなんですか？」

リーフガットが医者に丁寧尋ねる。

「簡単だ。早い話が消えてなくなってしまうのだよ」

医者は何の躊躇もなく話した。

「消えて……なくなる」

「ああ。そうだ。この症状の進み方から行けば……1ヶ月くらいでそうなってしまうんじゃないのかね」

「助ける方法はないのか。あなたは医者なのだろう？」

「と言われてもねえ。僕は神でもないから。確かに僕は何千人もの人を救ってきた。だから『生と死の番人』とも喚ばれるが、さすがに今回ばかりは……いや、」

話が不意に途切れた事に思わずリーフガットは目を合わせる。

「そういえば、まだいましたね。透明病の毒を吸い取り、ある程度の条件つきだが、治してくれるところが」

「どこですか?!」

そして、医者は呟く。

「……シスター部隊」

と。

「シスター部隊……」

「ええ。そこならば姫様を助けられる筈です」

医者はすっかり髪がなくなった頭を撫でながら言った。

「……さて。ならばシスター部隊はどこにいる？」

「今は全国を回っている筈ですからリフディラの何処かにいるかと」

「阿呆。リフディラと言っても単純計算でレイザリーの半分はあるんだからね……。そこを風漬しに探すといっても1ヶ月で済むかどうか」

「大丈夫です。大体場所は把握しています」

医者はまるで直射日光の太陽のように爽やかに笑う。

そして、医者は静かな口調で言った。

「ここから北へ60km離れた首都ウェイロック……。そこにシスター部隊は駐留しています」

「なるほど。……しかし軍医」

「なんでございましょう？」

「なぜそれを知っている？」

「私とて昔はシスター部隊に関わりのある医者だったのですよ。その際仲のいいシスターから聞かされてね」

なるほど、とリーフガットは呟いた。

「にしても……。誰に姫様の警備を頼むか……」

とリーフガットが虚空に目をやった。

そのときだった。

ドアのノックが部屋に響いた。

そして。

「どうやら来たみたいですね」

笑って、言った。

「失礼します。氷水持ってきました」

一人目はサリド「マイクロツェフ。さっき彼が言った通り、氷水をここに持ってきたのだ。」

「失礼します。ちょっと用があつて」

丁寧な口調になれていないのか、少しイントネーションがおかしい二人目はグラム「リオールだった。」

「サリド。グラム。ここで待て。すこし話すことがある」

リーフガットの平坦な口調に思わずサリドとグラムは肩を震わせた。

「……なんですか」

サリドがようやく口を開いてリーフガットに尋ねる。

「……まさかまたあの生物兵器を俺らだけで片づけるとか言つんじゃないですよ?」

グラムがサリドの発言に付け足したように言った。

「違う違う。もっと重要な任務よ」

「?」

「リフディラの首都ウェイロックに行つて、姫様の診断が出来るシスター部隊を探しに行くのよ。出来るだろう?」

「首都へ……！！ 姫様に何が？ ただの風邪じゃないんですか？」

「まあ、ただの風邪ではないことは言っておこう」

サリドの問いにやんわりとリーフガットは答える。

「……透明病、じゃないですか」

「……グラム。お前それを何故」

「……サリドが持ってたミリタリー雑誌に書いてあっただけです」

グラムの話を聞いてリーフガットは思考する。

「とりあえず」

口を開いたのはリーフガットではなくサリドだった。

「姫様を助けるために医者が必要なんですよね？」

「あ、ああ。そういうことだ」

「行きます」

サリドはあっという間に即決した。

「サリドおまえ……。少し考えるとかしねーのかよ！ 普通なら態々敵のスパイがいるであろう国を回ろうなんて思わねーよ！！」

「じゃあグラムはほっとくんだね？ 姫様を」

サリドの問いにグラムは言葉を失った。

答えられる言葉が、彼には浮かばなかった。

そして浮かんだ彼なりの言葉は至極ベクトルを変えたものになった。

「……それって好き嫌いの感情抜きなのか？」

「うつらないとは限らない。危険と隣り合わせよ。透明病になるのは確実。それでも？」

「リーフガットさん。任務を断る理由なんて僕らにはないですよ」

サリドは笑って答える。

ということだ。

サリドとグラム、そして姫様を対象とした臨時のブリーフィングが開かれた。

姫様は他の人間のことも考慮して閉鎖空間にひとりぼっちでテレビ電話というシステムで行われることとなった。

それを見てサリドは少し悲しくなったが、そんな気休めばかりの言葉をかけても意味はないと、思った。

「とりあえず首都ウェイロック迄の計画を言うわね」

リーフガットが目の前机に大きく地図を広げた。

「ウェイロックはここから西方70km。そう遠くはないわ。軍用車を貸すからたぶん三日とかからずに着く筈よ」

「問題はそれから、ですね」

サリドの言葉にリーフガットはしおらしげにうなずく。

「シスター部隊は何処かの宿屋に停留しているらしいわ。白地に赤の十字架の旗がかけられているはずだから、それを目印に」

「それじゃあ、オーケー？」

リーフガットの言葉に三人ははつきりと頷いた。

「それじゃあ、行こうか」

次の日、サリドとグラムは軍用車に乗り込んでいた。

後ろの座席は取り外されてベッドが置かれている。そこに寝かされているのは姫様だ。今日は調子がいいのか上半身を上げ、ぼんやりと外を眺めていた。

「大丈夫かい？ 姫様」

助手席に座っていたサリドが後ろを向いて言う。一応いつてはあくが運転するのはグラムだ。

「……大丈夫。今日は気分がいい」

「無茶しちや駄目だよ。寝れるときに寝ておいてね」

「……分かった」

サリドは微笑みながら、後ろのとびらを閉めた。

「サリド、ほんとにこの道であつてるんだよね？」

グラムはサリドが姫様と会話を終えるのを見計らって言った。

「ん？ 合つてると思うけど……？ ちょっと待って。地図見てみ

る」

そう言つてサリドは助手席の前にある収納スペースから少し埃がついている古い軍用の地図を取り出した。

「えーと……今はLS76だね。このまま行けばウェイロック首都自治区に入るからあとは道なりに行けば」

「りょーかいっ」

そう言つてグラムはアクセルを踏み込んだ。

「にしても、辺鄙な土地だよなあ。誰も彼もやる気がないみたいだ」

「みた感じ雨があまり降らない土地みたいだし農業を諦めてるんじゃないかな？ 土地も随分栄養がなくて痩せ細ってるしね」

サリドはまたも雑誌を読みながら言った。

「サリド。お前はほんとに雑誌を読むのが好きだな……。ってか今は何の本なんだ？」

「ん？ えーと確か……『ラミアアの電気学が丸ごとわかるガイドブック』だけど」

「なんじゃそりゃ」

2時間後。

日が傾いてきたところによりやく三人を載せたトラックは首都ウェイロックに到着した。

ウェイロックはもともと城塞が建築され、それを中心として広がった、言わば城下町である。

堅牢な建物の間を、蜘蛛の糸のように張り巡らされている石畳の道を軍用のトラックが走っているのだ。

一応、レイザリーとリフディラは同盟関係にあるためこういうことはしても構わないのだが、やはりなんだかそういうのは緊張してしまふものなのである。

「何処だろうな。宿屋は……」

トラックに乗りながら、サリドとグラムは慎重にリーフガットから言われたマークの旗が掲げられた宿屋を探す。

「彼処じゃない？ ほら『グラン・モーレ』って書いてあるところ」

サリドが唐突に言ったので、グラムもその方を見た。

すると確かにその通り、白地に赤の十字架のマーク……シスター部隊のマークの旗が掲げられていた。

「彼処か」

そう呟いてグラムは宿屋グラン・モーレの傍に車を停めた。

「失礼する」

グラムはグランモーレの扉を開けた。

中は質素ながらも埃一つない綺麗さだった。なるほど、シスター部隊が駐留する宿屋らしいかもしれない。

カウンタに座る無精髭を顎に生やした男にサリドは話しかけた。

「ちょっと聞きたいんだけど」

「ん？」新聞を読んでいた男はサリドの言葉に怪訝な表情を見せて言った。

「ここにシスター部隊がいると聞いたんだが」

その言葉を言った瞬間、男の眉がぴくりと痙攣したかのように動いた。

「……あんたら余所者だろ？ しかも服装からしてレイザリーだな？」

サリドは頷く。

「だめだ。諦めな。シスター部隊は今は結構忙しいらしいからな」

そう言つてまた男は新聞を読み始めた。

「どうしたんですか？」

サリドたちが諦めて帰ろうとしたそのとき、奥の方から声が響いた。それはとても透き通つた声で、声を聞いた者を優しく包み込むような……そんな声だった。

「シスター・ビースタ。何故この時間にここへ？」

宿屋の店主は先程とはうってかわつて、緩めた口角をこれでもかというほど高くあげ、優しい声で言つた。先程の峻厳そうな近寄りがたい雰囲気を放つていた店主は何処へやら。

そしてシスター・ビースタと呼ばれた方は白いローブを着ていた。頭に被る帽子の部分は今は後ろの方に置いてあり鮮やかな黄色の髪を見せている。彼女はまるで羽と輪つかさえあれば天使のようにも見えてしまう存在だった。

「薬草を調査していたのですよ。ところで……そちらは？」

シスター・ビースタが困惑の表情を示しその視線をサリドに送つた。

「ああ。こちらは……」

今度は店主が困惑の表情を示した。

サリドはここぞとばかりにまくし立てるように言つた。

「透明病の患者がいます」

空気が凍りついた。

誰も何も言わない状況。

「……おや。それは不味いですね？」

シスター・ビスタは先程の困惑の表情のまま首を傾げた。しかし、その眼は獲物を狙う蛇のように鈍く光っていた。

「とりあえず二階に運んで下さい。店主。奥の昇降機を借ります」

そう言つてシスター・ビスタは素早く階段を登った。三人の返答を得ないまま。

とりあえず、シスター・ピアスタの言う通りにすることとした。

車に寝かせていた彼女を下ろし、二人がかりで奥にある昇降機に持っていくた。

この世界で昇降機は珍しくない。油圧式の昇降機は現在、殆どの国の主要都市に使われているからだ。まあ普通に考えれば何十メートル級の人型戦闘兵器があるのだからそれくらいの技術があってもおかしくはないだろう。

「にしても、こんな一宿屋にねえ。儲けてるんだなあ」

グラムが呟くとグランモーレの店主は恭しく笑った。

驚くべきことに、この宿屋グランモーレはシスター部隊の貸し切りだという。五階建てらしいのだが、その五階までがシスター部隊の場所として埋まっているのだという。

そして……ここは三階。ベッドが大量に置かれていて簡易の診療所となっていた。

シスター・ピアスタは三階に着いてから席を外すので少し待つように命じ、昇降機を用いて上に向かっていった。

……三人は残された部屋でただ俯いていた。

「……大丈夫なのかな」

サリドが唐突に呟いた。

「え？」

「たしか透明病って永遠に治らないものなんだろう？　このまま治らないで死んじまったら……」

「ばかやろう」

グラムから今まで押さえ込んでいた苛立ちが零れた。

彼はたぶん何を考えていたのかわからなかっただろう。彼は言葉より先に体が動いていた。

サリドの右頬に衝撃が走り、サリドは少し後ずさった。

「な、なにするんだっ」

サリドが叩かれた右頬を抑えながら、言った。

「……サリド。おまえ、何言ってるんだ？　姫様も、勿論俺も、あのシスターさんだって諦めちゃいねえのにお前だけ諦める、ってのか？　そんなの理不尽だろ？！　負けずに必死に頑張ってる姫様は諦めてねえんだ！！　お前はそれが解ってるのか？！」

グラムは早口でまくし立て、さらに、

「サリド。俺達が諦めちゃだめなんだよ。最後の綱なんだよ。だからお前も諦めるな。俺も諦めないから。な？」

グラムの言葉にサリドは最初は何も反応出来なかったが、その後に頷いた。

「……あのー、少年漫画のような熱血喧嘩展開は外でやって頂けると助かるんですが……」

不意に声がしてグラムとサリドはその声がした方を向くと、

どうしたらいいのが解らずに慌てている、何か大量の物をもったシスター・ピアスタの姿があった。

「はあ、それですか。確かにこういうのは初めはとっても心配しますものね」

「申し訳ない」

グラムは何故か顔を紅潮させて、謝っていた。

風邪でもひいたのか、とサリドは聞こうとしたが野暮だったので止めておいた。

「……とりあえずありったけの治療薬を探してきました。といっても」

シスター・ビアスタは俯きながら姫様の方を見て、言った。

「私だけでは完治させるのは難しいでしょう。だから、ひとつ。あなたたちに頼みがあります」

「頼み？」

「はい。あなたたちはこれから北のヌージャックという場所に行つてシスター部隊のリーダー、『エンゼルハンド』に会つてここに連れてきて下さい」

そのころ。リーフガットたちがいる基地では掃除諸々を行っていた。なんとなく兵士の覇気がないように見えるのは敵のアジトまでようやく辿り着いたら実はもぬけの殻だった、ということが響いているからだろう。

「ほら、シャキツとするー。でないと暫定休暇の日数が減るよー」

パイプ椅子に腰かけて書類の束を団扇代わりに使っているのはリーフガット・エンパイアーだ。彼女もまた、今回の作戦のあまりにも呆気ない結果に少なからず落胆していた。

リーフガットは自分の部屋の書類の整頓を行っていた。といってもそこまですではなく、例えば書類の束で机や床その他諸々が覆われているとか、精々軽い掃除くらいだった。

斯くして今はテレビを見ながらアフタヌーンティーを飲んで一段落ついているところであつた。

「夏とはいえこの辺は寒いな……」

そう呟きながらリーフガットはアフタヌーンティーを一口、口に含む。

テレビではちょうど祭りのシーズンからかその宣伝しかやっていなかった。といっても今は、仮にそれを見ているのが資本四国の人間としても、うざったく感じることだろう。

何故ならば今はレイザリーの首都にて行われている慰霊祭の放送をしているからだ。たぶん世界のどこを見ても故人を偲ぶ時に世界トライアスロンの宣伝なぞするとは思えない。

しかしながらレイザリー王国は資本主義国の最大権力を持つ国であり資本四国でも中心代表国を担う重要な国であり、それを仮に行っても誰も注意しない。だからレイザリーでは資本と人心倫理の欠如が見られ、それが社会問題にまで発展してしまっているのだ。

話を戻すと、『慰霊祭』とは10年前に発生したとある事故で亡くなった人間を慰霊するためのものである。

その事故は未だ多くの謎が解明されておらず遺族と国との間で亀裂が走っている。

その事故とは、ヒュロルフタームの“暴走”。

現在使われているヒュロルフタームのナンバリングは初号機からとなつてはいるが、その大本となる零号機が存在していた。

その名はズリ。

ヒュロルフターム・プロジェクトが母体となつて試作品エヴァードを作り上げ、それを基にしてズリが誕生した。その後次いでクーチエが完成するのだが……。

その間に起きた事故である。先程にも言つた通りに多くの謎が解明されておらず、また、それを原因として反ヒュロルフターム派が生まれたことも事実であつた。

「そうか……。もうあれから10年か……。時代も変わったものだな」

リーフガットはそう言って、またアフタヌーンティーを口に含んだ。

サリドとグラムはグランモーレの一階にある小綺麗なカフェテリアにいた。

カフェテリアは宿屋グランモーレの下請けで経営しているらしく、シスターが作戦会議をするなら、とそこを教えてもらったのだった。

「さて……ヌージャックか。大分距離があるな」

グラムはインスタントのコーヒーを旨そうに啜った。

「そこに行くには街道を使えば行けるかな。2日もすればいけると思う」

サリドは携帯端末の画面に出てくる色々な情報を指で滑らせていった。

「……これは結構厳しいな……。姫様の症状が何時まで持つか、あのシスターも解らないって言うてたし……。簡単に済めばいいんだけどな」

グラムは先程頼んだフィッシュ&チップスを一欠片手に取り、それをサワークリームのソースにつけて口に放り込んだ。味は先ず先ずだが腹に入ればどうってことないし第一あの戦場で味わった軍用レーション消しゴム風味に比べればこの料理は世界三大珍味に等しいものを二人は感じていたのであった。

「……それじゃあ向かうか」

グラムは皿を適当に一ヶ所に集め、席を外した。

サリドも頷いて席を立った。

二人はここまで来るのに乗ったトラックに乗ることにしておいた。シスター・ビースタが最新鋭の乗用車を用意してくれたものの、二人は今まで乗っていた車の方がいい、とそれを丁重に断った。

二人は今長い長い砂漠の上を走っている。太陽がまるでオーブンのように熱線を容赦なく二人に押し当てていた。

「畜生……。こりや熱いな……。まさかこんな砂漠があるなんて」
グラムは悔しがったのかアクセルを強く踏み込み、車のエンジンが轟音を上げた。

「まあそう言わずに。これ使う？」

サリドは涼しそうな笑顔でグラムに何かを渡した。

それは、透明な薄い膜だった。正確に言えばその膜はさわると少し冷たくて、柔らかかった。例えるならば、ゼリーのような感触で。

「さっきシスターにもらったんだ。熱中症予防のフィルムで、所謂メンソール系の薬効成分を寒天に溶かし込ませたものなんだって。軍用のサプリメントと言って訳の解らない工業製品使うよりこっちの方がいいから、と。ま、よく言うオーガニックってやつ？」

「……それは意味が少し違わないか？」

グラムはそう言いながらサリドから貰った膜を額に付けた。

その頃。

リーフガットは漸く片付け等から解放され、久々の睡眠を取っていた。

もはや戦いはないだろうという判断の上でのことだが、警備のため数名の人間は起こしてはいるものの。

夜も更け、生きとし生ける物全てが寝静まった頃のことだった。

虚空に乾いた銃声が響いた。

リーフガットはそれに気づき急いで立ち上がり、外に出た。

廊下を駆け足で歩くと、慌てた顔で部下と思しき軍人が出てきた。

「上官！ お目覚めですか！」

「御託はいい！！ いったいどうしたんだ？！」

「西南の方角から発砲！ ライフルと思われます！ 数はおよそ10〇20！」

その軍人は端的に敵の情報を告げる。

「ここにいる全員を叩き起こせ！ ライフル班と光学兵器班を攻撃に回せ！」

リーフガットの命令に、軍人は即座に敬礼をした。

リーフガットはその軍人に命令をしてから自分の部屋には戻らずその廊下の突き当たりにある部屋へと向かった。

扉を開けるとすでに命令がされていたかのように、机にここ周辺の地図が置かれていたり必要となるリーダー等が駆動していた。

「ご苦労。ライズウェルト・ホークキャノン準尉」

リーフガットは部屋に入るや否や直ぐに傍の計器を見つめている女性に謝罪の意を表する。

「別に問題ないですよ。リーフガットさん」

「……私を本名で呼ぶのは家族以外にあの問題児どもとあんなだけだ」

リーフガットはため息をついて忌々しげに呟く。

しかし、当の本人、ライズウェルトは曇りない笑顔で、

「あんた何してんの？ 指揮官なんだから指揮しなさいよ」

「あ、ああ……」

こうというのが昔から嫌いだったが、今の関係を維持出来ているのはリーフガットの堅実かつ峻厳な性格とライズウェルトの温厚な性格に衝突がなかったとも言えるのだらう。彼女が果たして温厚と呼

べるのか、そうには思えないが一番そう形容すべきとリーフガットが判断を降したためであつたりするのだが。

「……状況は？」

「芳しくないね。西南に17の生体反応。その何れもがグラディア軍の通信機のチャンネルに設定してある」

「……軍の、リフディラ軍の、クーデター？」

「そうは考えられない。第一、もしクーデターならばもっとたくさん的人员と武器がきてるはず。なのに彼らは少数で行動してるし武器はライフル一択みたいだし。たぶんレジスタンスによるものが正しいかな」

「やつとお出ましってわけね」

リーフガットは、怪しげに笑った。

「さあ……。レジスタンスとやらの実力、見せてもらおうじゃないの」

リーフガットは笑みを崩さずに管制レーダーを見て呟いた。

それを見たライズウェルトはほくそ笑んで、レーダーに視線を注ぎ、

「久しぶりに見たわね。あなたのそんな熱い顔」

リーフガットにぼつりと、聞こえるか聞こえないか微妙なくらい小さな声で呟いた。

リーフガット・エンパイアーとライズウェルト・ホークキャノンは幼馴染みかつ親友かつ良きライバルであった。

四年前の世界トリアスロンにリーフガットが参加した時もライズウェルトが本人の希望によって健康管理士に任命されたほどだった。

リーフガットとライズウェルトが出会ったのは6歳のこと。代々軍人であったエンパイアー家と代々医者であったホークキャノン家が出会ったのは多少なりとも無理があつたがそれでもこの友好関係が在るのはお互いの父親が良き友人で理解者であつた、ということだろうか。

リーフガットの父が、彼女が11歳のときにカムスチャル王国で死んだという時もライズウェルトの父は彼女と同じように悲しんだ。

その後はホークキャノン家の援助を受けつつリーフガットは生きていった。彼女の父は何かあつたら、とホークキャノン家に援助の約束を取り付けていたのだった。

そしてリーフガットは父親の後を追つて軍人となり、ライズウェルトはもとから学んでいた通信関係の仕事を生かし彼女もまた軍人となった。

そしてまるで大きな外の意志が働いていたかのようにリーフガットとライズウェルトは同じ部隊に置かれることとなった。

リーフガットは父親の功績や彼女自身の功績も含めて所謂エリート

であつたので官位をぐんぐんと上げていった。

それに対しライズウェルトはもとも仕事は好きなようだが昇進に
関してはそこまで興味を持っていないらしく、軍に入つた当時の準
尉という位を保ち続けているのだつた。

「ちょっと、ライズ、聞いてる？」

リーフガットの声に、ライズウェルトははっと我に返った。

「どうした？ 眠いなら他の人間に頼むが……」

「いや、大丈夫。心配させてごめんなさい」

そう言っただけライズウェルトは気を取り直し、再びレーダーを見据えた。

そして、そのときだった。

レーダーに突如ノイズが走り、その正確な情報を映し出さなくなったのだ。そのノイズは徐々にひどくなっていき、最終的にはその映像を映すようになった。

それを見てリーフガットは目を疑った。

そして、

「何してるの！！ いったいなにが？！」

ライズウェルトに叩きつけるように叫んだ。

「その原因が解いたら苦労しない！」

そうライズウェルトは叫んで即座にパソコンを用いて修正を試みる。大体外からダメージを受けていないとすれば、その正体はプログラムのハッキングによるものだろう。

通信機器を取り扱っている人間は二種類の技能を学ぶ必要がある。

ひとつはレーダーから読み取り、その結果を正確に反映する技能。

もうひとつは外部からの攻撃に際しそれを出来るだけ最小限の被害で食い止め、あわよくば敵側に逆に攻撃を仕掛けることに関しての技能だ。

前者はアウトプットされた電磁波等の見えないデータが可視化され、それを読み取る。一方後者はインプットしたプログラムコードの、即ち見えるデータが0と1に不可視化されそれを攻撃に用いる。即ち通信士とは『見えない世界』のセクションを務める存在であるのだ。

「出たわ!! 発信源はunknown……。探知不能?!」

それを聴いたリーフガットも思わず顔を強張らせた。例えそういう道に精通していなくとも、その言葉の意味は理解出来る。

つまり“ハッキングした人間が見つからない”のだ。その人間は、もしいるとするならば、パソコンや携帯端末を経由せずにそのセクションを成し遂げたことと同じ意味を持つ。

「……たぶんそんなことはあり得ない。妨害電波を出しているに決

まっ
てる」

ライズウェルトはまるでリーフガットの心を読んだかのように呟いた。

レイザリー軍の基地を見下ろせる高台に小さな建物が建っていた。

そこはかつてはリフディラ軍の軍事施設として使われ、表向きは軍人の体力増強の為の研究を行う施設であった。

しかしそれが倫理的に違反してるという『大神道会』の判断に基づき焼き払われた。

今はそこにはいつ崩れてもおかしくないような建物の残骸が建っているだけであった。

そんな建物に一人の男がやってきた。

男の名はレイデン・ミーシエルハイト。傭兵だったのか体のところどころには傷があり、中でも左目を塞ぐように縫いつけられた傷は彼の回りに誰も近付かせないような、そんな何かが感じられた。

レイデンは地下に降り、その奥に在る扉まで用心深く近づき、ある一定のリズムで扉を叩いた。

扉の中は外観とは見違えるように綺麗で、雑然としていた。部屋は狭く、二人か三人入ったらもう詰まってしまうような感じであった。

何故かといえば。

レイデンが部屋に入ると部屋の中には誰もいなかった。その代わりに部屋の半分以上を占拠する“それ”はいた。

それは旧型のコンピュータらしかった。

らしかったとはどういうことかと言えば単純に解らないのである。これがいつ作られたかも解らない、誰が？ 何のために？ それすらも解らない。全てがブラックボックスに包まれた、そんなものなのだ。

名前はアリスというらしい。なぜアリスと解ったかと云えばコンピュータの外装に金属製のプレートが張り付けられており、そこに『Alice』と書かれていたからだ。

科学者の中にはこれを旧時代の物と唱える人間もいる。

旧時代といってもそもそもそれがあるかどうかも証明されていないのだが、時代区分的には今いる世界は遥か昔に一度滅びたという。その“滅びた時代”を旧時代といい、今“復活してここにある時代”を新時代と呼ぶことにしているらしい。

今、それは目の前にある小さな画面に白で書かれた文字の羅列を長々と映し出していた。レイデンはそちらのほうは疎いのでよく解らないが仲間が言うにはこれはプログラムというものでこのコンピュータは仲間が指示した通りに動いている、とのことらしい。

昔からレイデンはそういうのに疎く、自分もまたそれを改善しようとしなかったために今の今までこれを使えずにいるままだった、というのもある。

彼の任務はこのコンピュータを守ることと仮にこれが陥落したら錯綜していた情報が元に戻りレイザリー軍は総力を挙げ攻め込んでく

るだろう。なんとしてもそれは避けたい。

つまりは命綱をこのコンピュータが握っていて、このコンピュータが何らかの影響で異変を起こしただけでもゲームオーバーなのだ。

レイデンはとりあえず部屋の中にあるガスコンロを用いてお湯を沸かした。余談ではあるがこの時期のリフディラはとても寒く、夏と違った割には氷点下になることもあるのだ。

況してやここは地下。地上より寒いというのは一目瞭然である。

お湯が沸き上がり、少し薄汚れた銀のカップにお湯を注ぐ。少し猫舌なレイデンは息を吹き掛けながらそのお湯を飲み始める。

そんな平和な一時を破壊するかのようにけたたましいサイレンが鳴り響いたのはレイデンがカップに入ったお湯を丁度飲み終わったところですからその余韻に浸っているところだった。

最初は何のことだったか訳が解らなかったようだったが直ぐにその状況を理解し行動を開始した。

先ず行ったことはコンピュータには絶対に触らないようにして小さな画面を確認することだった。

リーダーが機械に疎いレイデンの事を解っていたために最低限のマニュアルを作ってくれていたが為の行動だ。レイデンは基本何も信じずに基本自分の考えを信念として動いているのだがこの時に限っては例外で彼はこのマニュアルに従って行動する。それほどリーダーを信頼している証拠なのだろう。

「畜生……。いったいなにがどうなってるんだ？」

レイデンはマニュアルを見ながら目の前のキーボードを丁寧のひとつひとつ打っていく。

「……エラーコード74438? ……まさかハッキングだったのか?」

レイデンはマニュアルに書かれた表と照らし合わせたのだろう。その表と画面を目が行き来し、その度にレイデンの目は丸くなっていた。

「どうやら失敗のようだね」

レイデンの背中に声がかかった。その冷たい声はまるでナイフでも突き立てられているかのような錯覚を呼ぶ程であった。

「リーダー……。なぜここに！！……いや、違うな？」

レイデンは少し違和感を感じた。それはたぶん普通の人間なら感じ得なかっただろう僅かな違和感だったが、それを読み取れたのは彼が傭兵だからであろう。

「……流石だね。僕を見破るなんて。初めてじゃないかな」

レイデンは妙な感じを覚えた。

それは、熱。

背中からじわじわと熱が感じられる。それと考えられないほどの緊張感も合い重なって、レイデンはそこを振り返ることが出来なかった。

「君は用済みだよ。だが、その後ろのコンピュータはまだ利用価値があるから大切にしろ、との上からの命令でね？　だから退いてくれないかなあ」

声はレイデンに答える隙を与えずにまた話を続ける。

「僕としてはここを全て燃やしたいんだよ？　でもね、仕方ないよね。彼らには逆らえないし、逆らってもメリットなんてないし」

「……それを素直に従うとでも？」

レイデンは後ろを振り向き、背中のベルトにかかったナイフを引こうとして、

ふと、息を呑んだ。

何故ならそこにいたのはレイデンの腰ほどしかない小さい子供だった。しかし目は所謂子供らしい目などではなく光の消えかけた目。腰の据わった目とも云えるそれはつまらなそうな感じにレイデンを見つめていた。

髪は炎のように真っ赤で服は仄かにオレンジ色のポロシャツ、他は……あまりよく見ることができない。しなかったのではなく、できない。

何故ならここは戦場。一瞬の油断が命取りに為り得る場所。だから、レイデンはナイフを引き抜いた。少年の姿を一瞬でも見つめた時点で油断していたことに気付かずに。

「負けだよ」

少年はぽつりと呟いて手をレイデンの目の前に向ける。

そして、轟！！と炎が渦を巻いてレイデンの方に恐ろしいスピードで向かってきた。

レイデンは避けようとして……それをやめた。

そしてレイデンは少年が放った炎に包まれた。

一先ずの作業が終わり、ライズウェルトはほっと一息ついていた。

「お疲れさま」

後ろからリーフガットがコーヒーを差し出す。

「ありがとう」

ライズウェルトはコーヒーを受け取り、一口飲んだ。

「アメリカンでよかったよね？」

「ええ。砂糖は？」

「あなたは蜂蜜をスプーン一杯分」

「正解」

「ところでライズ」

「ん？ なに？」

ライズウェルトはコーヒーにふうふうと息を吹き掛けながら、言った。

「あのハッキング……。あなたならどう見る？」

「あれは私はリフディラ軍じゃないと思ってるわ」

ライズウェルトは特に考えるような素振りもせず、答える。

「どうして？」

「だってリフディラがそれをするメリットがない」

「個人の軍隊がやってる可能性も否めないでしょう？」

「だからとしても今回の襲撃は国際問題よ？　しかもリフディラが10割悪いんだからリフディラは周囲の資本主義国に袋叩きにされて領土を分割されるのがオチ」

ライズウェルトはコーヒーを飲み終えたのか、カップをもって立ち上がった。

「じゃあどうして行動に移したのかしら……。ヴァリヤーも未だ見つかっていないし」

「もしかしたら私たちの知らない間に大きな外の意志が働いているのかもしれないわね」

ライズウェルトは小さく呟いた。

そのころ。

サリドとグラムはヌージャヤック麓に聳える村に辿り着いた。

エンジンをオーバーヒート寸前まで動かしたからか半日もしないでそこに辿り着いた。

そして今は村にある小さな宿屋で今後の計画を建てていたのだった。

「どうやらヌージャヤック内は洞窟になっていて無限に入り組んでいるらしい。シスター・ビアスタから聴いた『夢月夜草』はその洞窟の奥地にあるらしく、そこにいるんじゃないか、ということだ」

サリドは既に長い間運転をしたのと直射日光に浴び続けたのとでへとへとになっていたグラムに言った。既に疲れきったグラムの代わりにサリドが村を回り、情報を収集していたのだ。

「……なるほど。つまりはその洞窟を抜ける必要がある、と。厄介だな」

「辺りには金属が埋まつてるらしくて時計もコンパスも正確なそれを表さないみたいなんだ。ほんとうにめんどくさいよ」

サリドはそう言ってグラスに注いだ炭酸水を飲み干した。

『夢月夜草』とは透明病唯一の対処治療薬となりえる薬草のことだ。

それは副作用が多少あるものの透明病の進行をある程度遅らせることが出来る、とされている。しかしながらその情報はまだ臨床実験を行っていないから確証のあるものではない。だから世間に大々的にアピールされているものでもない。

これはあくまでもシスター部隊が独自に研究を進めていった上で知り得た情報であって、これはまだ『知識』の片鱗に過ぎぬものだった。故に確認がとれない限り、発表は出来ない。それから行けば、姫様に夢月夜草を用いて治療を行うことが初めてとなり、これが成功すれば歴史的な快挙であることもまた明らかであった。

「……まさに最後の一手、って訳だな。それによっては俺たちや歴史に名が載るぜ」

「でもまあ、ここまで来ると寧ろ何かいろいろとあって怖いんだけどね」

サリドは携帯端末を片手につまらなそうに呟いた。

「何だよ。サリド。やる気ないなあ。一体どうしたってんだ？」

「君は簡単そうに言うけどヌージャックってのは人食い山って罵られるほど遭難者が出る山なんだよ。それを緊張感無しに登ろうとする君がいろいろとおかしいよ」

「緊張感がない、って？ 馬鹿野郎！ 俺だってそれくらい感じてるよ。でも緊張感だけじゃあ登山は出来ないぜ？」

グラムは笑って、コップに残った炭酸水を飲み干した。

「さて、明日も早いことだし、寝るとするかい？ …… まあ君は早く寝ないだらうけど」

サリドはひとつ欠伸をして、携帯端末をスリープモードにする。

「当たり前だ。軍務とはいえ、今はプライベートタイムだからな。好き勝手にさせてもらうぜ」

そうかい、とサリドはベッドに潜り込んで呟く。

「ま、明日苦勞するのは君だし。それは別に問題ないもんね」

案の定、だった。

グラムはその後有料のミュージックチャンネルを貪るように観た後、何処からか持ってきた映画のDVDを取り込み、観ていたらしく、しかし音声は寝ているサリドに気を利かせてかイヤホンをつけていたのだが、それでも画面から洩れる光はなおも彼から眠気を奪っていた。なんとサリドが累計睡眠時間6時間半もの間寝て、起床してもなお起きていた。流石のサリドもこれにはあきれた。

しかし当の本人は「なんだ、もう朝か？」と何食わぬ顔でサリドに返した。彼の目の下にある立派なくまに彼自身は気づいているのだろうか、とサリドは思ってたまたひとつため息をついた。

「まったく、本当に君は馬鹿だなあ」

サリドはヌージャヤックへと向かうための準備を進めていた。横目でグラムの方を見ると、ようやく眠気がやってきたのか、口をいっぱいに開け、大きく欠伸をしていた。

「……大丈夫、だよな？ ダメなら俺ひとりで行ってもいいんだぞ……？」

サリドはそんなグラムを心配してか声をかけた。

「大丈夫だ、問題ないぜ。いいからさっさと行っちゃおう」

「人はそれを“死亡フラグ”というんだ」

サリドはため息をひとつついて言った。

『ヌージャヤツク入口 用の在る方と命が惜しくない方以外はお引き取り下さい』と木の板によく見ればそう読めなくもない良く言えば達筆、悪く言えば達筆過ぎて何が何やらわからない、そんな字が書かれていた。

「すごい注意書きだな……。よっぽど危ない場所なのか？」

「そりやそうでしょ、グラム。昨日も言ったかもしれないけどここは人食い山。例年何十人も人間が遭難してる、って」

「…………緊張してきた」

「今更？ ああ、そうか。寝なさすぎて今まで気持ちが高くなったのか」

「ああ、そうかしんねえな。ま、御託はここまでとしてさっさと行こうぜ」

グラムのその言葉にサリドは頷いて、グラムを先頭として、山の中へと足を踏み入れた。

山の中は当初予想していたよりも相当に入り組んでいた。

行き止まりや埋もれた道、崖すれすれを通らなければならないなど様々なことがあった。

斯くして当初の予想よりも数時間　あくまでもサリドたちが体内時計を参考にして割り出した迄であって、実際はもつと時間がかかっているかもしれないし、逆にかかっていないかもしれない　かけて山の奥地へと足を踏み入れた。

山の奥地は真つ暗な洞窟の中であるというのにそこだけはまるで外みたいに明るかった。よくよく見ると吹き抜けのようになっており、そこから太陽の光が当たっているのだと思った。

そこには湖が広がっていた。この世のものとは思えない、深く澄んだ湖。そのまわりには苔が広がっていた。本当に綺麗な湖には魚は住んでいない。魚が住むのに必要なプランクトンが存在しないからだ。

湖の中には島があった。小さな、小さな島が。そこは今まで見たことのない綺麗な紫の花が咲いていて、そのまわりに一人の女性が立っていた。

まさか、と思いサリドがそちらに向かおうとする前に、彼女が反応し、彼女がこちらの方に向かってきた。

先に口を開いたのはサリドだった。

「もしかしてあなたは」

と、先の名前を言おうとする前に彼女も口を開いた。

「いかにも。私がシスター部隊のリーダーです。同じ部隊の人間からはエンゼルハンドとも呼ばれていますが、それでは呼びにくいでしょう？　だから、私の本名をお伝えしますね」

彼女は眼鏡をかけていたが、その眼鏡を外していった。眼鏡越しに見た彼女の目は鮮やかなモスグリーンでとても綺麗だったが、眼鏡が外されると、まるで変態によって今までの姿を隠していたかのように、より素晴らしい目が見られた。

サリドはそれを見て何も言えず、ただただ眺めているだけだった。

「私の名前はフィリアス・ホークキャノンと言います。以後、お見知り置きを」

笑って、言った。

「……そうだ。もしかしてシスター・ピアスタからすべてを聞いているのか？」

「ええ。勿論、あなたたちのことも。グラム・リオール」

「……さすがは国境に隔たり無く活動しているだけはあるな」

「誉め言葉として受け取ってよろしいでしょうか？」

シスター・フィリアスは健やかに笑みを溢して、答えた。

「あなた方は『夢月夜草』を求めてここにやってきたのでしょうか？
それは、あれです」

フィリアスはそう言って先程彼女が立っていた場所に咲いていた花を指差した。

「あれが夢月夜草？ …… どう考えてもラベンダーにしか見えないのだけど……」

サリドは何度も不思議がってその花を見た。確かにその花は端から見たらラベンダーにしか見えなかった。

ラベンダーには殺菌や精神安定の効能があるとされている。もしかしたら『シスター部隊』はラベンダーの俗名を夢月夜草と呼んでいるのではないか、と思った。

「いいえ。確かにこの花はラベンダーに似ているけどラベンダーと明確に違う“なにか”がある。夢月夜草は夢月夜草なのです」

頭がこんがらがってきた、とサリドは思ったことだろう。

グラムもたぶん同じことを考えていたに違いなく、グラムもまたまるで頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいるかのように上の方に目を向かせ、腕組みをして、ただただ考えていた。

そのときだった。

『何やってんだよ。貴様ら』

空から声が響いた。

それは子供のような声であって、しかし声のところどころには大人っぽさも感じられた、そんな声。

『ここまで来るのに時間食っちゃったからてっきりもういないと思つたら……ククク。定時にいるんだもんな？ リーダーの予言もアテにするもんだな？』

「貴様……！ 何者だ！」

そう言つてサリドは銃を構える。

しかし声は怯まずに、

『おっと。そんな武器じゃ僕には効かないよ。そうだねえ、もっと……』

「何か来るぞ！！ 逃げろ！！」

グラムが叫んで三人が急いで走り出した束の間、

『こつじゃなくちゃ！！』

轟！！と空気を吸い込んで今までサリドたちがいたあたりが炎で覆い尽くされた。

「っ……！！　なんだあれは？！　新種の火薬器か！！」

『……そんなautomaticなものじゃないさ。これは“僕自身放った炎”だよ』

「……いい加減にしろ！！　さつさと出てこい！」

サリドが威嚇のために銃弾を一発撃ち放つ。

しかし、当たる気配などもなく、近くの岩に　正確には岩壁に激突した。

『……やれやれ。解ったよ。この姿は見せなくなかったんだけどね？』

なぜかって？

『この姿を見せたものは……生かして帰しちゃいないからだよ！！』

刹那、岩壁の一部が破壊されそこもまた炎に包まれた。

炎が一番弱いものは水でなく土である。現に燃え盛る炎に水をかけると大抵は消えるもののその一部は例外として水に浮いた僅かな油を利用して水を駆け上がり、さらに被害が拡大する。

それに対して、土は火の元にかけてしまえば、純粋な土であれば燃

え広がることはそうない。

しかしながら、その人間が何処からともなく放ったと思われる炎は違った。

岩壁を破壊しただけでは飽きたらず、その岩壁の破片を糧にさらに炎上するに至ったのだ。しかし意外と長く点くことはなく直ぐに消えてしまっていることは、常識として存在する炎の知識とは別物になっているのだが。

「やあ、はじめまして」

そしてその炎が完全に消え去ったときに、人の影が、その炎の中心に見られた。最初は陽炎に依るものかと思われたがその少年と思わしき声　さつきサリドたちが聴いた天井から放たれた声と酷似している　が聞こえたのでそれは本当にそこに存在しているものなのだということがわかった。

そこにいたのは小さな子供だった。しかし目は子供のようなキラキラと目に光が入って輝いてはなく、まるで死神のような、目をしていた。

「……貴様、何者だ……？」

サリドがまだ銃を構えたまま、呟いた。

「僕はファイレイオ。『オリジン』の四天王の一人さ」

「ファイレイオ……。オリジン……？」

「そうさ」

「オリジンとは何をする組織だ？」サリドは銃を構え、銃弾を一発放った。

「脅迫かい？ そんなものは僕には聞かないよ。だって僕が使ってるのは『魔術』だもの」

そう言つてフィレイオはサリドたちの方に手を向けて、

「お返しだよ」

短く呟いた。まるで玩具を初めて分け与えられた無垢な子供のように、楽しそうな表情で。

そして、まるでコイルガンによって放たれたレーザーのように一直線に炎の柱がサリドたちの方に向かってきた。

「……なんだよありゃあ！ 逃げるぞサリド！」

「え、あ、グラム……！！ まだ敵は……」

「敵前逃亡じゃねえ！！ 戦略的撤退だ！！」

とグラムはあまり意味の変わらない熟語たちを提示して、サリドを強引に引き摺り、走り去った。

とりあえずグラムはサリドとフィリアスを近くの岩場に引き込んだ。もつとも、それで岩をも砕くフィレイオと名乗った少年の炎から逃げ切れた訳ではないのだが。

「……グラム、どうする？」

サリドはすっかり冷静を取り戻して、沈着な面持ちで言った。

「あいつが言っていた『魔術』が本当なら俺たちは気づかない内にとんでもないやつらに喧嘩を売ってみたいだな。……しかし魔術ってなんなんだ？」

「触りだけなら教えられることも出来なくはないですが」

シスター・フィリアスが二人の会話に口を挟んだ。

「魔術とはそもそも突然生まれたものではありません。強いて言うならば一滴づつゆっくりと落ちていった雫が溜まってコップに満たされていったような感じです」

シスター・フィリアスは続ける。

「魔術は、所謂旧時代と言われた頃から存在しているとされたものです。しかしながら当時の『魔術』とはとても机上の空論としか言い様のないもので、物理法則を無視するなど、この世界の理を凌駕するものばかりでした。だから旧時代の人間は魔術師を異能として狩りをはじめた。そもそも魔術師の素質のある人間は少ないですか

ら。それで魔術師の殆どが死んでしまいました」

「それから“魔術師という名を冠する者”は姿を消しました。しかしながら魔術師の素質を持った人間は完全に世界から消え去ってはいなかったのです」

「旧時代から魔術師と魔術というものがあるとは……初耳だな」

「科学の興隆した旧時代が滅んだ理由も魔術が関係があるとされています。噂によれば魔術の衰退を恐れた魔術師が大規模な魔術を地球そのものに組み上げ、地軸を数度ずらす事に成功したらしい、ということです」

「地軸をずらすとなると世界そのものの気候が崩壊し人間そのものが滅亡するのでは？」

「全くもってその通りです。現にその魔術は地球の磁気に大きな影響を与えました」

「磁気に？　それで人間は滅んだというのか？」

サリドの言葉にフィリアスは首肯し、続けた。

「当時、人間はロボット……人が造り上げた人間、ですね。それを造り上げました。そして人間がすることの殆どを彼らが担うこととなったのです」

「……さて。CPUは磁気の僅かな乱れにも弱いとされています。それが、その僅かな乱れが地球全体に発生したとしたら？」

「……まさか！」

「そう。そのまさかです。CPUが磁気の乱れによって我を失い人間に反旗を翻し、そして人間は滅んだ、とされています。その魔術師が望んだとおり、科学が興隆した世界は完全までに破壊されたのです」

「そこまで知ってるなんてね。あの連中が君を目の敵にしてる理由も何となく解る気がするよ」

気づいたら目の前にフィレイオの姿があった。どうやってここまで来れたのか、と問い質そうとすると、

「だから言っただろう？ 魔術だよ」

地面が、震えた。

正確にはフィレイオが放った目に見えない何かに大地が共振していた。

その俄に信じがたい行為を三人は目の当たりにしていた。

「マイクロウェーブでも放ちやがったか？！」

「マイクロウェーブ？ ふふん。君たちの方ではそうと呼ぶかも知れないね。でも僕らにとっては違う。これは『龍脈』を用いた簡単

な共振反応さ。あつ、龍脈つてのは大地に流れる気のことだね？
まるで人間に流れる血潮みたいに複雑でこんがらがってる。そのかわり世界のありとあらゆるところにはあるんだけどね」

フィレイオはそう言って、消えた。

それを見て、サリドとグラムはただ何も出来ず、たじろいでいた。

「……何処に!!」

そう叫んだグラムは、辺りを一巡りして、

何かを発見した。

それは彼の隣に立つサリドの後ろにあった。

それはサリドがフィレイオの裏拳をいなして　それはグラムの想像だが、たぶんそうに違いない　二人が睨み合っている、そんなところであつた。

「貴様……?」

そのときグラムにはフィレイオの顔が大きく歪んだようにも見えた。それはきつと彼より一番近い位置にいるサリドもはつきりとそう見えたことだろう。

「それでも昔は武術をたしなんでいてね?　こういうゆっくりでスビードが感じられないパンチを受け止めることなんて朝飯前なんだよ」

かつて、ヒュロルフタームによる巨大代理戦争が合理化される前はそれなりに昔の戦争スタイルを維持していた。昔の戦争スタイルとは所謂銃や地雷などを使い人と人が闘うものであった。

そんな中、そんな昔の戦争スタイルに取り込まれたレイザリー特有の武術が存在する。それは銃弾を一瞬でかわし、地雷を流れから感知する……といったものだ。

ヒュロルフターム合理化によりその武術の必要性は今もお喪われていない。

その武術を一家相伝する家系こそ。

マイクロツェフ家だったのである。

「貴様ア…… 何処まで僕を侮辱すれば……!!」

「無駄だよ」

サリドはそう言って腰を低く構え、消えた。

「消えた……!! 人間のくせにか?！」

フィレイオは低く呻いて辺りを見渡した。

「人間を甘く見ているからやられるのさ」

フィレイオがその声を聴いた瞬間。

彼の顔が外から受けた大きな力によって大きく歪められた。

サリドの拳による、大きな一撃で。

「う……ぐ……!!」

フィレイオは大きく後退り、体勢を立て直そうとする。

しかし、

まるで自動車に激突したような衝撃を、再びフィレイオは浴びることとなった。

サリドがもう一撃拳を加えたのである。

「人間がつ……！！　なめるなよ……！！」

そう言つてフィレイオは構えた。

それを見てサリドは無意識に構えて、相手の反応を待った。

「……まったく。僕がこんな人間ごときに痛手を負うなんて思わなかったよ……」

だが、それも終わり。茶番もここまでだ。

「みんな、みんな消し炭になって消え去ってしまえ！！」

フィレイオが叫んだと同時に、彼の掌の上に大きな炎の塊が“突如として”出現した。

サリドはそれを見て一瞬目眩を感じたが、なんとか取り戻しそれを見た。

「なんじゃこりゃ……。あんなのにやられたらみんな死ぬぞ！！」

グラムが低く呻いた。それを見透かしてたかのようにフィレイオは鼻で笑つて、

「そうだよ。お前らみんなここで死ぬ。そして薬も届かないノータが死ぬばレイザリーの崩壊、世界秩序の崩壊さ。ああ、なんて面白いんだろう」

そう言ってフィレイオは壊れたように笑った。

「ふざけるな……!!」

その口を開いたのはサリドではなくグラムだった。グラムは拳を握ってただその姿勢のまま小刻みに震えていた。

「なんだ？ どうした。何もできないくせに？ そのお前が何かするか？」

フィレイオはグラムが今まで何もしてこなかったのを覚えているので、余裕をまた持ち始めたのか、冷笑した。

「世界秩序の崩壊だあ？ そんなのがお前らに出来るかよ!! ！ ！ ！ いつもこいつも自分勝手！ いい加減にしろ！」

そう言ってグラムはポケットから何かを取り出した。

それは。

「グラム……!! お前、それを何処で?!」

サリドが持っていたはずの、手榴弾だった。

「……時間切れだよ。もう終わりさ」

フィレイオが手に浮かんだ炎の塊を槍投げの要領で投げようとした、そのときだった。

どこか古めかしい電子音が洞窟内に響いた。

そしてその音を聴いてフィレイオはポケットから何かを取り出した。

それは、携帯電話だった。

「もしもし。なんだ」

少し苛立ちを見せて、彼は電話に出た。

『……………』

「なんだ？ まだ任務は終わっていないぞ？」

『……………！！』

「解った。解ったよ。とりあえずそういう方向なんだな」

それだけを言うとフィレイオは電話を切った。

「……運がよかったな」

フィレイオはそう言って炎の塊を自らの手で消し去る。

「どうやら一時休戦のようだ」

なぜだ？

「そんなことは聞くなよ。あのお方からの命令でな」

そう言ってフィレイオは自らを炎に包み込み　消えた。

十

一先ず、積もる話はあるにしろこの夢月夜草を持ってシスター・ピアスタの待つあの宿屋　グラン・モーレに帰らねばならない。そもそも、その為にここに來たのだから。

「それじゃあ、これくらいあれば十分でしょう」

そう言ってシスター・フィリアスは五本ほど花を摘んで、言った。

「それじゃあ帰りますか。この花を用いた治療はなぜか私にしか出來ないのでしてね……」

十

二日後。

一先ず彼らはシスター・ビアスタと姫様の待つ宿屋グランモーレに到着した。フィレイオという謎の男との謎めいた戦いは置いとくとして、最終目的地であったここに辿り着いた。

その後、と言つてはなんだが、その治療は成功した。

ただし回復するに三日の期間を要してしまったのだが。

リーフガットにその後連絡を取ったところ、

「遅すぎだ馬鹿。私がどれほど上層部に頭を下げたと思っている」

……逆に怒られたという。

そのころ。

「どうしてあの者を逃したのですか？」

フィレイオが宮殿のような、洞窟のような、暗闇がすべてを支配している、そんな空間にいて、誰かに問いを投げている。

「……つまり、私に責任があるത്？」

暗闇の中で、声は答えた。

「ええ。何故逃がしたのか、聞かせていただきたい。彼処で逃がしても我々にメリットは存在しないはずだ」

「ああ、確かにその通り。我々にメリットはない」

暗闇は首肯する。あくまでもそれは実体化したわけではなく、そのように見えただけではあるが。

「だが、それは現在の我々にとって、なのだ。未来の我々にはそれ相応の価値がある、という『予言者』からの思し召しだ」

「また予言者か……」

そう言つてフイレイオの顔が苦悶の表情で染まつた。

「まあそう顔を歪めるな。せつかくの美貌が台無しだぞ？」

「この男顔を見てそう言うとは……。皮肉っているのか？ エレキス」

「いやいや。君は立派な“女性”ではないですか」

エレキス、と呼ばれた人間と思しきそれは乾いた咳をひとつふたつして言った。

そして、サリドとグラムは本国に帰還するために飛行機 といつても来るときに乗った無機質な軍用機だが に乗っていた。

「あー。今回も今回で大忙しだったな」

「そうだね。しかしまあある意味ヒュロルフタームとドンパチやるより疲労がたまったかも」

「それは言えてるな」

「サリド・マイクロツェフとグラム・リオールはいるか？」

部屋でインスタントのコーヒーを飲んでいたサリドとグラムに突然リーフガットがやってきた。

「どうしたんです？ まさかまたヒュロルフタームとなんかやれとか……？」

「もう俺はヒュロルフタームと曲芸大会しろって言われてもやるかもしんねえな」

「違う違う。今回は『世界平和』に関わることよ。ヒュロルフタームは一切関係無し！」

そう言っただけリーフガットは数枚のB5のレポート用紙をまとめただけの束を二人に渡した。

「……これは？」

「世界トリアスロンのプログラム」

リーフガットからそれを聞かされ、二人の目が点となった。

「……えーと、つまり、どういう……？」

「えーと簡単に言えば、あんたもトライアスロンに出てもらっわ」
リーフガットはただ無感動にそう言った。

そのころ。

見るからに国の重要人物、所謂VIPが乗るような絢爛豪華な飛行機に一人の少女が乗り込んでいた。

その少女はただ何も言わず、何か怒りを感じているようにも見られたが、彼女自身いつもこの感情であるため変わりはない。

「アリア、気分はどう？」

彼女　アリアが誰もいないファーストクラスの真ん中の座席にこじんまりと座った直後、ちょうど彼女からみて目の前に備えられていた小型テレビに映像が流れ始めた。

それは真つ白な壁に白衣を着た茶髪の女性を撮しており、声はその人間から発せられたものだ、ということが見てとられた。

「ああ……大丈夫ですよ。何も問題はない」

適当に返事をして彼女は目を瞑った。

「そう。ならいいわ。なんかあったらいつてね」

テレビに映し出された女性は笑って言った。その直後にテレビの電源が自動的に切れ、彼女もまた深い眠りについた。

「フランシスカリガンテ」ヨシノ様ですね。こちらがパスポートと旅客券のチップとなります。大切に保管しておいてください」

カウンターにて軍用服を着た清楚な感じの女性がそう言ってカウンター越しに立っている少女に手のひらほどの大きさしかない透明なプラスチックのケースを渡す。

少女はなんだか腹の居心地が悪いようで終始なんだかぎこちない表情を見せていた。

少女はそれを受け取って、何も言わずに一礼し、立ち去った。

パスポートや飛行機旅客券などの所謂公共交通機関に乗るために必要なものも、今はデータ化されている。データの方が管理がしやすいし、仮に何かあった場合直ぐ様反応が出来るようにしてあるためだ。

少女は軽い鼻歌混じりでショッピングモールの大通りを進む。彼女は時々花屋や服屋、さらには本屋によって自分の欲しいものをチェックしているがそれもウィンドウショッピングまでに留めている。

何故ならば。

「いつけない……。あと3分で待ち合わせの時間じゃない?! あの護衛「バカ」なんで起こしてくんなかったのよ!!」

そう言っただけで彼女は乱暴にキャリアバッグを引き摺って走り出した。

オリンピックアドーム。

かつて旧時代では常夏の島としてリゾート地になっていたという群島も今は機械的に気候が調整された人工浮島になっていた。ここはもともとかつて存在していた世界連合軍の施設であってそれをレイザリーが改良して造り上げたもので、一言でまとめらばここはレイザリー軍の軍用施設であるのだが、現在は一年に数回だけ一般人に開放される。

今行われている世界トリアスロンが、その例だ。

戦争に関わりのない一般人にとっては戦争は負のエネルギーの塊と思われるのは明らかである。昔と違って戦争の勝敗が明確に決められなくなったので、国民は尚更戦争に向けて猜疑の心を傾けているのだ。

しかしながら、この世界トリアスロンは違う。

資本四国、レイザリー王国が主催したこのお祭りは資本主義国に置かれた企業の巨大な宣伝の場となりうる。さらには自社の生産する武器の平和志向性を世界にアピールする場にもなるのだ。

世界には戦争をショービジネスととる人間もいる。

これほどまでも武器を“他の国々にアピールできる機会”は少ないからだ。

しかし戦争の非人道的な生産性を排除するべくレイザリー王国が数年前に始めたものこそが、この世界トリアスロンなのであった。

「それが世界トリアスロンの成り行きってわけか。まったく、レイザリーも訳の解らないものを作り出したな」

神殿のような、石柱の立つ空間には一人の女性が立っていた。

白い修道服に身を包み、あろうことか口の方までも布で覆っていた。

女性は、目の前にあった大きな像を一瞥した。

それはその話している女性によく似たものだったが、それとなく違っているのが見てとれた。

「レイシャリオ枢機卿」

ふと、レイシャリオは声がかかったのに気付いた。

隣を見ると教会の牧師が着るような黒ずくめの服を着た茶髪の男が立っていた。

「ナウラスか。どうした？」

レイシャリオが尋ねるとナウラスは待っていたかのように話し始めた。

「部隊030が準備を開始しました。いつでも準備は完了です」

ナウラスは自分のやっていることは正しい、と見せつけるように胸

を張った。

「解った。それでは始めよう。総ての平和を求める人へ」

そう言つてレイシャリオは像に向かつてひざまづき、黙禱を始めた。

0 - 2 (後書き)

次回更新：12月11日予定。

……そんな物騒なことが起きてるとはさも知らないだろうオリンピックアドームは今日も雲ひとつない青空であつた。

世界トライアスロンの開始を明後日に控えたオリンピックアドームは多少の喧騒はあるものの着々と準備が進められていた。

選手とその関連する人間は既に入場を許されており、それらを含めるとあとはスタッフくらいしかいないので人通りは疎らである。

「……んで、なんで、俺らがここにいるんだ？ サリド」

「仕方ないだろ、グラム。毎年この時期にはこれがあることくらい解ってるんじゃないのか？ 選手の防衛役抽選。その度にプロのボディーガードを選ぶとお金が嵩むし機密性が守られる、とかどうとかで」

グラムの発言にサリドは携帯端末を弄くりながら なんとなく何かを調べているようにも見てとれるが 言った。

「まあ、そうなんだろうけど……。なんで“あいつ”の護衛なんだよー！」

「グラムは結構なめてるかもしれないけど彼女あれでも相当な実力の持ち主なんだよ。しかも天性の素質を持っていて、かつ努力家。これはさすがの君も真似できないんじゃない？」

サリドはふざけたように小さく笑った。

「で、その話は出来たら本人が居ないときにして欲しかったんですけどねえ」

フランスカはサリドの後ろで眉を痙攣させながら、言った。

「いやはや……。聞こえてたか？」

「当たり前でしょう?! あんたノータのことなめてるでしょう!」

「別になめては居ないんだが……。そんな言葉遣いでいいのか? これでも一応世界大会だから粗を世界から探されてしまうぞ」

「そんなの、探せるものなら探せばいいの。私はそんなの一切ない完璧ですから」

ああそうかい、と適当に相槌をついてグラムは天を仰いだ。

「着いたぞ」

そこにあるのは、天が霞むほどの高さがあるマンションであった。

マンションは一人の選手がワンフロアもらえるという非常に豪華なつくりであった。

「えーと……。27階か。グラムよろしく」

サリドは荷物を抱えて重たそうに苦悶な表情を示した。

「へいへい」とやる気のない声でグラムはエレベーターにある27のボタンを押した。

サリドたちを載せたエレベーターが27階に到着し、扉が開いて三人の目に入ってきた光景は、なんとも形容しがたい景色でもあった。まず、あるものは家具全般。だから棚からテレビからパソコンまでその全てが最高級の品々だった。なぜ解るかといえば、

「凄いな……。まさかここまで最高級だとは。ノータっていつもこんな感じなのか？」

本をいつも貪るように読む男、サリドがいたからであった。

「まあね。でも私は軍職になったばかりだし。私より仕事が長い人間は国にも困るけどこれ以上の装備なんじゃないかしら？」

フランススカはため息をついて首を横にゆっくりと一往復振りながらそう言った。

「まじか……。侮れない。さすが国のVIPだけはある……」

グラムは呻くように呟いて、ふと思った。

確かに、家具はもともとオリンピアドーム側から支給された、いわば備え付けのものである。

しかし、

なら“そのまわりにバベルの塔のごとく積み上がっている大量のダンボール”はなんだ？

グラムがそんなことを考えていると、奥から声が聞こえた。

「おかえりー」

「……ただいま」

フランシスカは鬱陶しい素振りを見せた。もう数える気も失せるくらい回数彼女はこれをやっていたのだろうか？

「さっさと出てきなさいよ」

フランシスカは次いで付け足すように言った。

そこにいたのは如何にも医者のような人間だった。白衣を着て、セミロングの茶髪を首のところで縛っていた。眼鏡をかけていた彼女は笑って言った。

「はじめまして。私、ラインスタイル・ホークキャノンと申します。今回フランススカリガンテヨシノの健康管理を担当させていただきます」

「ホークキャノン？ 聞いたことのあるような……」

サリドはそれを聴いて少し唇を歪めたが、

「はい。先日は妹がお世話になりました」

「……あっ！」

「どうしたサリド？」

「フィリアスさんだよ。エンゼルハンドの。なるほど。彼女のお姉さんなのですね？」

サリドが言うとラインスタイルは首肯する。

「私もホークキャノン家は医学に秀でた家系でして。代々医師などに就くのが多いのです。シスター部隊にも入隊している人も多いです。……まあ姉は違いましたが」

「姉……？」

「ライズウェルトをご存知ですか」

ラインスタイルは言ったが、サリドには聞き覚えのない名前だったし、それはグラムも同じだろう。

「やはりわかりませんか……。実はレイザリー軍に入隊しているらしいんですね。たしか通信士になるとかどうとか。だから嫁の貰い手が見つからないのよ」

「それはあなたも同じよ？ ラインスタイル」

フランススカが少し苛立ちしながら、そう言った。

「……、フランススカ。どうする？ まだ準備を始めるには余裕があるだろうし……。ちよつとこの人工浮島を巡ってみたら？ なんか発見があるかも」

ラインスタイルはたくさん積まれているダンボールのうちのひとつの封を切り、そこから水筒を取り出し蓋を開け、中に入っている液体を口に含んだ。なんとなく彼女の口から溢れて洩れ出た色がどうみても飲める色ではなかったのが気になるところだが。

「変わり者だろう。あいつは」

フランススカは傍にいたサリドに小さく呟いた。

サリドはただその風景を見て苦笑いすることしかできなかった。

さて、とりあえずサリドたちはライセンススタイルの助言をもとにこのオリンピックアドームをふらふらと巡ることにした。例えば島とはいえ、その大きさは計り知れず、島内の移動に車を有するくらいであった。

なのでこの島にはレンタカーショップが数多く並んでいる。別にどの車でも構わないが数多の種類の車を借りれるショップは安価で借りることが出来、少ない種類しか借りれないショップでは借料が高価になる傾向にある。しかしながら手入れやサービスの面から考えると後者の方がより丁寧に行ってくれるため、後者はブルジョワ向け、前者は一般市民向けと無意識のうちに分類が為されているのだった。

サリドたちはとりあえず島一番（値段の高さ的な意味で）のレンタカーショップに向かった。目ぼしいものはもう借りられていたのだが唯一一台だけ車が残っていた。

それはよくある軽乗用車で『定員：4人まで』と車の中に入っている札に書かれていた。

色はスカイブルーでナンバープレートは軽乗用車を示す黄色。しかも驚くべきは価格。なんと普通にそのショップで車を借りるより0が一個少ないのだった。車種に値段が比例するとはいえいくらなんでも安過ぎであった。

「……、これにしよう」

フランススカにより一発で決められる。なんてブルジョワなんだ、

とサリドは改めてノータの世間ずれを知ったのだった。

「じゃ、これお願いしまーす」

最近出番を奪われ気味のグラムが軽い足取りでカウンターへ向かう。

カウンターに座っていたハワイシャツを着た男　レンタカーシヨ
ップよりも海の家を経営しているほうがお似合いのような気もする
が　は恭しく笑って、書類を渡した。

「……よし、これで大丈夫だ」

グラムは書類を確認して独りごちる。

「そーいや、これは誰が運転するんだ？」

グラムが書類の束を、恭しく笑いながらサリドとフランススカが辿
々しい親睦を深めている場に割り入ってきた。

「なに行ってるんだい？　僕は“本業は学生”なんだから免許を持
ってないし、運転することも出来ないよ？　もしかして彼女に運転
させるつもりだったのかい？」

「……、」

グラムは答えられない。

そんなことは解りきっていたのだ。サリドが免許を持ってないから
運転させることは、たとえこの平和の祭典としても、許されない。
かといって選手であるフランススカ自身に運転を任すことなんて出

来るわけもない。そもそも彼女は車の運転が出来るのだろうか。

「……いや、A D Aがあるくらいだしな」

A D A。

グラムが独り言で言ったこれは正式にはA u t o m a t i c a l l y D r i v i n g A b i l i t i e sの略称で、『自動的運転才能』と呼ばれるものだ。

ノートになった人間には元から備わっていたのか、はたまた改造によってその能力を“強制的に”手に入れたのかはわからないのだが、そんな能力がノートにはあった。

簡単に言えば『どんなものでも運転することのできる技能』のことで馬から車、飛行機なども運転することが出来る。

このの由来としては旧時代にいたとされるどんな乗り物でも乗りこなすとされたアーサーという青年 のちに彼は“ブリテン”なる国の王になった存在だった。それがそれをグラムは知ることではない。の解析を進めた結果、その能力があることが判明したのだ。しかもそれは遺伝することが分かり、ノートはその遺伝子検査によって選ばれたとされている。

されている、というのはサリドたちのような軍人や学生が知るような事実ではない、ということ。で現にサリドたちが知るこの知識も雑誌や携帯端末でブラウジングして得た情報であり、これもまた憶測の域を過ぎないのであった。

「……、おーい？ グラムどうした？」

サリドの声で、はっとグラムは我に返った。どうやら思考し過ぎて辺りが見えなくなってしまうらしい。猪突猛進な彼らしいことではあるが改善すべき課題でもある。

「あ、ああ。ところで、どこに行くんだ？」

「うーん」サリドはガイドブックを見ながら、「とりあえず、適当に一周してみようよ。そうだな。お腹も空いたから目ぼしいところでご飯でも食べようよ。フランススカもどうだい？」

サリドの言葉にフランススカはひとつ大きく頷いた。

もう仲良くなってやがる、と言わんばかりにグラムはため息をついて二人にシートベルトの確認もせずアクセルを踏み抜いた。

0 - 5 (後書き)

次回更新：12月13日を予定しています。

二日後。

オリンピックドーム中心にある射撃場に大勢の人間が集まっていた。

そこは『射撃場』という存在であるものの、やけに広かった。きつとかつて行ったショッピングモールに近い面積であろうことはサリドの目視でもだいたい解ることだった。

射撃場はスタジアムのようになっており、二階席、所謂観客席である場所、にはフィールドにいる人間の関係者というのは明白だった。

サリドは携帯端末をいつものように弄くってはいなかった。きつと入場時に係員から没収を喰らったのだろう。

そんなサリドは今、表紙に可愛らしい女の子をあしらったものを読んでいた。

「あれ？ サリド、そんなの興味あったっけ？」

「ん？」サリドはグラムの話を聞いて指されている表紙のグラビアを確認する。

「ああ、これは表紙詐欺だよ。中身はちゃんとした特集」

サリドはそう言って半ばめんどくさそうに中を見せる。中にはでかかとしたゴシックで『世界トライアスロン特集！！』と書かれ

ていた。

「これを読むと結構面白いのが書かれててね。世界トライアスロンは今年で10回目なんだってさ」

それをはじめに、サリドはどんどん話をつづけていった。

サリドが言ったことを要約するならば。

世界トライアスロンは10年前にレイザリー王国が企画したお祭りである。

銃も、剣も、ヒュロルフチームも、用いない。まさに平和の祭典、である。

競技は全部で7つあり、トライアスロンというよりは総合体育大会のほうがベクトルが強い。

水泳、マラソン、射撃、弓道、砲丸投げ、体操、自転車レースの7種だ。これは固定されて毎年同じ競技をするわけではなく、各国の代表が協議して決めるのだとか。

そんな『平和の祭典』ではあるが、やはりそこは今の世界である。競技者が狙撃され、そのまま戦争に発展してしまうことも有り得るのだ。

この世界トライアスロンの競技者はヒュロルフチームのパイロット、ノータであることはルールブックに記載されており、それは守

らねばならない事実である。

ノータは各国の最高級VIPで国に拠っては最高権力者よりも守るべき存在であるところもある。

即ちその人間が狙撃されるということは、仮にダメージを負わなかったにせよ他国からの攻撃を受けたことに等しい。

世界トリアスロンは各国どうしの不可侵条約の下成り立っているが、所詮それも只の紙切れであって、それで安全が完全に保証されている訳ではない。

だけでもそれを言っている状態ではオリンピックアドームへの観光客が見込めないため、資本四国は連合軍を形成し、その治安を守っているのである。

グラムはサリドから聞いた話にしばらくうなずいていたが、そのうちにそれすらもやめてただなにか難しい物事を考えているような表情へと化した。

「……つまり、最高級VIPを平和の祭典に出させることにより世界の平和を再確認させる、ってことか？」

「そーいうこと。ま、今はそれも無くなったみたいだから余り心配しなくていいんじゃないかな。備えあれば憂いなしだけでもね」

サリドはそう言って雑誌を閉じる。

グラムはそれを見てしばらく不審に思っていたのだが、

刹那、射撃場を揺らす程の歓声が、射撃場自身に溢れた。

「うおっ……！ 始まったか！！」

「毎年見るけど相変わらずすげえなあ。なんてったって世界中の人間が溢れてるんだろ？　これが“平和”ってやつなのかねえ」

そう言っただラムは先ほど買っておいたドリンクを飲むことにした。

「ついに、始まりました〜！」

直後にマイクで拡声された女性の声が会場に響いた。

「わたくし、今回の実況と進行役を務めさせていただくレナ・ポールウェルトですっ！ この二週間宜しくお願いしま〜すっ！」

レナの言葉の後、会場を何故か先程よりも大きな黄色い声援で包み込まれる。

「なんだありや……。すごい人気だな……」

今度はサリドが驚く番であった。そして今度はグラムが意気揚々と説明を始めるのだった。

「なんだ？ 知らないのか。ありや、資本四国一のアイドル、レナちゃんだぜ。彼女が動くとそれこそ金が動くって言われてる。今の資本四国のテレビは彼女がいなきゃ成り立たないだろうな」

「……なんだい。グラムって意外とミ〜ハーだったのか？」

「なんかお前に言われると心底腹が立つな」

グラムはそう言って再び会場を観る。

「それではっ」

レナはそれを持つのに抵抗を示さなかったのだろうか。拳銃を持っていた。

もう古い拳銃だ。かつて警察という治安維持を目的として設置された組織が愛用していたもので、警察廃止後、おもにヒュルファームによる戦争が認められてから、その拳銃は使い物にならなくなっていた。

しかし、むしろそれを見てサリドは疑っていたのだ。

今やあの拳銃は治安維持のためではなくむしろその逆に使われてしまっている。

URUという組織を知っているだろうか。

正式にはUnderground Resistance Unionと呼び、その頭文字をとったものである。なるべく単語に近い訳し方をするのなら『地下抵抗連合』とでも言つべきだろうか。

それらはかつて使われていた所謂『文化の遺物』を用いる傾向にある。

彼らの目的はあまりよく解ってはいない。

だからこそ、各国もURUの動きに慎重になるのである。一つの誤った働きが彼らに好影響を与えては困るのだ。

「第十回世界トライアスロン、開幕ですっ――！」

刹那、レナが拳銃を構えた腕を高く掲げ、三発ほど銃弾を撃った。

それを合図と言わんばかりに射撃場まわりから花火が何発か空に咲いたのだった。

恐るべきことに、初日はこれで終わりである。

「意外とゆるいスケジュールなんだな……。次の競技は明日の午後2時からだとさ。つまり丸一日休みってわけだ」

サリドがグラムの言葉を聞いて携帯端末の時計を見るとまだ午前1時を過ぎたばかりだった。

「あ、フランススカが出てきたよ？」

サリドが言ってグラムは振り返る。そこには確かにフランススカはいたのだが、

そこには他の別の人間もいた。

なんだか軽い口論をしているようである。

「だーからっ！ あんたからぶつかってきたんでしょ?!」

「違うよ。僕はただ適当に歩いていただけさ……。ぶつかったようなら謝るよ」

「おいおい、二人とも一体何をしているんだ？」

二人の口論にサリドが言葉を入れる。

「君は……、彼女のボディガードかい？」

フランスス力ではない方が、小鳥の嘴のような小さな口から爽やかな声を紡ぐ。

「ええ……。彼女がすいません」

「いや、僕の方も悪かったよ。……時間もちょうどいい。一緒にお昼でも如何です？」

少女はちょうど胸のあたりまで伸ばした茶髪をかきあげ、言った。

彼女の髪は茶というよりはブロンドに近い。オレンジ色のノータ専用軍服も彼女にとってはまるでファッションショーでモデルが着用しているような、ドレスに見間違えてしまう程であった。

「……なにか？」

じろじろ見ているのがバレてしまったのか、彼女は少し苛ついていくようにも見えた。口をへの字に曲げ、なにか言いたげでもあったが……それは彼女の姿形を鑑みてなぜか可愛く見えてしまうものなのであった。

「あ、いや……そうですね。しかし、あなたのお供は大丈夫なのですか？」

サリドは、訝しげに彼女にたずねた。

「お供？ ……ああ。ボディガードのことですか？ 彼らなら何の心配もしないでしょう。むしろ僕が居なくてせいせいするくらいでしょうし」

「そうですか？　しかしこれは不可侵条約を違反することにも……？」

「オリンピックアドーム理事局は不可侵条約なぞ只の紙切れだと思つてますよ。それに我々は“互いの利益を尊重し合うために結成”された資本四国の一員ではありませんか？」

資本四国の目的は彼女が言ったように“互いの国の利益を尊重し合うため”に結成された組織である。

まずはレイザリーとライバックがしし・ウェイロック条約を礎とした軍事条約同盟の締結を行った。

そしてそれにライアニア、シャル・ニユが参加して現在の形になったとされている。しかしその後の参加国は増え、結果として現在は7か国ほどあるのだが。

「……わかりました。では、お名前をお聞きしたいのですが？」

「ロゼ」短く告げ、「正式にはロズベルグ・アーケンド・リボルテイーなのですが、長いのでみなロゼと呼びます。それで結構です」

少女、改めロゼは笑って言った。

なぜか彼女が薦めたお店は懷石料理とかの高級店……ではなく一般人も訪れるような純和風の定食屋であつた。

「僕はこういうのが落ち着くんですよ。それでも祖国に行くのごてごてとした高級感満載のものばかりなんですけどねえ」

そう言つてロゼはオレンジのトレーをひとつ取り、そこに小松菜のごま和えが入つた小皿を載せた。

今、彼女たちは完全にオフということもあり私服になつていた。

サリドはポロシャツにジーパン、またいつものウエストポーチも装着している。

グラムはちよつと派手なアロハシャツにハーフパンツにサングラス。少し浮いてる感じが彼らしい。

ノータの二人も彩り豊かな服装であつて、しかし彼女ら二人の服装は両極端でもあつた。

まず、フランススカから見るとボーイッシュな服装だつた。クリアム色のチノパンにグレーのシャツ、それにチャックの着いたパーカーを着ていた。

それに比べるとロゼはとても年頃の女の子のような格好をしていて、薄ピンクのブラウスに白のジャケット、オレンジのスカートに黒のニーソックス、ハイヒールといった感じだ。なんとなく、遠くから

見ると二組のカップルが仲睦まじくご飯を食べているようにしか見えないが、それは置いておくこととする。

サリドたちが一通り食べ物を選び終え、会計を済まして、混み合う店内を眺めた。

「こいつは混んでるなあ……。座るとこなんてないぞ」

これはまさかの立ち食い（テーブル無し）のテラス席かと思っ
たが、

「なんだ。お前らじゃないか」

不意に後ろから聞いたことのあるような声がかかり、振り返る。

そこには、

「……リーフガット……さん？」

「ああ。……で、お前らどうした？ 席が空いてないと見てとれるが」

リーフガットの言葉にサリドは頷いた。

「それなら、私が食べてる座敷の方にこい。あそこなら人気もなく疎らだからな」

そう言っ
てリーフガットはすたこらと歩いていった。とりあえずサリドたちも後を追うことにした。

座敷は和風マニアのリーフガットなら大層喜びそうなものばかりだった。

全面畳敷き、掘り炬燵に座布団、茶室まであるのだとか。

そんな部屋にサリドたちはリーフガットに連れられ、やってきた。

「……ほんとに人が居ないですね？」

「あんまり声を大にしては言えないけどここは物好きしか来ないからねえ」

リーフガットは少しだけ声のトーンを下げて、言った。

「……そういえば、なぜ別国のノートがいるんだ？」

リーフガットは不審に思い、尋ねた。

「申し訳ございません。僕の方からお呼びしたのです」

謝ったのは口ゼだった。

「……名前と所属を」

「ロズベルグ・アーケンド・リボルティー。所属はシャルーニユ公国です」

「……なるほど。失礼しました」

名前を聞いて安心したのか、リーフガットはお辞儀する。

「……さ、食べよ。冷えてしまうし」

そんなことを言い出したのはフランスス力だった。

「そうだね。折角作ってくれたものを食べなきゃ。勿体無いもの」

そう言っただけでサリドは手を合わせる。

それを見てみんなも手を合わせる。なぜか完食したリーフガットもだ。

「「いただきます！」」

一斉に言い、サリドたちは食事を始めた。

1 - 4 (後書き)

次回更新：12/15予定

(12/15は諸事情により更新ができない恐れがあります。もし
かしたら12/16にずれ込む可能性がありますが、予めご了承ください。)

サリドたちが食事をし終わったのは午後2時を回ったあたりだった。あんなにロゼに対してぶつくさだったフランススカも、

「そういえば……栄養管理のことをとやかく言われたりしないの？」

「僕はなんでも独りでやりますから……。やろうと思えば料理だって出来ます」

これくらいの会話も出来るように打ち解けていた。

「そういえばフランススカさんは家族は？」

「……フランススカで良いわよ。だから私もロゼと呼ばせて」

「わかりました。ではフランススカ。家族はいるのですか？」

「結局その質問なのね……。ええ、兄がひとり。父はあの事故で死んでしまったから兄だけが唯一の親族、かしらね」

「家族がいるっていいことですよねえ」

ロゼは楽しそうに笑う。そんな彼女の笑みはご飯茶碗よりもワイングラスの方が似合う気もした。

「……どういうこと？」

「いやあ、お恥ずかしい話ですが、僕は実は現在の王子の異母弟妹なんですよ。父は現シャルーニユ公国国王。母はそこに仕えるしかないメイドでした。……彼は母に恋をして、そして僕が生まれた……。もつともそのころは跡継ぎの論争が激しく、僕は彼から捨てられました。……しかしノータの選出はDNAの検査で行う故に僕だけが選ばれました。まったく、皮肉なものですよね。国王から捨てられた僕が、今や国の最高級VIPなのですから」

場を沈黙が支配した。

「……あの、こんなこと、聞いてごめんなさい」

フランシスカは小さくお辞儀をして謝る。

「いえいえ、元はと言えば僕が話を切り出したからですよ。あなたは悪くありません」

そう言つてロゼは笑つた。まるで、それは天から地を眺め、微笑む天使のようにも見えた。

「さあさあ、とりあえず二人とも、これからどうする?」

サリドが話を切り出した。

二人は同時に首を傾げた。まるで、どうするって? と言いたいばかりに。

「さつきロズベルグさんの方のボディーガードに確認を取つたのよ。こちらで行動を共にさせてもいいか、ってね。そしたら快く許可してくれたわ」

リーフガットが今は古い形態である折り畳み式の携帯電話を、ポケットに入れて、言つた。ポケットの外から出た湯呑みを象つたキーホルダーが揺れる。

「……、」

「じゃあ、一緒にどこか回らない? ロゼ」

二人の反応は両極端であつたが、ロゼはフランススカの発言を聞くと、我に返つて、

「あ、ええ。それもいいですね」

ロゼは堅苦しい言い回しで言った。何処と無く忙しない感じがしたがそれがフランスス力以下に気づくことはない。

「じゃあ、六時までに帰ってきてね。それから、トレーニングや調整を行うから」

リーフガットの発言に二人は頷いた。

さて、

「とりあえずどこに向かう？ ロゼ」

「そうですね。ウエストエリアでカーニバルをやっていますが、そちらに行きますか？ それともセントラルターミナルの海底トンネルに行けばそこでしか見れない魚が見れますよ。もしくは……」

「ストップ。ロゼ」

フランスス力から停止命令が出てロゼは訳が解らないながらも、言葉の砲撃を停止する。

「どうしました？ 体調が悪いですか。確かにこの頃はお腹が痛くなるけど」

「黙って。そうじゃないわ」

「……？」

「……、まあ、とりあえず、セントラルターミナル？　だっけ？
にある海底トンネルに行きましょう。何処に行くかはそれから考えるわ」

フランシスカはそう言ってロゼと手を繋いで歩き出した。

ロゼがあまりよくわからずフランシスカの顔を見ると頬が紅潮しているのが見てとれた。

「……な、なによ」

「友達が、居なかったのか？」

「……、」

ロゼの言葉にフランシスカは小さく頷く。

「今まで友達なんて出来なかったから……。私は今まで研究所にいたし、そういう学校に通ってた。それに気づいたらもう私はヒュロルファームなんていう人造人間型兵器に乗せられていた。名目上は人間だけど、そんなわけではない。あれは“バケモノ”よ。あれを人間と呼ぶ方がおかしいわ」

フランシスカは泣きそうな目でロゼに訴えていた。

「そんなわけではない。あれは立派な発明だよ。今まで人間程の大きさにしか作れなかったロボットが、50mのものになるんだもの。ヨシノ博士　君の父親が産み出した“それ”は世界を画期的に変えたんだ」

「違う」フランシスカは小さく横に首を振って、

「そんなわけではない。例えヒトがどんなに綺麗事を並べたってあれは兵器にしか他ならないわ。あれが内部爆発を起こしたら主要なエネルギー源としてるプルトニウムが原子炉から漏れ出してしまっわ。炉心熔融を起こしてしまうかもしれない」

「いいかい？」ロゼはフランシスカの肩を持って、

「確かにそうなってしまう可能性もゼロではない。でも、そういうマイナスばかりを考えると何も進歩はしないんだ。だって、そうだろう？　人間の少なからず大きな犠牲によってそれ以上に利益をもたらした大きなものが産み出される。まさか、君はこの世界が何の犠牲もなく今まで成長し続けた、とでも思っているのかい？」

ロゼの問いにフランシスカは答えない。

「……こんな話はやめにしよう。今はデートの場なのだから」

ロゼはひとつため息をしてフランシスカの手を握り返した。

「ええ。そうね」フランシスカもそう言って彼女の手を握り返した。

セントラルターミナル。

名前の通り、オリンピックピアドームの中央に位置し、まるで深いスープ皿を交互に載せていったようなそんな形をしており、ターミナルと名前が付いているから解ると思うが、ここは他の国とを結ぶオリンピックピアドーム唯一の空港である。

しかし全てが空港というわけではなく、滑走路、今の飛行機は滑走路が殆ど必要ないタイプになっているのだが、として使っているエリアは上の僅か10エリアに過ぎない。残りのエリアは所謂お土産屋やアミューズメントなどの興業施設となっていて空港自体はそれで収入を得ている。

「うわぁ……広いわねえ……」

「別に僕は広くは感じませんが……。レイザリーにもこの程度、いやこれ以上の設備が為された空港があるはずでしょう？」

ロゼの言葉にフランスス力はため息をつきながら首を横に振る。

「それがさぁ……。本国の方のボディガードが飛行機の時間を一時間勘違いしてたみたいで。私のプランだったら一時間は空港をぶらぶらと巡れたんだけどねえ……」

「アハハ。でも今回は制限はありませんよ。こんな僕で宜しければ

エスコートしますが？」

ロゼは笑って、フランススカの掌を再び強く握った。

先程ロゼとフランシスカが話していた海底トンネルはそのセントラルターミナルの地下に存在する。

トンネル、といってもある場所とまたある場所を繋いでいるようなのではなく寧ろアトラクションに近い。海底をただ決められたコースで一定時間めぐれるというどちらかといえばカップル向けの施設だ。

なので、その場所もその時も男女のカップルが沢山来ており、なんだかここだけ異空間のようにも見てとれた。

「二人分お願いしまーす」

「はいよ。7000ムルね。……もしかして友達かい？」

受付の女性が三枚の硬貨を受け取り、次いで変わりにチケットを二枚渡す。

それを受け取り、フランシスカは愛想笑いを浮かべた。

チケットを買って、フランシスカはロゼのいるところに来てきた。

「フランシスカ。私がエスコートすると……」

「ごめんなさい。なんだかやってみたくなっちゃって……。さ、行きますよ?」

フランスカはチケットをロゼに渡し、また愛想笑いを浮かべた。

十

海底トンネルを進むための潜水艦は二人乗りの小さなものであった。黄色のミニクーパーのような形をしていて、この特徴的な潜水艦の形もここが有名スポットである理由のひとつだ。

二人はそれに乗り込み、ロゼが操縦桿を握る。

グオン、と鈍い音が響いて潜水艦はゆっくりと潜水を始めた。

「綺麗ねー」

フランスカは剥き出しになっている大きな窓を通して海の中を眺めていた。

風景は思った以上に鮮やかだった。エイにヒラメ、クラゲにイルカといった普通の魚からこの場所が熱帯に位置しているからか熱帯魚も多く見られた。

「ほら、あそこ。いそぎんちゃくの中にいるの、なんて名前だったかな」

「ロゼ、あれはカクレクマノミよ。あのオレンジと赤の縞縞模様は多分、そうに違いないわ」

フランススカとロゼはそんな他愛もない会話をして、
ふと、気付いた。

「フランススカ。後ろから何か見えませんか？」

ロゼがあくまでも丁寧にフランススカに尋ねた。

「……いや？ 何も見えないけど？」

「……シートベルトをしてください」

ロゼは冷たい、感情もない声で言った。

「え？ ええ……」フランススカは動揺しながらもロゼの言う通りにする。

刹那、ロゼが操縦桿をおれそうなほど力を込めて左に曲げた。現に
ミシミシという音を立てているのだが。

「き、きゃあっ」

小さい悲鳴が聞こえ、ロゼは、

「掴まって!!」

そう言ってさらに今度は右に操縦桿を曲げた。

「な、なにを……！！　コースから離れちゃったよ！」

フランススは半ば冷静に状況を判断出来なかった。

「後ろから敵がやって来ます！　急がねば……！！！」

ロゼの言葉にフランススは驚いて窓から外を見て状況をなんとか知ろうとする。

しかし、見えるのは透き通った海だけだった。

「……やっぱり見えない！！！」

「困りましたね……。敵の姿が見えるならまだ対策は打てるのですが……、このままじゃ打ちようがない！」

「じゃあー！」

「とりあえずADAでこの潜水艦は完璧に操れるのですが……、問題はどう敵を交わして元の地に戻るか……」

「ロゼ、どいて」

フランススは気づくとシートベルトを外し、ロゼの方に来ていた。

「フランスス、なにを……！！！」

「いいからどいて」フランススカはさつきと変わらない、淡々とした口調で述べたのち、言った。

「私にいい考えがある」

十

その頃、フランススカたちを追っていた潜水艦は困惑の色を隠せな
いでいた。

何故ならば。

「何故だ！！ 何故あいつらは岩壁の中に潜り込むように消えてい
ったんだ！！」潜水艦のリーダーであったアーケオス・サンタディ
アゴは言った。

「ふう……。なんとか撒いたわね……」

フランススカとロゼを乗せた潜水艦は小さい洞窟の中を巧みに動い
ていた。

「まさかこんな抜け道があるとは……。なんで知っていたのですか
？」

ロゼはフランススカに尋ねる。もう危機も脱したのでシートベルト
は外している。

「ここはもともレイザリー軍の基地ですからね。軍用の抜け道も

用意してあるんですよ」

フランススカはなんとか事態を脱却した、とため息をつく。

「ところでこれは何処まで続いているんですか？」

「う、うーん……。えーと……確かセントラルターミナルの使われてない古倉庫に出る……と思ったけど」

フランススカはただどしく言った。その感じでは本当にどこに出るのが曖昧なのだろうか。

「まあ……いいでしょう。とりあえず武器は……」

ロゼは辺りを見渡す。

「ロゼ、あんまり見てもないと思うわよ。私もさっき見たときなかったから」

「そうですか……」フランススカの話を聞いて、ロゼは深いため息をつく。

「ならば、仕方ありませんね」

そう言ってロゼはスカートの裾を思いっきり持ち上げた。その中にあるピンクのパンツが見えてしまうほどに。

「なにを……？」

フランスカはその風景を怪訝に思っていたが彼女の太股にベルトで接着されていたそれを見て、息を潜めた。

小型の拳銃だった。

「どうしてそんなものを……？」

「いいからさっさと行くよ。仮にあいつらが敵国のスパイだったら捕らえられて何されるか堪ったもんじゃない。なら倒した方がマシさ」

ジャキツ、と冷たく鈍い音が潜水艦の中に響いた。

「いいかい？　ここはもう平和の祭典を行う平和な場所なんかじゃない。戦場なんだ。しかも今まで水面下で巧みに動かれていた、それほどの力がある、ね」

そう言っただけでロゼの顔は笑っていた。

逆境を、楽しんでいたのだ。

「……行くよ」

ロゼはそう言っただけで片方の太股に装着されていた拳銃をフランスカに投げ渡した。

潜水艦から這い出てフランススカたちがひとつに思ったことはこの異質なコンクリートである。

フランススカたちを大きく囲むようにあるそれは彼女の頭の中にある情報と差違を生み出す。

「地図ならここは古い倉庫だったはずなのに……?!」

そう。

その、二人を囲むコンクリートは古い倉庫にしては、とても新しすぎたのだった。

「仕方ないですね……。倉庫として通用しない。何があるかもわからない。そんな場所、でいいですね?」

ロゼはそう呟いて、振り返ろうとした。

その時だった。

ガギザザザ!! と上からナイフの雨が降り注いだ。しかしそれは綺麗にロゼの体を傷つけないようにもなっていたが。

しかし彼女が着る服装は別だ。彼女が着ていたジャケットやスカートはスタスタに切られ、裸体が露になっていた。

「ロゼ!!」

フランシスカは叫んでロゼに近付こうとする。

「近付くな!!」

ロゼは思いきり叫んでフランシスカを制止した。

なぜならまだナイフの雨は止んでいないからだ。そのまま飛び込めば彼女は串刺しとなり確実に絶命することだろう。

しかし、不思議な点がひとつだけあった。

それは、そんなにナイフがまるで雨のように降っているのに、天井には傷ひとつついていない。まるで天井からナイフが“生えてきた”ようだった。

「……スカートを穿くんじゃなかった。可愛さを追求した結果がこれですよ?」

ロゼは自分自身を指差し、自嘲するように笑う。

そして、

「自惚れるなよ。見えぬ敵。絶命させるまでその身を打ち砕いてやる」

ロゼは低く、冷たい声で言った。

「ご心配なく。傷付けるつもりは毛頭ない故」

敵の声は予想外にも、目の前から聞こえてきた。

敵の姿はこちらからはよく見えなかったのだが、その雰囲気でロゼは感じ取る。

「……神殿協会か」

「……、」

しかし声は答えない。

「答える。さもなくばこのショットガンでお前の体を撃ち抜くぞ」

「……私は神殿協会枢機卿、レイシャリオ・マイクロツェフです」

「……で？ その神殿協会サンが何の御用で？ まさか平和の祭典に茶々入れに来たのか？」

「……半分は、合ってますね。……でも、もう半分が足りない。それを言うこともないし、その義理もない」

そう言つて影はゆっくりと振り返つて立ち去り、周りの影と同化していった。

「……神殿協会、か。本物でしょうねえ」

フランススカは先程降ってきていたナイフを一本取り出す。ナイフの雨は気付かないうちに止んでいたのだ。ちょうどレイシャリオと名乗る人間が現れたあたりから。

「……『Oppland security』……オプグランドセキュリティ社。神殿協会御用達の兵器店よ」

フランススカは言った。そしてナイフを丁寧にハンカチでくるんでしまった。

ロゼはとりあえずフランススカの着ていたパーカーを着ることにした。このまま行くことも十分考えたがフランススカがそのままでは周囲の目を惹き怪しまれるという判断をしたためその結果となった。しかしそれでも彼女の下半身は傷ついているのでアングルによつては見えちゃまずいものが見えてしまう。なので彼女は今不機嫌なように取り繕ってパーカーのポケットに手をつ込み、思い切り引張ってなんとかそういうものが見えるのを防いでいた。

「……もう時間も頃合いですかねえ」

フランススカがあくまでも自然な感じに言った。

「……、」

ロゼは何も言わずに頷く。

「とりあえず、戻らなくちゃならない。あなたは何階かしら？」

フランスカはロゼに尋ねる。

「……僕は28階ですよ」

「じゃあ一個上じゃない！ 私は27階だもの！」

「そうですか……。近いと何かと便利だから助かります」

ロゼは痛みを感じるのかすこし辛そうに笑って言った。

1 - 1 1 (後書き)

次回更新：12/22予定。

「なぜ、それを報告しなかったんだ？ フランシスカ。それほど逃げていたならば私達に連絡くらい出来ただろう？」

マンシヨンの自室に戻り、フランシスカが事情を話すとリーフガットは第一声にそう言った。

「でも……」

「でも、じゃないわ」

フランシスカの言葉を遮るようにリーフガットが咎める。

「確かにあなたは多くの人間を救ったヒーローよ。でも、今は違う。今はこの『世界トリアスロン』の参加者であり、プレイヤーなのよ？ 貴女のために多くの人間が協力しているし、貴女が傷ついたりして思った成績が上がらなかったら私達の責任になってしまう」

つまり。

「あなたを中心にこのチームは存在しているのよ？ あなたがいなかったらこのチームは空中分解を起こしていることでしょう。それに、世界トリアスロンは平和の祭典、なんて簡単なものじゃない。銃撃による妨害で死んだ人間だっているし、それによって戦争が始まったりした。あれは戦争のいい理由になりうるものなんだよ。それは……わかってるよな？」

フランスカはリーフガットの言葉に小さく怯えているかのように頷いた。

「……じゃあ、とりあえず練習をしましょう。今からコースの先見でもしたらどうかしら？」

リーフガットは先程の真剣な面持ちとは異なり、顔を綻ばせて言った。

そのころ。一個上の28階。

フロアーはフランスカの部屋とは異なり質素だった。強いて言うならば、何もない。ソファーもテレビもパソコンもないのだった。

ただ雑然とした空間で、一人の少女が、空を眺めていた。

彼女は何も身に纏ってはいなかった。下着すらも、彼女は着けていなかったのだ。

月を見て、彼女は笑う。LEDの屋内灯も点いていないこの部屋の唯一の光源は月明かりだけだ。カーテンを開いて、部屋全体に月明かりを取り込む。

彼女はとぼとぼと歩き、彼女の生活スペースと化しているダブルベッドに腰掛けた。ベッドの脇にはゴミ袋がありその中にはボロボロに破れた服らしきものと血に汚れたベッド用シーツが入っていた。

彼女は小さく鼻歌を歌いながらベッドに置いていた携帯端末を手に取る。

そして、ロック画面を見ると音声通信ソフトの通知を知らせるメッセージが見えた。

彼女は不審に思いながらもそれを見る。

通知は着信とメールだった。それはどちらも同一人物をさしっていて、それは彼女が今日半日一緒にいた人間のことであった。

「……、」

彼女はメールの内容を見て立ち上がり、シャワールームに向かった。

素早くシャワーで体を洗い、綺麗なのかあまり保証できないタオル、なんだか緑色のなにかがついついている、で濡れた体を拭き、“なぜかそれだけが別の空間にあるようなくらい綺麗にされている”オレンジ色のノート専用軍服を手に取り着用し、携帯端末を持って扉を閉めた。

一日目の競技は水泳である。

6 k m 近く離れている浮島まで泳ぎ、そこを往復 およそ 1 3 k m の遠泳コースである。

「しっかし初っぱなから水泳とはねえ。明日以降に耐えられるのか？」

グラムは少しだけ眠たげに言った。話を終えたあとに欠伸をしたのがその証拠である。

「グラム。たしかノータは知識と筋力を兼ね備えているらしいよ？それに世界トライアスロンの日程にこんなに余裕が出るようになったのは去年あたりからだよ。その前は毎日やってたらしいから」

「こんなの毎日やってたら普通の人間なら疲れて死ぬぞ？」

だから、とサリドはあえてそれを加えて、

「それがノータが“バケモノ”と呼ばれる由縁なんじゃないかな？」

ヒュロルフチームの事故は必ずといってよいほどノータも共に攻撃をくらうことが多い。

なぜならばヒュロルフチームはあくまでも人間で言うところの、脳のない赤子に近く、ノータ 即ち操縦し、管理するもの がない限りヒュロルフチームの本能のままに行動する。しかもう使

われて10数年も経つというにヒュルフタームには解らないことが多すぎるのだ。

「第一、ヒュルフタームの生みの親であるヨシノ博士がどうやってヒュルフタームを作ったか詳しい概論を発表しないまま死んでしまったからね。その後遺された書類や設計図を見てもどういうことかわからない。なのにヒュルフターム自体は作ることでは可以从容面白いもんだよね」

「詳しい概論を発表しなかった？　どういうことだ？」

「ヨシノ博士は資本主義国の人間にしかヒュルフターム概論を発表されないことを知り、全世界に発表しようと亡命を謀ったんだ。大分昔に言ったかもしれないけどヒュルフタームはもともと人間は行動し難いことを出来るようにするための強化装備パワードスーツみたいなもので平和的に活用するつもりだったんだけどね」

「それが今や戦争の代名詞、か。世界つてのはほんとどう転がるかわからないもんだよねあ」

グラムは煙草を吸うような素振り、あくまでも注記しておくと彼はまだ16歳の未成年であるのだ、をして言った。

「さあ！ 一日目の本日は『水泳』です！ 総距離13・047kmのこのコース、今回は都合により彼方に見えるハテノ島がゴールとなります！」

海に浮かぶクルーザーに乗るのは、昨日いたレナであった。たぶんもともと声量がないのだろう。時たま声が裏返りながらも懸命に役目を果たしているのは、やはり彼女も彼女でアイドル魂というのがあるのだろうか。

「おつ、始まるみたいだな」

ブランドものの黒いタートルネックに、ジーパンを着たリーフガットは海を一望出来るテラスにやってきていた。

ちなみに今回彼女は完全に非番で20代最後の夏を楽しむためにやって来たんだとか。エンパイア家と言えば伯爵の爵位を持つ大変立派な家系なのだがどうしてこうなったのか。理由はいくつもあって話し尽くせないだろう。

「あいつらはこの中応援かー」

リーフガットは昼からよくあるメーカーのビール缶を開け、一口うまそうに啜る。

「……ま、彼女がいるから大丈夫か」

リーフガットは口から漏れ出したビールを口で拭き、テラス脇に設

置したアンティーク調の木の椅子に座った。

そのころ、サリドとグラム。

「このクルーザーで行くのか……？」

「うん。そうだね。一応僕達は主催国の代表扱いだから、このクルーザーを貸してもらったんだよ」

「……サリド、お前運転、」

グラムが言い切る前にサリドは、

「出来るわけないじゃん。僕は運転免許を持ってないし、第一未成年だし」

「だあーっ！！ 解った！！ 解ってるよ！！ どうせそういうと思ってました！！」

グラムはクルーザーなんて運転したことねえぞまったく、とか愚痴を溢しながら、クルーザーの中へ入っていった。

ふと、空を見上げると太陽が文句ありげにギラギラと輝いている。文句が言いたいのはこっちだ、と言い返したかったが、

「操縦は私に任せて下さいな」

ふと声が掛かり、その声のする方を見た。

そこは甲板から少し出っ張っているところ。俗に云う“操縦席”のところだ。

グラムは顔を見ようとする。しかし、空が眩しくて何が何やら解らない状況だった。

「……自己紹介は顔と顔を見たほうがいいでしょう？ とりあえず上に上がってきてください！」

女はそう言って、また操縦席の方へもどっていった。

「私は、ライズウェルト・ホークキャノン、と言います」

開口一番、その操縦席にいた女性は色々な機器をまるで出鱈目にボタンやらなんやらをつかって調整しながら言った。

「ホークキャノンってまさか……」

サリドがライズウェルトの名前を聞いて、ハッと思い出した。それと同時のことであったが、

「姉さん?!」

後ろから誰かの声が聞こえ、振り返ると、フランススの健康管理担当であったラインスタイル・ホークキャノンが驚愕の表情を浮かべていた。

「なんで姉さんが……? 今はまだ戦争中じゃ……」

「いやあ、私もよく解らないんだけどね? どうやら世界トライアスロン開催中は世界中の戦争はお休み。また開催時期前後二週間に行われる行事は休み、みたいで。まあ、結果として私がここに駆り出されたわけ」

ライズウェルトは意外と小さな、触ったらふくらみが把握出来るくらい胸に手をあて、言った。

「毎回思っけど姉さんは然るべきところが成長してないわよね……」。

顔はいいのに」

「余計なお世話よ。ラインスタイル」

ライズウェルトは少しだけ声を荒げて言った。

「さてと、そろそろ追い掛けなくちゃね。もう競技開始から20分は経ったわよね？」

ライズウェルトはそう言うと足早に操縦席に戻り、操縦桿を握る。

「いつくわよー!!」

そう言うつと。

船は水飛沫を上げ、恐ろしいほどの、まさに電光石火と形容するに相応しいほどの速さで大洋に消えていった。

そのころ、フランス力は海を泳いでいた。因みにはあるが、競技の服装はノータの服装 すなわちヒュロルフタームパイロットスーツ を着なくてはならない。それは義務である。

だから今ではノータの服装にいろいろとスポンサーの名前が描かれていたりしている。

しかしひとつ疑問が生じてしまう。

それは『資本主義国以外は誰が出場しているのか?』ということだ。

答えは簡単で、ただ実力者のみが出ていることになる。

社会主義国、特に神殿協会や大神道会などはヒュロルフタームの戦争運用に反対している。

何故ならば、彼らの信義とは人と人が戦うのはいいが、その代行者として人が決して適わない存在と戦わせるのは残虐かつ非人道的な行為である、と述べているのだ。

しかしそれを資本主義国がまともに聞くことはなく、今現在も戦争にヒュロルフタームが用いられているのだった。

現在フランス力は中継地点である群島の脇を泳いでいた。

ノータ ヒュロルフタームという人造人間兵器のパイロット
とはいえ、元は人間だ。体の仕組み上、限界が存在する。

「……バカめ。あんなところで休んだら体力が持たないだろうに」

フランシスカは呟いて後ろに見える群島を一瞥して言った。

何故ならあの群島、実際には小さな岩に一つの人工的に形成された
島がぽつんとあるだけだが、はもともとの中継地点で、ちょうど彼
処で半分となる折り返し地点だった。

だから一度そこで休んで、休むといっても水からは出ないで呼吸を
落着かせたりするだけだが、また半分の距離を泳ぐのだった。

「……全くだよ。どうしてあの人たちは彼処で休むのかな？ 僕に
はまったくわからないよ」

「……ロゼ。いつの間に？」

「いやあ？ 僕はずっと君の後ろに気味が悪いくらいぴったりとく
っついてただけだよ？」

ロゼは泳ぎながらも言う。よく考えると、この二人は水で泳ぎなが
ら話をしているということになる。常識的に考えるとさっぱりよく
わからない。これがノータなのだろう。

「……ほんとノータってやべえな。あいつら口動かしてるってこと
は、喋ってるってことだろ？」

その向こう、クルーザー用コースを進むクルーザーの上に乗っていたグラムは双眼鏡でフランスカの方を眺めていた。

2 - 4 (後書き)

次回更新：特に何もなければ来年1 / 4更新となります！

エブリスタ版は25 ' 26日お休みをいただき、27 ' 28日と更新、それが年内最後となります。

それでは皆様良いお年をお過ごしください。

あとがき更新しました <http://d.hatena.jp/natsumecho/20111223/1324644286>

「やっぱりさすが、って感じかなあ。肺活量も一般人と比べて尋常じゃないくらいあるんじゃない？」

サリドはやっぱりなんかの雑誌を読みながら缶コーヒーを飲んでいった。

「また雑誌読んでのか……。お前はほんとに好きだな」

「それは誉めているのか、貶しているのか？」

サリドはため息をつき、雑誌に棊を挟み、閉じる。

「ちょっと読むぞ」

「んー」

サリドはどこからか持ってきたイチゴ大福を頬張りながら言った。

「なんだよお前、俺にもよこせよっ」

そう言いグラムはサリドの右手にあったイチゴ大福を奪い取り自分の口に放り込んだ。なんとなくサリドが悲しげな表情をしている気もしたが、甘いものを独り占めしているお前が悪いんだ、とグラムは目で静かに言った。

さてグラムはサリドから奪い取ったイチゴ大福を食べながら、サリドが読んでいた雑誌を見ると表紙は何処と無くよく言う萌え要素が

これでもかと詰め込まれた女の子だった。

少しでも緊張しながら表紙を開くとページいっぱい文が書かれ、数ページ毎にイラストが描かれていた。

そう、これは世間でいうところのライトノベル雑誌だった。

「おい、サリド。これは……！！」

グラムはあまりの驚愕に絶句していた。

「まあまあ、別に僕がどんな雑誌を読んでも構わないだろう？」

「ま、まあ……、確かにな？」

グラムはそう言って雑誌をサリドの前に置かれている机に置いた。

そのころ、フランシスカはなんとかあと一キロをきったあたりまで泳いできた。しかも今までペースを崩すことはなかった、というのだから驚きを隠せない。

「……それに、ロゼも付いてきている……」

そう、別にこのペースを保って十キロも泳いできたのはフランシスカだけではなかった。

「どうした？ ペースが落ちてきたようだね？ あともう少しだからがんばって！」

フランシスカのすぐうしろにくっつくように一人の少女が泳いでいた。

ロゼ、だった。

彼女はずっとフランシスカをペースメーカーとして泳いできたのだから彼女のスタミナは未だに消費が少ないだろう。

汚いやつだ、とフランシスカは思った。

しかしこの場所は世界トライアスロン。言うならば“無血の戦争”と呼ぶべきこれはそういうずる賢いことをしていかなば、勝つことはできないのだ。

？

そのとき、だった。

不意にフランシスカの足を誰かが引つ張ってきたのだった。

フランシスカは一瞬困惑した。こんなことをできる人間は一人しか居ないことを解っていたから。

ロゼ。彼女がしたことなのか。フランシスカは一瞬そう考えたが直ぐにその考えを捨てた。彼女がそんなことをするわけがない。フランシスカはそう考えていたからだ。

「……なら」

いったい誰が、この所業をし得たのか。どうやらそれも一回で終わったのでとりあえず泳ぎのペースを取り戻す。

ロゼは何食わぬ顔でフランシスカにぴったりとくつつくペースで泳いでいた。

「……フランシスカ、なんかあったのか？　なんか苦々しい表情だぞ」

「さあ？　とりあえず彼女がゴールするまで関わるのは禁止されるから固唾を吞んで見守るしかないだけだねえ」

双眼鏡を使ってフランススカたちの状況を眺めるグラムにサリドは答えた。

「……妨害、という可能性は？」

「十分有り得るよ。だってこういう大会だ。もとはスポーツマンシップに則ってやってたけど今はそれを無視してもいいってのが暗黙の了解になってる。だから今や世界トリアスロンは“無血の戦争”とも呼ばれるくらいだしね」

そう言ってサリドはテーブルに置かれていたコーヒーを一口飲んだ。

水泳の結果は一目瞭然だった。

「第一位、フランススカ・リガンテ・ヨシノ選手！ 所属はレイザリー王国！」

司会のセリフとともに会場に拍手が沸き起こる。それを受け止めるかのようにフランススカは一礼する。

「第二位、ロズベルグ・アーケンド・リボルティー！ 所属はシャル・ニュ公国！」

次に第二位の名前が呼ばれ、その後拍手が沸き起こる。そしてさつきフランススカが行ったようにロゼも一礼する。

「第三位、アリア・カーネギー！ 所属は……」

フランススカは表彰台に立ち、金色のメダル、所詮こんなのは金メッキであしらわれた銀メダルだったりするのだが、を受け取っている最中も考え事をしていた。同時に二つのことを出来るとはなんと器用な人間であるか。

「……フランススカ」

「……、」

「フランススカ」

「……、」

「フランススカ！」

「う、うわっ！」

サリドから呼ばれようやくフランススカは我に返った。

「いったいどうしたってんだい？　ずっと考え込んでやって。体調でも悪い？」

「……いや、大丈夫。問題ない」

フランススカは何処かのゲームキャラが口にしようとした言葉を言っただけで、ゆっくりと歩いていった。

行間？

「……次の競技はいつ？」

マンションに戻りシャワーを浴びたフランススは濡れた髪を拭きながらサリドに尋ねた。

「えーと、明日の午後から射撃、そのあとに一時間の休憩を挟んで弓道というハードスケジュールだよ」

「言うほどハードでもない気がするが……。とりあえず明日は競技が二つあるってことだな？」

フランススはサリドに再び尋ねる。

「うん。それは間違いないね。射撃の開始時間は午後四時からだから、間違いないように」

「わかってる」

「あの……お二方話してるところ悪いんだけどさ……」

唐突に会話にグラムが割り入ってきた。

「どうした、グラム？」

「どうしたもこうしたもないだろ！！ どうしてサリドは部屋に平気に入れるくせに俺は食事以外部屋に閉じ籠ってなきゃなんねーんだよー！！」

「そりゃあんたが変態みたいに見えるからだよ」

「わーお、なんという一刀両断！ 俺のハートはもうボロボロなんですがつー！」

「そうしてもらいたいくせに。わかっているよ。それくらい」

「まさかの俺M認定かよ？！ 俺はそんなんじゃないつつのー！」

「まあまあグラム。フランシスカは疲れてるんだよ？ 少し休ませてあげなきゃ」

グラムを宥めるようにサリドは言った。

「……じゃあ一步譲って俺が静かになるよ」

「それでよろしい」

グラムが苦々しそうに呟くとサリドはにっこりと笑みをこぼして言った。

「……んじゃあ、今日もどつか出かけるのか？」

「そうね。夜の街も面白そうでいいんじゃない？」

フランシスカはタオルをテーブルに放り投げて、ソファにひとり腰掛けた。

フランシスカはひとりマンションの玄関前にいた。ある少女を待っているためだ。

「ごめんなさい。待ったかな」

その声を聞き後ろに振り返ると、そこにいたのはロゼだった。彼女はオレンジのパーカーに青のジーンズ、茶色の毛糸の帽子といった結構暖かそうな格好であった。フランシスカもみると黄色のジャンパーにクリーム色のチノパン、なんかの野球チームのマークがあしらわれた帽子をかぶっていた。どちらかといえば二人ともボーイッシュな格好をしていたのである。

「なんかその帽子暖かそう……」

フランシスカはロゼのかぶっていた帽子を見て半ば無意識に呟いた。

「かぶる？」

それを見かねたロゼは帽子を脱ぎ、フランシスカに渡そうとした。

「いいわよ。大丈夫」

しかしフランシスカはそれを手でロゼのほうに押し戻した。

「夜の街……といったって危険がつきものじゃありませんか？ テロでも発生したら……」

「大丈夫よ。なんせここは資本四国所属の最強のヒュルフターム軍隊が島を守っている。連合軍もあたりの警備にまわっているのだから、テロやクーデターなんて起きるわけがない」

「それはそれでいいんだけど……」

ロゼはフランシスカの話に多少の疑問を抱きながらも納得したかのように頷いた。

しかしながら、

何処でも夜の街は何処と無く不安になるものだ。

だからロゼもフランシスカも心の奥底で不安になっていて、その裏返しで強気な発言をしていたのかもしれない。

3 - 1 (後書き)

明けましておめでとうございます。本年も拙作をよろしく願います。

次回更新：01/06予定。

ナイトライティング。

オリンピアドームの北東に位置するそれは、昼間は普通の歓楽街……というよりはシャッター商店街のような感じであるが、夜はまるで別の街であるかのようにきらびやかなネオンに街全体が覆われ、まるでこの街だけ昼夜が逆転しているようにも見えた。

名前の由来はそれから来ていて『夜の光』からだとされている。“ されている ” というのはあくまでも正確にそうかと言われれば不明で曖昧なところもなきにしもあらずだからである。

そんな街にかくして二人はやってきたわけだが、街にやってきた二人に初めて感じさせたのはとても普通の人間には感じ取れないであろう違和感であった。

「……フランシスカ、気づきましたか？」

「ええ……。あなたも？」

ロゼの質問にフランシスカは答えた。

この、決して眠ることのないこの街。

それが今、眠りについていたのだ。どういふことかといえば、ネオンがすべて消えている。街自体が闇に包まれているのだ。

「流石はノータ……。違和感をすぐ感じ取れるとはね……。！」

声が虚空に響いた直後、空に爆発音が響く。

ドガザギギギ！！とまるで爪でガラスを引っ掻いたような音が響いた。

「……ガラスじゃない。巨大な鉤爪でビルのコンクリートを引っ掻いている?!」

「ご名答」フランシスカが虚空に向かって叫ぶと、また空に同じような声が響いた。

そして、空からゆっくりと何かが降りてきた。

それは、人間。紛う事なき、人間の姿がそこにはあった。

「……誰だ」

「……なんとなく解っているのでは？」

「……神殿協会」

フランシスカは小さく呟いた。

「ご名答です。……我が名は神殿協会“アサシン部隊”グレイペヤード・ナットレースと云う」

「アサシン部隊……。噂には聞いていたがまさかこの場に現れるとは……」

グレイペヤードの話に最初に答えたのはロゼだった。

「ほう！ ご存知でしたか？」

グレイペヤードはわざとらしく驚く素振りを見せて、薄ら笑いを浮かべた。

「……当たり前だ。……母を殺した連中だからな」

ロゼは一瞬躊躇いを見せたが、ゆつくりとその自分の言葉と対峙して……そして、決心したのか、ゆつくりと口に出した。

それを聞いてフランシスは驚きを隠せなかった。よくよく考えれば先程の会話で“母に関する説明”が乏しかったのを思い出せる。即ち、彼女は彼女自身でその記憶を封印していた、ということに為り得る。フランシスはそんなことを考えていたが、

「母を？ ……ああ、もしかしてあなたシャルーニユ公国の人間ですか」

グレイペヤードは無感動にこう告げた。

「……我々は一応傭兵みたいな役割でしてね。なんと云いますか……、半分神殿協会に仕えて我らが神に信心をしています、半分はただの傭兵です。言い方をもっと悪くすりゃ破落戸「ごろつき」です。……そして、あれは任務だったのですよ。私たちの上司神殿協会からの、ね」

「……即ち、母は神殿協会の真意に背いた、とでも？」

「そういうことなんでしょうね。神殿協会の真意に背くなんて相当な罰ですから殺されてもおかしくはない……んじゃないでしょうか？」

そう言つてグレイペヤードはまた薄ら笑いを浮かべた。まるで、ロゼたちを蔑むかのように。

「なるほど……。ならば、」

そう言つてロゼは何処からかサバイバルナイフを取り出し、構え、そしてグレイペヤードに向けて飛び込んだ。

「……でも、ちょっと熱すぎやしませんかねえ。せめて作戦でも考えればいいものを」

ロゼにはなにが起きたか全く解らなくなっていた。

それもそうだろう。ロゼは今グレイペヤードに両手を捕まれ、抑え込まれているのだから。

「なっ……!! いつの間に?!」

ロゼはただ、驚くことしか出来なかった。

「力だけではなく、ココも使わないとね？」

グレイペヤードは頭の、ちょうどこめかみあたりの位置を指差しながら言った。

「……………うぐっ……………!!」

ロゼはその後自分でも気づかない内に意識を失い、眠りに落ちた。

「何をする気?!」

残されたフランス力は口ゼから渡されたものではなく一応の事態に備えて用意していた拳銃を構え、言った。

「……ご安心ください。今回はあなたたちに危害を加える気は更々ありません。まだ命令もされておりませんし。彼女に関しても困惑してまともな戦闘が出来ないと判断したが故の決断です。なあに、ただ意識を失い気絶しているだけですよ」

「気絶しているだけ……?」

それを聞いてフランススカも安心してしまったのだろう。拳銃をもつ腕の力を緩めてしまっていた。

「……で、私がここにきたのは、まあ、列記とした理由がありましたですね。……そうそう、そういえば手紙を預かっていたんだった」

グレイペヤードはさっきとはうってかわっておっとりとした感じで自分の服の中にあると思われるその手紙を探していた。

「これだこれだ」

グレイペヤードはようやく手紙を　と言っただけのメモ書きにしか見えなくてもないが　発見して、それを見ながら話を始めた。

「えーと、じゃあ言わせて貰いますねー」

グレイペヤードは特に緊張感もなしに普通の感じで言った。

「我々神殿協会は全世界に対して宣戦布告する。これは聖戦であり神の名のもと、肅清を加える」

グレイペヤードは唐突に手紙の内容を話した。それは恐ろしくも冗談にしか見えない、そんな戯言に近い発言でもあった。そんな発言、誰が信じるんでも言うんだ、と言わんばかりにフランシスカは鼻で笑った。

「聖戦？ 神の名のもとに肅清？ 笑っちゃうね……！！ そんなこと出来るとでも思っているのか？」

「当然。完璧に成功するとは考えていない。神の名の許にこれを実行するのであって、実際には五分五分であろう」

グレイペヤードは今までの軽やかな口調とはかわり、厳かな雰囲気醸し出すようなそんな口調に変わった。

「しかしながら、我々は神に『この戦いに勝つ』ように命じられたのだ。この闘い、負けるわけにはいかぬ」

「ならば…… 今ここで戦うしかないかな？」

フランシスカはそう言って、グレイペヤードに向けて駆け出した。

3 - 4 (後書き)

更新はここまでとなります。少々遅れてすみません。いいところで切れてしまいましたが、ここまでの更新です。

理由と申しましては更新する『日にち』が少なかった、ということです。現在エブリスタ版のストックは『100字』あまりとなっています。これ以上の更新は到底無理です。

次回更新は01/11に予定しています。その時までには7〜8ページほど書いておきますのでそれくらい更新したいなーとか思っております！

P・S・100話&10万字達成しました。ありがとうございました。

そのころサリドたちはフランススカのマンションで適当に時間をつぶしていた。そうとはいっても今はサリドがベッドで眠り、グラムは眠たい目をこすりながらテレビ番組を遠い目で眺めていた。

「なあ……、今何時だ？」

ゆっくりと起き上がったサリドがグラムに尋ねた。

「一時くらいかな。安心しろ。あと30分は眠れるぞ」

「いや、そうじゃなくて……なんだろう。何処と無く嫌な予感がするんだよね……」

サリドはまだネオンライトで明るい夜の区々（まちまち）を眺め、不安げに呟いた。

？

そのころ。

「無駄だと言ってることが解り得ないのですか……。まったく、可哀想なことです」

グレイペヤードは何故か悲しげに呟いた。

その直後、フランシスカは自らに情けをかけていることを解り更に腹が立った。これはグレイペードからのものでもあり、同時に実戦（ここではヒュルフトームを用いた戦闘ではなく人間同士の、昔から続く闘いの意味をさす）の経験が全くない自分にも腹が立っていた。悔しくて、悔しくて、仕方なかった。

「……解りました」

そんなことをフランシスカは考えていたのだがグレイペードのその一言で我に返らされた。

「ほんとうは傷つけてはならないと言われたのですがね……。なんせあなたは“あのお方”の家族の友人だというのだから」

しかし、

「あなたが諦めないと言うならば、此方とも本気で戦わせていただきます。見せてあげますよ」

そう言うと、グレイペードは嫌味のあるニヒルな雰囲気醸し出した笑い方でこう言った。

「魔法、をね」

「……魔法？ ふざけるのも大概にしてくれないかしら？」

「いや、ふざけてなどはいませんよ……。そうか、あなたたち『資本主義国』は魔法を排除し科学を信仰した。それと異なり我々神殿協会を含めた『社会主義国』は科学の成長と引換に魔法の存続を決断した。……それがおよそ15年前、そう。『蒼空落花』によつて我々と資本主義国は明確に道を別れたのですよ」

「『蒼空落花』……？」

「……ああ。あなたたちのほうでは確か『プログライトの奇跡』と呼ぶのですかね？ プログライト戦争の開始した原因とも取れますが……、でもあれがなければ今頃我々は資本主義国と同様破滅の道を歩んでいたことでしょう」

グレイペヤードはずっと変わらない口調で淡々と述べた。何も知らぬ者に真実を突き詰めるにはそれで充分だった。

「……魔法が、ほんとに存在するといふのか？」

フランススカは何処と無く慌てているようにも見えた。

「ええ。魔法を使える人間は限られてはいますが、今や普通に魔法は用いれます。まあ科学信仰により魔法の大切さを忘れた資本主義国の人間には到底無理ですがね」

「へえ……。まあ、よくもここまで資本主義国の人間を虚仮こけに出来たものね？ しっぺ返しが何倍にも返ってくるかもしれないわよ？」

フランスカは今までのグレイペヤードの言葉をただ聞いて、笑うこともなく無表情かつ無感動にそう告げた。

「果たして、どうだろうね？ 君こそ……僕と戦ったことを後悔すると思うね」

刹那、グレイペヤードは宙に、舞った。

そのころサリドたちは夜の街を走っていた。理由は、急にサリドが何かを思い起こしたかのようにマンションを出て、街に向けて走り出したため。グラムも驚いて、数メートル後ろを走っていた。

「サリド……！！ 急にどうしたんだよ！！ ……っ！！」

「グラム、それはちょっと今は言えない。確信出来るまでは」

「確信、って…… いったいどういうことだ？！」

グラムはサリドに食いかかるように叫ぶ。走りながらなので息も絶え絶えだ。

「……ほら、やっぱ……！！」

急にサリドが立ち止まり、その景色を見て、言った。

「やっぱ、って……？」

グラムもサリドが見つめた方角を見て、そして、

呻いた。

「……どうなってんだ、こりゃ！！」

そこに広がっていたのは……倒れ込んでいた二人の姿だった。

「フランススカ！ ロゼ！」

サリドは直ぐ様それに気付いたようで、フランススカの方に向かっていき、グラムに目配せした。

「……はいはい、俺はロスベルグさんのほうに行きやいいんだな？」

そう言っただけでロスベルグの方へ向かい、彼女を抱き上げた。

思ったより体は軽かった。まあそこは淑女なので体調管理をきちつとしている証なのではないか、と思っただけで済まうがよくよく考えるとそれではおかしい事になる。

ノータは普通の女性軍人よりかは重労働を毎日、来る日も来る日もしていることになる。ヒュルフトームの操縦もそう簡単ではないのだ。

だからノータというのは平均的に女性らしいシャープでしなやかなボディに成人男性以上の筋肉がついているとなれば、自ずと体重は上がってしまう。これは質量保存の法則からも明らかなことだ。

しかし、彼女、ロスベルグは異なった。このボディに相応しい体重ほど重くはなかったのだ。まるで“重力に逆らって自らの体重を目減りさせている”かのように。

「グラム、なにしてるのさ！ 早くさっさとマンションに運ぼう！」

サリドはグラムに精一杯の声で叫ぶ。何処と無くフランススカを抱える腕が悲鳴をあげているのは気のせいだろうか？

「……ああ、そうだったな！」

そう言ってグラムとサリドは来た道をまた戻っていった。

そしてそれを頭上から眺めるポイントにグレイペヤードがいた。それには到底サリドたちには気付くことはなかったが。

「……………まあ……………あそこで来るとはある意味好都合であつたよ」

グレイペヤードは真摯な面持ちで語る。

「しかしながら……………サリド・マイクロツエフ……………。あのお方のお気に入りとことから観察対象に含めておいたが……………、なんだあれは？ あれじゃただの……………」

グレイペヤードがその言葉を言い切る前に短い電子音が夜の街に響いた。

「はい、こちらグレイペヤード」

グレイペヤードは懷から携帯端末を取り出して耳に当てた。

『グレイペヤード、ですね？ 任務の方へいかがですか？』

「……………レイシャリオ枢機卿……………ですか？」

『質問に答えなさい』

電話の主は語気を強めて質問を再び言った。

「……心配為さらずとも、任務は無事完了いたしました」

グレイペヤードは平坦のないのつぺりとした感じで答えた。

『そうですか。それは何より。これから頼みますよ。総ての平和を求める人へ』

「総ての平和を求める人へ……」

そう会話を交わし、グレイペヤードの携帯端末は通信を終了した。

？

そのころ、レイシャリオはオリンピアドームの空港そばにある廃倉庫にいた。

彼女はその場所には似つかわしい感じであつた。しかし彼女は嫌そうな表情を一つも見せずにいるのはやはり人の上に立つ人間ということなのか。

「枢機卿、」

不意に声がかかり、レイシャリオがその方を見ると見覚えのある人間の姿があつた。

「ナウラス……？」

「左様で御座います」

ナウラスはレイシャリオがナウラスの姿を確認したのを見てからお辞儀をした。

「何の用だ……？ 作戦ならば差し支えなく行われているはずだ」

「ええ、何も問題は発生しておりません。全てが順調です」

「……そう言うということは報告はそれだけか？」

レイシャリオが冷静に尋ねると、ナウラスは静かに頷いた。

「そうか。……で、それだけなら携帯端末を用いればいいだろう？
どうして直接ここまで来た？」

「……私はそういうデジタルものが嫌いでした。やはりアナログで
直接会って伝えた方が確実ですからね」

「なるほど……。しかし何の事もしないに来ては困るな。私とて神殿
協会の重鎮。捕まってはならない、全世界に我々の真の目的……そ
れが知られてしまうからな」

「ご心配なく、それなら……」

ナウラスはそう言って笑った。それと同時にドサドサと黒装束をし
た人間が倒れていった。

「私めが始末しておきました故、」

「……そうか。それなら別に……という訳でもないだろう？ お前
は自分の力に頼りすぎだ。少しは“ほかのもの”を信頼したらどう

だ？」

「すみません。さすがに枢機卿のご判断とはいえ、これは私のポリシー。例え死してなおこれは変えることはなりません」

「ふむ……。なぜ、そうなったのかは尋ねぬ信条ではあるが……、まあ仕方ない。とりあえず、報告ご苦労だった」

そうレイシャリオが労うと何も言うことはないと言ったかのようにナウラスは闇に溶け込んでいった。

3 - 8 (後書き)

次回更新：01 / 13 予定。

3 - 8 が少し長めですが、切るところが見つからなかったのでのこの
ような感じになってしまいました。誠に申し訳ありません。

日が明けた。次の競技までは半日を切った。

しかしながらフランススカ、それにロズベルグは今や疲労困憊さらにロズベルグにとっては重体に近い症状だった。

そんな中サリドとグラムは手術室代わりになっているフランススカのマンション、ベッドルームの前で祈るように座っていた。

「……大丈夫かな……。フランススカに口ゼ……」

サリドがまるで空気に溶け込ませたように呟いた。

「大丈夫……だろ。とりあえず俺らにはなににもできない……。こうやって祈ることしか……!!」

「解ってるよ!!」

サリドは今までの消えてしまいそうな声とは対称的に、絞り出したかのように叫んだ。

「……けど、けどさ。待っているだけじゃむず痒くなるじゃん……。ただ辛くなるじゃん……」

サリドは悲しんでいた。何も出来なむず痒さに。もう少し早く現場に辿り着けば彼女たちの傷も少なくて済んだだろう、という悲愴感。全ての気持ち、彼の中で戦っていた。その中で、彼の本当の思いが孤軍奮闘を成し遂げようとしていた。

「……ああ。解るさ。解るよ。けどな、俺たちには本当に何も出来ないんだ。祈るべき対象も居ないが、ここは祈ることしか出来ないんだ……!!」

グラムは気付くと、恐らく自分の気持ちとは逆に身体が働いているのだろうが、サリドの襟を持って殴りかかろうとしていた。

「……!!」

グラムはそれに気付くと、直ぐにサリドの襟から腕を放し、ソファに腰掛け、ただ項垂れていた。

手術室代わりのベッドルームの扉が開かれたのは、それから直ぐのことだった。

「……ラインスタイルさん。どうでしたか……?」

ちなみに手術を行っていたのは健康管理を担うラインスタイル。本業だからかてきぱきと進んでいた、らしい。

「成功ですよ。あんなキズなのに、出血が少なかった……。それもありますがね」

ラインスタイルは白衣を脱いで、笑って告げた。

「良かった……」

サリドはほっと胸を撫で下ろし、そして微笑んだ。それほど、心配していたのだ。

「すぐ回復しますよ。まあ、あの薬を持っていって本当によかった……。あれは本国には流通してない貴重なものですけどね」

それは使っているのか？　とか思ったサリドとグラムであった。

そして、

午後4時。

射撃場には多くの人間が集まっていた。

「さあ！ 二日目は射撃！ ノータたるもの視力もよくなくては！
動く的に狙って、射撃していただきます！！」

昨日一日休んだのか、昨日と同じく元気いっぱいであのアイドルは
司会をこなしていた。やはり彼女もプロなのだ、と観に来ていた
観客にそう思わせた。

「フランスカたちは大丈夫だろうか……。一応ライズウェルトさ
んが軍に伝えておいてくれたらしいけど……」

「ああ……。流石に今は世界トリアスロンの真っ最中だ。ここで
兵器を持ち込んで攻撃が他国の部隊にあたってみる？ 直ぐに戦争
が始まって、世界トリアスロンもペアさ」

サリドは、グラムがおおよそ何も考えずに言ったであろう言葉を聞
き、何かを思いついた。

「なるほど……！！ 神殿協会はそれが目的なのか……！！」

「グラム！」

グラムがサリドの異変に何があったのか尋ねようとする前にサリド本人から話を始めた。

「……どうした？ サリド」

「もし、神殿協会の目的が僕の考えた事なら、もうすぐこの射撃場で何かが起きるはずなんだ！ だからグラムはここを見張ってくれ！」

サリドは語気は強めながらも、他の人に知れてはパニック状態に陥る人間が出てきて現場の混乱が予想されるとして、聞こえないように静かに言った。

「……そういうが、お前は？」

「僕はリーフガットさんに説明して休暇の返上を。あと、なんとか上に通してヒュロルフタームの使用許可、更に皮相軍隊もね」

「……俺たちが慌てているうちにそんなに事態は深刻だったのか？」

「まあ、そうだね。とりあえず電話してくるよ」

サリドはそう言って席を外した。

サリドは射撃場の外　なるべく他の人間に聞こえないように、敵が何処にいるかはわからないからだ　に行き、端末を起動した。

『なんだ。サリド？　まさか私の休暇をぶち壊しにきたとか言うまいな？』

「申し訳ないですけど、その通りです。緊急事態が発生したもので」

『緊急事態？』リーフガットはうんざりそうな口調で、そう言った。

「神殿協会が“聖戦”と称して開戦宣言をしたのは聞いてますよね？」

『まあ、一応な。そういうのは軍の特別連絡網で知らされるからねで、それが？』

「奴らの目的が判明しました。確証は取れてないですけど、多分これで合ってるかと」

『……話せ』

リーフガットは今までの口調を改め　軍人としての、リーフガットになり、言った。

「彼等の目的は『オリンピアドーム』の破壊と殲滅です」

サリドは唐突に話を開始した。

『……、』

リーフガットは何も返さなかった。暫く、無言の時間が流れた。

『……なるほど。ならば、益々開戦宣言を承諾、相互の宣言を行い“戦争としての処理”を行ってはならないな』

リーフガットが暫くして、サリドの報告に答えた。

「いえ、ただこのままでは開戦宣言を相互承諾しない限りでは選手への妨害も続くことでしょう。今回の襲撃で、それは明らかになったことです」

『それはお前の言う通りだ。だが、どうすべきだ？ 開戦宣言相互承諾を行わなくても駄目、相互承諾を行えばあちらの思う壺……』

リーフガットはサリドに尋ねた。

「……開戦宣言を明日、行ってくれませんか。ただし、戦場はオリンピックアドーム内に限り、資本主義国と社会主義国との戦いに一団体として神殿協会も参戦を行う……ということだ」

『ん？ しかしそれでは、社会主義国と戦う必要がないと思うが？ 戦うのは神殿協会だけで充分だろう？』

「いえ、それはどうでしょうか？ たしかに本当の敵は神殿協会のみです。……ですが、僕にはそうは思えないんです」

『……共謀がいる、と？』

「はい。たぶん」

『……なるほど。確かにその可能性も考えられる……。解った。明日の正午開戦、資本主義国と社会主義国及び神殿協会の戦争、でいいんだな?』

「はい。それだけ解ってくれば結構です」

そう言つてサリドは通信を切った。

「ふう……。一先ずこんなところでいいか……」

サリドは通信を終えるとひとり、溜め息をついた。

「ワアアアア」

その直後に背中の方にある射撃場から歓声が沸き起こった。

「おっと、急いで見に行かなきゃな」

そう言つてサリドは振り返り、射撃場の方へと走っていった。

「遅かったな。何の話をしてたんだ？」

開口一番、グラムにはそんなことを言われたのでとりあえず適当にだが適当には思われない実に微妙なバランスの言葉を言っておいた。

「ああ。ちよつと話し込んでやって」

「そうか。とりあえず今オープニングが終わったところだ。歓声が外まで聞こえただろう？」

「ああ、そういえば、確かに」

「少しは言葉に抑揚をつけて喋りやがれこの馬鹿が」

「ワアアアアア」

再び歓声が聞こえ、サリドたちはそちらの方を見る。

ちよつと選手達が入場を開始していた頃で、彼等の目は現在優勝の最有力候補であるフランシスカとロゼに向けられていたようだ。彼女たちは多少の恥じらいはあるものの、昨日の“あれ”をもととせず、事情を知らない人間にはそれを感じさせないほど、そこに元気に立っていた。その姿を見て、サリドたちはまたほつと胸を撫で下ろすのだった。

？

その頃。どうとも形容し難い空間にて。

机が置かれ、椅子と人間の代わりに、柱のような光の棒が7、8個置かれていた。

「……報告をしておろう」

一番端の『FA01』と書かれた光の棒から声が響いた。

「ライジャック、まず君のオリジン私有化について、理由を聞かせて貰いたいな」

ライジャック、と呼ばれた人間は光の棒に囲まれ、鼻をヒクヒク痙攣させた。

そこにいたのは、女性だった。しかし彼女は一糸纏わぬ裸体になっており、紐で体を縛られていた。

「……なあ、ライジャックくん。我々もこうはしたくないんだ。君だって子供を産みたいだろう？ 幸せな人生を送りたいだろう？」

「……オリジン私有化は……私も確認して……いません……」

「ライジャックー!!」

「もういいだろう、リリース」

F A 0 1を制したのは隣にいたF A 0 2だった。

「……さて、ライジャックくん。今回の話は仕方ない。保留としよう。……しかし、次の作戦……。よもや忘れてはいまいな？」

「……ええ、解ってます。必ず、仰せのままに」

「頼むぞ……。総ての平和を求める人へ」

「総ての平和を求める人へ……」

ライジャックはF A 0 2の言葉を復唱した。

それを見計らったかのように周りの背景が、消えた。

ライジャックは紐をほどいてもらい、服を着るためにシャワーを浴びた。その時に紐のささくれにより痛んだ皮膚が悲鳴をあげる。

「……っ!」

ライジャックは指を下半身の方へと持っていく。臀部、陰部、太股、ふくらはぎのあたり脹ら脛に蹠。全ての部位がささくれの接触による痛みと赤みをもっていた。

「……いつまで続くのやら……。組織のリーダーもいいことばかりでは……ない、な」

ライジャックは一言呟いて、鼻歌を混じらせながらシャワーで髪を洗い始めた。

十

シャワーを終え、バスローブを着て、空を眺めた。そこに広がっていたのはつい最近あった国の役人によるクーデターと“表向きに伝えられている”ものの残骸と復興をしてきた区々だった。

彼女は思い立ったかのように本を手に取り、よんだ。タイトルは『レイザリー正史???』と書かれていた。

彼女はライジャック・ポーリオ・レイザリーといい、レイザリー王

国第30代国王であつた。

？

射撃に関しては特筆するところもなく普通に終わってしまった。強いていうなら、他の人間があつという間に終わってしまったのと、フランススカやロゼがあつという間に終えてしまつたりしたので、終了が30分程早まつた、というくらいか。

「あつという間に終わつちまつたなあ」

「まさかそこまで速いだなんて。ガンマンも吃驚だよ」
びっくり

「……まあ、フランススカもロゼさんも凄腕のノータなのでしょう？ ならばそこまで言うことはないんじゃない？……」

二人の会話にラインスタイルが割り入ってきた。

「あれ？ ラインスタイルさん、どうしたんです……？」

「……姉の付き添い」

それを言うのと同時に能天気な姉、ライズウェルトがラインスタイルの後ろから挨拶する。

「昨日は災難だったようね？」

ライズウェルトは開口一番でサリドたちの身の回りに昨日起きたこ

とを労った。

「いやあ……、はい。まあ、ひどかったです」

「世間話はそこまでにして、報告を行うわ」

「世間話を始めたのはあなたですよね……？」

サリドは溜め息をつきながら、呟いた。

「一回しか言わないから驚かないで、よく聞いて。実はAMWAD^{アンラ}EMが施行決定となりましたが、その施行開始は今晚21時に変更となりました」

「今日許可を求めてその日中に開戦とかただけ暇なんですか」

サリドはライズウェルトの報告にツツコミを入れながらも緊張を走らせ始めていた。

AMWADEM…… Ask Make a War on Dec
larative statement Mutualの略でその
名の通り、『開戦宣言相互承諾』の略である。上手く略せていない
のがちょっと惜しいところではあるが『開戦宣言相互承諾』だと少
し長ったらしいところもあるので、このようになっていく。

「ちょっと待てよ。21時といったら……、あと数時間もねえぞ？
！ 観衆とかはどうするんだ？」

「そこは安心にお守りします。ノータも数名来ますし、第三世代の
ヒュロルフチームも見れる、貴重なチャンスと思っただ方がいいと思
いますよ？ 良く考えようと悪く考えようとどうせ開戦宣言相
互承諾が施行された今、私たちに戦争を回避させることなんて万が
ひとつでも不可能だと思っただ方がいい。……これは軍からの報告で
はなく、私個人からのアドバイスよ」

第三世代のヒュロルフチームをサリドとグラムは以前にも見たこと
があった。フランススカに至っては操られてはいたものの、それを

操縦した人間でもある。

ヴァリヤー・リオール……グラムの父親が謀反を起こし個人所有していた第三世代のヒュロルフチームを用いたクーデターがあった。

サリドとグラムはそれから首都を守るため、健闘し、第三世代を無事凍結、パイロットを管理下におくことに成功した。

「……第三世代……。まさかそんなに早く完成するものなんですか？　確かヴァリヤーが個人所有していた一機だけだったような……」

「それが、何処に隠してたのか解らないけどレイザリーは秘密裏にさらに一機制作していたようなの。まあ、国の情報は鵜呑みにや出来ないから、きっとまだまだあるんだろうけど」

ライズウェルトは呟くように言った。

そして、

「さ、報告は終わり。残りの時間は……あと74分程といったところね。さっさと神殿協会なんかぶっ潰してしまいましょ。私だってさっさと休みたいからね？」

そう言っただけでライズウェルトは振り返り、フランススカのマンションがある方へ歩いていった。

3 - 1 4 (後書き)

次回更新：01 / 18 予定

ストックが予想以上に溜まったので6話分更新しました。次回もこれくらい更新できたらいいなあと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6817w/>

FORSE

2012年1月13日21時53分発行